

深海の白鯨

黒川 文



目次

はじめに	1
1. 太平洋上空	
(1)	4
(2)	9
(3)	14
2. 東京	
(1)	20
(2)	25
(3)	30
3. 永田町	
(1)	36
(2)	41
(3)	46
4. 上野キャンパス	
(1)	54
(2)	59
(3)	64
5. 赤坂	
(1)	70
(2)	75
(3)	81
6. 浦賀水道	
(1)	88
(2)	94
(3)	100
7. 対潜哨戒機	
(1)	106
(2)	111

(3)	115
-----------------	-----

あとがき

あとがき	120
----------------	-----

はじめに

この物語は、オンライン発表のための書き下ろし作品です。

既刊である「天空の狙撃手」（いるかネットブックス）の姉妹作品的なものです。物語中で用いた人名や組織名は架空のものです。

< A I の利用について >

表紙絵の一部に生成 A I を使用しています。

- ・ 本文：著者のオリジナル作品
- ・ 表紙画像

編集：コミ Po!（漫画作成ソフト）

キャラクター：コミ Po!

潜水艦画像：Canva（生成 A I）

フォント：鈴木竹治プレミアムフォント（あつまるカンパニー）

1. 太平洋上空

(1)

二〇二六年九月九日、水曜日。

午前一〇時一〇分。

すぐ真下の海上で艦艇が炎を吹き上げ、爆発を繰り返していた。

黒煙が上空まで漂い、乗員たちは海へと飛び込む。近くにいたと思われる別の小型艦が乗員たちに近づき、そして救助活動をしていた。

黒澤芽衣は、太平洋上空を飛ぶ対潜哨戒機P3Cオライオンの指揮所にいた。

目の前には五基の液晶ディスプレイが並び、そのひとつを凝視していた。ディスプレイ上部には磁気探知装置とラベルが貼られていた。多分、この位置から五〇〇メートル下の海中の何かを探しているものと考えられた。

「何か見えますか？」

と、芽衣の隣から画面を見ていたスコフスキー博士が尋ねた。

「あの？ あれってヤバいのではないですか？ ものすごい火災ですよ！」

「被害は甚大です。しかし、それはわたしたちの目的ではありません。気にせず目標物を探してください」

「でも……」

芽衣が計器を見るとパネルに海上にいる艦船のデータが表示されていた。爆発して黒煙を噴き上げているのはアメリカ海軍の駆逐艦、J. J. トムソン。救助に当たっているのは同じく海軍のミサイル・フリゲート艦のジェームズ・マクスウェルだった。この海域で何をしていて、なぜ爆発したのかは、パネルではわからない。芽衣たちがここへ来る何時間か前に「何か」があったのだろうことは想像がついた。しかし、スコフスキー博士は気にするなと言っている。芽衣は元の作業へ戻った。海上に放り出された乗員たちが無事に救助されるのを祈りながら。

「この黒い点々はノイズだと思います」

芽衣は短く答えた。

自分が何をさせられているのか？ よくわからないままの任務だった。いや、任務とも呼べないかも知れない。本来ならアメリカ西海岸沿いの町にあるサンディエゴ工科大学で学会発表に出席しているはずだった。

それが、なぜかその時間にこうして太平洋上空を飛ぶ対潜哨戒機に乘せられている。

一点、不審に感じたのは、この機…… P 3 C オライオンはすでに退役しているはずのものだったことと、機体には白い塗装に青いラインが描かれ、さらにはアメリカ海軍の表示も一切なく、英文字で「オライオン・エア・サービス・リミテッド」という社名らしきものが入っていたことだ。

すでにアメリカ海軍では P 3 C は、新しい機種である P 8 A ポセイドンに置き換えられているはずだった。そして、乗員はこの指揮所には航空会社の作業服を着た人員で占められ、機長と操縦士はよく見えなかったが、やはり、海軍のスタッフではないみたいだった。

「スコフスキー博士。ノイズには時間で変化するものと位置で変化するものがあります。もう一度同じ場所に飛んでもらえないでしょうか」

「OK。……おい！」

スコフスキー博士は耳に取り付けたインカムで操縦席に進路変更の指示を伝えた。

時間で変化するノイズは海面での電波の乱反射などがあり、位置で変化するものは陸地の地形で乱反射するものだ。どちらかを定めてフィルターを掛けると、そのノイズの中から何かが浮かび上がる。このときの芽衣にはどちらかであることを示す情報は入っていなかった。

機体はゆっくりと旋回して来た道をさかのぼって行った。

芽衣は腕時計をチラリと見た。——こんな所でこんなことをしていていいのだろうか。本来ならば学会で研究発表をして、他の発表者の講演も聴き、帰国してから上司である山本教授に報告書を出さなければならなかった。こんな所で時間を無駄にしているは何も報告出来なくなってしまう。

それでなくても、修士一年の大学院生は多忙だった。

「元の出発点に戻りましたよ。ミス・クロサワ」

「あ、はい。最初の針路から五度ほど左右どちらかに振ってください」

「OK」

スコフスキー博士は再び操縦士へ指示を飛ばした。

芽衣は液晶ディスプレイの下にあるキーボードを操作した。信号にフィルターを掛けるためだ。表示されるのは横軸に磁気センサーからの角度、縦軸には時間、すなわち位置となる。

「あっ！」

と、スコフスキー博士が声を上げた。

芽衣には何を意味するのかよくわからないままに、彼の視線の先を見つめた。

——何かが海中にある。ノイズから浮かび上がった何らかの「線」。それが情報の全てだった。

「スコフスキー博士。これって？」

「多分、これだと思います。……おい！」

彼はインカムで後部オペレータに告げた。「ソノブイ投下！」と。

芽衣が機体下部を映し出すカメラの白黒映像を見ていたらシュポッと音を立てて、五本の棒状のソノブイが連続して投下されていった。機体から出てすぐにパラシュートを開き、ゆっくりと海面に落ちていく。着水前にそのパラシュートを切り離して本体だけが海面に落ちる。そして、本体から信号送信用のアンテナを伸展して、さらに海中五メートルの位置へと集音マイクを侵入させた。

芽衣はスコフスキー博士と共に、隣の液晶ディスプレイの前へと移動した。

画面には横軸に海中から発せられる音の周波数、縦軸に時間が表示された。

鯨の鳴き声、海上をゆく船舶の音。

そうしたものは、ディスプレイ上では線として表示される。

しかし、異音は一切なかった。

「ふむ」

と、スコフスキー博士は息を漏らした。

「何かありますか？」

「見えない。が、確かにいるはずだ。……おい！」

と、再度後部スタッフへ命令を飛ばした。探信音波と彼は口にした。

カーン、カーンとソノブイから音が発せられる。海中に何かの物体があれば、そこで反射して集音マイクに探知される仕組みだった。

——しかし、期待にはそぐわず、ディスプレイ上には海底の地形と海中をゆく鯨しか表示されなかった。芽衣は「空振り」だと思ったが、スコフスキー博士の目は一層鋭さを増した様に見えた。まるで、何もないのが「何かがある」証拠の様な扱いだった。と、芽衣は頭の中で、海中で起きていることを思い浮かべた。

「あの？」

「何です？」

「どうして、それがここにいるとわかったんですか？」

「それ？ それは言えません」

と、彼は答えた。

磁気センサーにもかからず、ソノブイにも反応がない。

つまり何もないと言うことをこの機体のセンサーが示していた。しかし、彼はそこに「何か」を見ていたのだ。その証拠に、すぐさまインカムではなく衛星回線でサンディエゴの基地らしき場所へ、ここであつた出来事を手短かに伝えていた。

五時間前。この機に乗せられるときに、簡単な説明があつた。

——四八時間前にこの近くを航行するアメリカ海軍の駆逐艦のレーダーが海面に何か映るのを検知したということだった。そして、その場所にひとり分のライフジャケット

トも見つかっていると。

それが何を意味するのか、肝心な所で何も説明はなかった。

多分、何かを探しているのだろう。そして、それは目に見えるものではなく……おそらくは潜水艦だと思われた。しかし、そうであれば、この対潜哨戒機の磁気センサーやソノブイの音響探知で存在そのものがわかってしまうはずだった。

それ以前に、スコフスキー博士は存在を示すものがない、その事実がこの探し物の存在の証拠だと言わんばかりの態度だった。

気に入らないのは、事実と、探し物が何であるのかをこちらに告げないことだ。それでいて、探し物を文字通り探させられているのだ。

なぜこんなことをしているのだろうか？

芽衣は元々は学会に参加するべく準備をしてサンディエゴまで来てたのだ。

空港に迎えが来ていることに、少しだけ特別感を味わった。大学まで送ってくれるものとはばかり思っていたのだ。しかし、実際にはアメリカ海軍の基地へ連れて行かれ、その上、海軍機っぽい機体に乗るよう指示されたのだ。「はい」と言うだけで、海軍ではなさそうな機体とスタッフだった。

そして、学会からの招聘状も通常と比べて極めて急だった。手持ちの論文があればこそ助かったが、そうでなければ上を下への大騒ぎになっていたに違いない。多分、山本教授も出席の許可なんか出さなかっただろう。

——もし、このままサンディエゴへ戻り、そのまま帰国と言うことになったらどうなるのだろうか？ と、芽衣は素朴な不安がわき上がったほどだ。大学へ行けば図書館などで適当な論文集が見つかるかも知れない。そのコピーを取らせてもらい、報告書にはその骨子だけを書いて出しておけばいいのかなとも思っていた。

「スコフスキー博士。ちょっといいですか？」

芽衣は彼の目をにらみつけた。

「何です？」

「サンディエゴ工科大学での学会の件です。あれって本物なんですよ？」

「ああ……」

彼は即答出来なかった。「実は東京の大使館からあなたが適任だと推薦を受けたのですよ。極めて優秀だと。そして結果を残した」

「はい？」

「学会は架空のものです。気の毒ですが」

「ええーっ！」

「でもご安心ください。情報部……ああ、いや、こちらのスタッフが論文集など、学会へ出席したと言う証拠は揃えていますよ。後は……ギャラの件ですが」

「何です？ それは？」

「あなたの上司である山本教授との間で商談が成立しています」

「オウ！」

と、芽衣はため息を漏らした。

しかし、山本教授が知っているのなら、それはそれで問題がなかった。そして、彼はお金には汚い所がある。航空チケット代とプラスして、何万ドルかのギャラが支払われるなら、大学院生など世界のどこへでも出張させていたに違いない。

「ちなみに大使館とは誰のことなのですか？」

「海軍駐在武官のジョン・マッケイ大佐ですよ。あなたもよくご存じでしょう？　彼はあなたのことを非常に高く評価していました。それゆえ、機密事項に関わらず、あなたを当機に乗せることになったのですよ」

駐在武官とは大使館に駐在する軍のスタッフのことだ。

普段は相手国の外務省とよしみを通じ、有事の際には軍や自衛隊幹部と連絡を行うための役職だった。以前からマッケイ大佐には色んな手伝いをさせられていた。

その瞬間、指揮所の海上監視カメラが白く光を放ち、機内に「ピーッ」という警報音が鳴り響いた。

「スコフスキー博士！　国籍不明機からのレーダー波を受信しました！」

「オウ！　回避だ！」

「ラジャー！」

指揮所と操縦席との間で短いやり取りがなされ、その直後、乗っていた機体は左へ急旋回し、そして高度をぐんぐんと上げた。もしかしたら、ミサイルに狙われたのかなど、芽衣は漠然と考えた。本来なら自分の命もかかっている出来事だったが、あまりの現実感のなさに、そんな風には思えなかった。

もしかしたら、戦争なんてものは実際にはなくて、軍人役のひとと政治家役のひとたちが口裏を合わせて、あちこちで起こっている戦争や地域紛争を演じているだけかも知れないと、軽い現実逃避感に苛まれてしまう。

しかし、そんなものはひとそれぞれだろう。

所詮、テレビカメラの向こう側の世界の出来事だし、自分がその場に追い込まれて、暴力なり飢餓なり、悲惨な目に遭うことがなければ、死ぬまでそんなやばい世界にいることなど感じないのかも知れないなと思った。

(2)

九月一〇日、木曜日。

午前一〇時。芽衣はサンディエゴ国際空港・ターミナル2の待合で椅子に腰掛けて、放心状態になっていた。

元々は昨日の朝から夕方にかけて、学会発表に出席する予定で、行きの航空機内でも発表原稿のチェックで寝ていなかったし、時差ボケと対潜哨戒機に寄せられたせいもあり、緊張で眠れていなかった。ここに来て帰りの便を待っていると猛烈な眠気に襲われていた。

——結局、どこに連れて行かれたのだろうか？

それを疑問に思い、ポーチの中からスマートホンを取り出して画面を見た。

G P Sで動きが記録されているはず……だったのだが、スイッチが切られていた。確か、対潜哨戒機に搭乗したときに計器にノイズが走るからと取り上げられ、降りるまで返してもらえなかったのだ。しかし、飛行時間から見てサンディエゴの海軍基地から西へ六〇〇キロくらいまで移動していそうに思った。かなりの過酷な勤務と言えた。

「ふうっ」とため息が出た。

眠くて仕方がなかったが、機内に乗り込み座席につくまで寝るわけには行かない。

——待てよ。

芽衣はスコフスキー博士の行動を思い起こした。

何か検知出来ないものを探すのに、わざわざ嘘をついてまで芽衣を東京から呼び寄せたのだ。もう、よっぽどの事情があったのだろう。いるはずのものが見つからない。もしかしたらI C B Mとかヤバいものかも知れなかった。

そして……。芽衣は転んでもただでは起きないタイプだった。

ポケットに密かにU S Bメモリーを持ち、それを飛行中のコンピュータに差し込んでいたのだ。液晶画面の信号にフィルタを掛けたり、色々加工する間、内緒でデータを落とし込んでいた。

ふと、目を上げると黒っぽいスーツに身を包んだ、背の高い白人男性が空いている席を探して立ち止まっていた。顔を見て芽衣は、あれ？ と、思った。

「オーヴィル？」

大学院の同じ研究室にいる留学生だった。博士院生なので芽衣よりは三つほど年上だった。しかし、毎日顔を合わせているのだ。アメリカに行くのなら一言声を掛けてもらいたかった気分だ。

しかし、彼は聞えぬ風を装い視線をこちらにやることなく、まだキョロキョロと席を探していた。芽衣は立ち上がり、片手で彼の肩をポンと叩いた。

彼はキョトンとした目で芽衣を見た。——似ているだけで、違うひとだったのだろう。少し慌てたが、やはり、オーヴィルで間違いない。

「オーヴィルですよ？」

芽衣がそう念を押すと、彼は首を横に振った。

「人違いではないか。わたしはオーヴィルではない」

「え、でも、東都大の計算機物理にいらっしゃいますよね？」

ここに来て芽衣は自分の記憶に自信がなくなってきた。

「双子の弟でオーヴィルと言う男がいて、確かに東京に留学しているが……」

「え？ 双子の兄弟なのですか？ 失礼しました」

双子の兄がいることは聞いたことがなかった。

「僕はウィルバー・ライトマン。あのライト兄弟と似た名前だが、親戚でもなんでもない」

「ああ……。あの、これから日本へ？」

「ああ、仕事でね」

「やっぱり物理学者なのですか？」

芽衣が目を輝かせながら尋ねると、彼は一瞬上を見上げて向き直った。

「うちの家族で学者をしているのは、彼だけだ。わたしは外交官なのだよ」

「え？ そうだったのですね。これから東京へ行かれるのですか？」

「元々、赴任が決まったばかりなんだが、急な会議があつてね。詳しくは言えないが。たといオーヴィルの友人だとしてもだ」

「外交官？」

「ああ」

——完全な勘違いではなかったことに、芽衣は安堵の息を漏らした。見た目での判断はある程度間違いないものだ。確かに普段接することのない外国人であれば、見間違ふこともあるだろう。しかし、オーヴィル・ライトマンとは同じ研究室で席が隣だったし、いつも遅くまで議論をしている仲でもある。

不意に壁の上部にある、航空機の行先掲示板がカラカラと音を立てて記載が変わった。芽衣は乗るべき機体の準備が終わったのだと思い、見上げた。

案に相違して「キャンセルド」の表示に切り替わった。アナウンスが発せられた。

「ノースライトニング航空、サンディエゴ発・東京行き、121便。機体故障のため欠航となります。まことに申し訳ありません。代わりの機体は明日一〇時に離陸予定です」

「ええーっ！」

芽衣は叫んだ。

元々、架空の学会への出張だった。そのことは上司の山本教授も知っている。真っ直ぐ帰着して大学へ顔を出すことになっていたのだ。ちょうど時期的に学部四年生の研究の中間発表会が行われることになっていた。芽衣が担当している学生のフォローもしなくてはならないし、そもそも、大学院生に欠席の選択肢はなかった。

オロオロする中、ウィルバー・ライトマンはポケットからスマートフォンを取り出し、どこかへ掛けていた。相手は空軍基地の様だった。

「心配しなくていい。小型ジェットだが輸送機を手配してもらおう。君も乗せてあげようか？」

——空軍にそんなことを要請して、それが簡単に受け入れられる。彼のことが単なる外交官でないことをうかがわせた。本気にしていいのだろうか。それに芽衣をこの地まで呼び寄せたのは、民間機を装って対潜哨戒機を飛ばしているヤバイ組織だった。関係があるのだろうか。

芽衣が疑問に思う中、彼は別の窓口へと歩を進めた。

何だかまづいシチュエーションだと思いつつも、出来るだけ短時間で欠航をフォローできる手段を考えなければならない身の上だった。断る理由はひとつもない。イレギュラーな手段ということを除けば。

しばらく待つうち、どこかの空軍基地から派遣されたのだと思われる機体が、滑走路脇へと移動して、搭乗待ちの状態となった。

「C37・ガルフストリームVだ。行先は成田ではなく横田となるがね」

「乗ってもいいんですか？」

「君の仕事内容に興味もあるしね。さっきスコフスキー博士に聞いたよ」

「うっ」

ウィルバー・ライトマンの申し出を断り、出発を一日遅らせることも考えた。

こちらでの一泊分のホテル代は航空会社が負担してくれるかも知れないし、費用的な心配はあまりなかった。しかし、出来れば山本教授に「出来ない奴」と言う評価を受けたくもなかった。それに中間発表の学生のことにも気になる。

そして……。ここしばらく、ほとんど睡眠を取っていなかった。

小型ジェットで悠々と過ごせられれば、かなりありがたい話である。元の便はエコノミークラスであり、寝られるかどうかは自信がなかった。ただ、彼の興味が芽衣の仕事にあるとしたら、そんなこと第三者へ口外してもいいのか、それも疑問だった。彼の話しぶりからはライトマンもスコフスキー博士と同業者にも思える。

芽衣は彼のオファーに応じた。

ウィルバー・ライトマンは、すでに用なしとなったカウンターを後に、すたすたと歩いた。この空港のことは隅から隅まで知っていると言わんばかりの行動ぶりだった。そ

して、細い通路にたどり着いた。芽衣は持っていたキャリーバッグをガラガラと音を立てさせながら引っ張り彼の後を追った。

搭乗口ではなかった。

彼は扉を開けてそのまま地上へと続く階段を下りていった。

この先に何があるのだろうか？ 芽衣はキャリーバッグを抱えておたおたとよろめきながら階段を下りた。彼は腰に手をやり、辺りを見渡した。しばらくして、小型機がすごい速度で動き出して、そのまま彼のいる場所へと地上を移動し、そして停止した。

胴体の横がすっと開いた。階段と扉が兼用になっていた。アメリカ空軍の飛行服に身を固めた乗員が降りてきて、ウィルバー・ライトマンを迎えた。

「ご苦労。また厄介になるよ」

「はっ！」

乗員は敬礼をした。

「急ぐぞ」

と、彼は芽衣に向き直った。

——大学院生のオーヴィルの双子の兄。どうして、こんなに偉そうに出来るのだろうか？

芽衣は不審にすら思った。もしかしたら……。

搭乗して、小型ジェットはすぐに離陸した。

地上には他にも離陸待ちの航空機が一杯だった。にも関わらず、着陸も離陸も最優先だった。軍用機だからだろうか。不思議に思いながらも座席に着きシートベルトをつけ、しばらく経つと深い眠りに落ちていった。

何時間、眠りこけていたのだろう。

芽衣は肩を揺すられて目を覚ました。

「もう、日本時間の朝六時だ。起きないと時差ボケを起こすぞ」

と、ライトマンが言った。芽衣はハッとして腕時計を見た。最初にアメリカ行きの飛行機に乗った時のままの日本時間を示していた。サンディエゴへ到着した際に修正するのをすっかり忘れていたのだ。あの時は、着いた途端にスコフスキー博士と名乗った彼にそのまま連れ去られたのだ。

それを考えると、ライトマンの方が少しは親切なのかなと、芽衣は眠い目を擦りながら考えた。しかし、それが思い過ごしであることに気づくのに時間はかからなかった。

「サンディエゴでは何をしていたんだ？ スコフスキー博士とは何を？」

ライトマンは偉そうな態度で芽衣を尋問した。

「あの！ ライトマンさんは情報関係者なのですか？」

「それは言えない」

——そうはい言いつつも、彼のこれまでの行動からはそれ以外に考えられなかった。

しかし、である。当のスコフスキー博士からは何も口止めはされていなかった。ギャラの入った封筒をもらっただけである。普通は他言無用だくらいは言うだろう。

「実は……」

「対潜哨戒機に寄せられた。何かを探すよう指示された。違うか？」

「ああ、ご存知だったのですか？」

「いや、君の言動から分析した。しかし、スコフスキー博士は知っている」

「やっぱり、情報関係者なのですね？」

「アメリカ合衆国には大小合わせて二十五の情報機関がある。一番上の国家情報局では全体を管理しているが、末端の工作人員は自分の上司しか知らないのが現状だ」

と、彼は自分のことは何も言わなかった。

「でも、そうだとしたら、あたしもライトマンさんに言ってもいいのか、ダメなのかわかりませんよ」

「彼は潜水艦が専門だ」

「やっぱり！」

「ふん、正直だな」

——やっぱりカマをかけられた？

「何を探すのかは教えられていませんでした」

と、芽衣は正直に打ち明けた。——真実を話す必要はないし、嘘を話す理由もなかった。

「ふむ」

と、ライトマンは鼻から息を吐き出し、そのまま目をつぶった。何か事情があるみたいだった。そして、急に話題を変えた。

「パスポートを出しなさい」

「はい？」

芽衣はいきなり命令にも似た言葉に、一瞬意味が取れなかった。

「この機は横田基地へ直行する。俺はいいが、民間人がこのルートを使うと出入国記録が残らない。つまり、君が日本へ密入国したことになるっていしまう」

彼はそう言って、乗員に持って来させた箱の中からスタンプを取り出し、芽衣から受け取ったパスポートの一番新しいページにポン、ポンと二箇所、押した。返されたものを見ると、ちゃんとサンディエゴと成田の出入国管理のものだった。こんなものまで用意しているのか。そして、入国管理のシステムも書き換えたと言う。芽衣は少し恐ろしくも感じた。

(3)

ウィルバー・ライトマンは芽衣の反応を見ながら、手元のタブレットを操作した。

芽衣は仔細に彼の行動を読み取った。窓ガラスに反射するタブレットの光を見た。

——DARPA。と言う文字があった。

国防総省・開発局の名称だ。スコフスキー博士の所属組織らしきものと紐づけられているみたいだった。芽衣は何となく、彼らの行動の裏側にあるものを嗅ぎ取った。

何を目的としたものかはわからない。しかし、新型であろう潜水艦が行方不明になり、開発責任者のスコフスキー博士が事態の収集を図ろうとしていたのだ。そして、海軍の協力を取り付けたのか、いや、元々が海軍からの要請で開発がなされていたのだろう。あの怪しげな対潜哨戒機であるP3Cを飛ばし、信号分析のためにわざわざ日本から自分を呼び出したのだ。

——謎の潜水艦。

優秀な科学者であるスコフスキー博士ですら、跡を追えないほどの高度な性能を有していると思われた。芽衣がコンピュータを操作している間も。磁器探知機にも掛からなかったし、ソノブイの音響探知にも反応がなかったのだ。従来技術では探知出来ないほどの性能なのだろうか。さっき、密かに入手した潜水艦の情報をダウンロードしたUSBの情報を合わせて見ても、通常型のものではないことをうかがわせていた。

「君……」

「はい？」

ウィルバー・ライトマンはタブレットを膝の上に置き、茶色の瞳で芽衣を見た。

——画面を盗み見たことを悟られたのだろうか。芽衣は少しだけ不安になった。やっぱり、ヤバい組織なのか。その可能性は十分あった。

「君たちが追っていた潜水艦だ。どんなものなのか、わかるのか？」

と、彼の口ぶりは、どうやら、あの潜水艦が海軍の一部とDARPAの責任者しか知らない存在であることを示唆していた。

「ライトマンさん。それはあなたもご存知ですよ。事態の収集のために東京の会議へご出席される？」

「君は、思っていたより切れるひとの様だ。腹を割って話そう。わたしもあの潜水艦に関しては、存在することだけしか知らされていない。大きさ、パワー、武器、潜航深度や作戦期間。それらは謎のままとなっている」

「知らずに追っているんですか？」

「さっき言った通りだよ。末端のメンバーは自分の上司しか知らされていない。特に今回の様なものは、例外中の例外が重ねられている。そもそもDARPAは実戦兵器を扱ってはいない。あくまでも未来技術の開拓者的なものだ。そこで開発されたのか、まだ開発中なのかよくわからないものが、何故か太平洋の真ん中で行方をくらませているとか言いようがない事態を生み出している」

「あの？ 現場に到着する前に海上で黒煙を噴き上げている駆逐艦がいたんです。あれと関係があるのですか？」

芽衣が質問するとウィルバー・ライトマンはフッと目をそらせた。

——凶星？

それが本当だとしたら、あの潜水艦が姿をくらませて、海軍の航空機と艦艇がそれを追っていたことになる。そして、追い詰めて、すんでの所で振り返りに遭ってしまったのだろう。魚雷や対艦ミサイルみたいなものだ。そして、悠々と太平洋の海面下を航行しているのだ。どこに向かっているのか、その答えが目の前にいるライトマンの行動が示していた。

「君……。P3Cに乗ったと言ったな」

「え？ あ、はい」

「そして、民間機の塗装だったと？」

「はい。それが何か？」

芽衣は一瞬、彼の口から謎のミッションの全貌が語られるのを期待した。何事も謎のままと言うより、何か答えが欲しいものだ。それが不確定だとしても。

「本当にP3Cだったのだろうか？ どう思う？」

「え？ と、言いますと？」

「二通り考えられる。民間機を装ったP3Cだった。もうひとつはP3Cを装った民間機だった。どっちだと思う？」

「ええーっ！」

「君はP3Cに乗ったことはあるのか？ これまでに」

「そんなこと言われても。大使館におられるマッケイ大佐の案内で基地に行ったことがあるだけです。中に入ったのは初めてでした」

「なるほどな」

「でも、そんなことってよくあるのですか？」

「すでにP3Cは退役した機種だ。海軍が使用したとすれば、現行のP8Aポセイダンのはずだ。何を好んでそんな旧式の機体を使う理由があるのか？」

「そんなこと……あたしに言われても」

「スコフスキー博士とは、これまでに面識はあるのか？」

「いいえ。今回が初めてです。それに、本当はサンディエゴ工科大学での物理学会への出席が目的だったんです。こちらの上司である山本教授から指示されてのことでした。も

しかしたらマッケイ大佐からの任務が最初からこっちだったのか、あるいは、教授も知らずに話が進んでいたのかも、実際のところわかりません」

「スコフスキー博士は本物なのだろうか？」

「ええーっ！　そこまで疑うんですか？」

「まずは検証せよ。これがこの世界の鉄則だ。恋人が『愛している』と言ったとしても、それを客観的証拠で検証しなければならない」

ウィルバー・ライトマンはそこまで言い切った。

芽衣は、そんな考え方にはついていけないと思った。

「なぜ彼らはP3Cを使ったのだろう？」

「ええと……。たまたま手持ちの飛行機でそれしか使えないとか。ああ、もしかしたら」

「何だ？」

「中身のコンピュータは、かなり新しかったんです。昔の飛行機にしては設備が新し過ぎる。そんな印象はありました」

「なるほどね」

芽衣は手元のパソコンを開き、今回使用した論文と、学会で発表される資料集を画面に展開した。錚々たる顔ぶれだった。理論物理学の大家と呼ばれる科学者と、計算機物理学でかなり有名な研究者の名前が上がっていた。そして、その中にディック・スコフスキーの名前と顔写真があった。確かに芽衣が会ったスコフスキー博士そのものだった。ただし、素粒子と力場の相互作用が専門で、どう見ても対潜哨戒機P3Cに乗って正体不明の潜水艦らしきものを追いかけているとは考えにくい。

目の前のウィルバー・ライトマンが言う通り、やはり、他のデータから検証しなければならないのかも知れなかった。

「山本教授にリクエストしたのは誰なのだ？」

「ええと。アメリカ大使館の文化・科学交流センターの技官からだと聞いています。具体的には駐在武官のマッケイ大佐からの推薦があったらしいのですが、詳細は把握していません」

「技官とは誰のことか？」

「ええと。マッケイ大佐からの情報にはありませんでした」

「そして、君はいいように使われた？」

「その点は面目次第もございません」

「その学会資料は偽のものだろう。だとしたら辻褄が合うという語弊があるが、スコフスキー博士が実際は物理学者なんかではなく、DARPAの科学者で潜水艦が専門だと言うことだ。今回、君がもらった資料はそれを隠すためのものだ。それゆえ、大使館の技官というのも架空の存在だ。従ってマッケイ大佐も彼らに騙されたと見て間違いはない」

「そんなことが？」

「多分、情報筋が絡んでいるのだろう。民間を装った軍用機の運用はたまには行われている」

ウィルバー・ライトマンは頭の中で何か閃いたみたいだった。

彼の頭の中で何かがつながったのだろう。芽衣に視線を向けることなく、そのまま瞑目し、そして鼻から息を漏らしながら沈黙した。——もしかしたら、芽衣の情報を引き出してしまったので居眠りに入ったのかも知れなかった。余計な会話は情報漏洩の元だった。

芽衣はP3Cのコンピュータに差し込んで、勝手に持ってきたUSBメモリーの中身が気になった。多分、追跡していた「何か」のデータが収録されているはずだった。磁器探知機やソノブイで追跡するために、その「何か」を識別するためのデータがなければならぬはずだった。

しかし、彼の目の前でデータを見ることは何か危険だと感じていた。

どこの所属の人間なのか、それが明らかになるまでこちらの情報を開けっぴろげにする訳にもいかない。

——民間機を装った軍用機と軍用機の姿をした民間機。

情報部であれば、もしかしたら、そんなものを扱えるのかも知れなかった。ウィルバー・ライトマンが少しも驚かなかったことから、それも日常茶飯事のことなのだろう。

——磁器探知機にもかからず、ソノブイにも反応しない。

もしかしたら、そんな潜水艦も存在するのかも知れない。ただ、そんなものは空想上のもので、実際にあるとは考えにくかった。鋼鉄の塊であり、そして、何かの動力を元に海中を動いている以上、周りに何らかの痕跡を残しているはずだった。

ディック・スコフスキー博士。

ターゲットは多分「モビー・ディック」（でかいやつ）なのだろうと、眠いのを我慢しながら思った。ちなみにハーマン・メルヴィルの小説「モビー・ディック」の日本語版の題名は「白鯨」となっている。

2. 東京

(1)

日本時間、九月一〇日、午前七時。

芽衣の乗った小型ジェット機、C 3 7・ガルフストリームVは定刻通りに東京・横田基地の滑走路に着陸した。

機体後部の搭乗ハッチが開き、地上のスタッフが回してくれたクルマが見えた。ウィルバー・ライトマンは敬礼をする相手に軽く会釈して、そのままクルマに乗り込んだ。芽衣にも手招きしてくれたので、そのまま後に続いて乗り込んだ。

とりあえず、今日の午後から予定されている研究室の中間発表には間に合いそうだった。

学生各位と大学院生がその対象となるイベントだった。

とはいえ、全員ではない。

論文に勤しむのは学部の四年生と、大学院生のうち修士二年と博士三年が主になる。他の院生も研究の進捗具合を確かめられるが、この時期に急ぎなのは、やっぱりその面々だけだった。

ウィルバー・ライトマンの行き先は赤坂のアメリカ大使館だったみたいで、芽衣は途中の駅近くで下ろされた。ここまで来たら、後は地下鉄を乗り継ぐだけだった。地上に出て東都大学の上野キャンパスへと向かう。

しかし……である。

今回の学会が偽のものだったことについては、多分マッケイ大佐から山本教授へ詫びの電話が何かあるはずで、その点は心配はしなかったが、新たな問題が差し迫り増えていた。マッケイ大佐ですら知らなかった極秘の潜水艦だ。

通用門をくぐろうとして、芽衣は背後に気配を感じて振り向いた。

可愛い子が立っていた。——男の子だろうか、女の子だろうか？ 見た目ではわからない感じだった。しかし、この子の服装には見覚えがあった。母校の都立緑ヶ丘高校の男子のブレザー制服だった。

「ボク？ 大学に何かご用？」

「えっと。……黒澤先輩！」

「え？ あたし？」

「これ！」

少年は小さな紙片を差し出した。

何だか、小さく折られた手紙の样にも思えた。

「これって？　うちの学生の誰かに渡せばいいのかな？」

「いいえ。黒澤先輩にです」

「ええーっ！　あたしに？　君から見たらお婆さんだよ」

「そんなことないす。実は緑ヶ丘高校の文化祭のときからのファンなんです」

「文化祭？」

芽衣は記憶を辿った。確かに高校生の時に生物部にいて、文化祭では展示物を出してはいた。しかし、名前だけの部であり、ミドリガメの甲羅磨きと金魚の餌やりだけで、大したことはしていないし、芽衣自身はその間、よその模擬店でたこ焼きを食べて過ごしていたのだ。こんな可愛い美少年が訪れていたとは思ひもしなかった。——高一か高三の時としたら、この子はいくつだったのだろうか？　今から五年前か七年前のこと。小学生のはずだ。そんな小さな子が高校の文化祭に来ていたのだろうか。

「ううん。まあ、嬉しいんだけどね。でも……とりあえず預かっておくね」

芽衣はそう言い、とりあえず、学内に戻った。

理学部三号館。二階の会議室。

すでに研究室の中間発表会は始まっていた。芽衣は入り口近くにいた博士院生に会釈して後ろを空いている席に着いた。山本教授は窓側の席にいて、芽衣の方を見ることなく手元の書類みたいなものに熱心に食い入っていた。紙の束の横には電卓があり、何やらボタンを押しながら赤ペンで書き入れている。

さらに観察すると、電卓の数字キーとプラスとマイナスしか押していないみたいだった。すなわちお金の計算だと思われた。ホワイトボードの前でグラフの説明をしている学生の方はチラリとも見ずに手元に集中していた。こんな時の教授は大抵、研究費用や外部からの寄付金の額に熱中しているに違いなかった。

もしかしたら、芽衣がサンディエゴへ行ったことの代価かも知れなかった。

よくわからない仕事への従事。

スコフスキー博士は「商談は成立している」と言っていたことから、かなりの金額が寄付金として研究室に入ったのだろう。

ひとり、またひとりと発表は進んだ。

出席している田端准教授や兄の黒澤健一講師からは、二、三の指摘みたいな質問がなされたが、それも学生は卒なく返事していたし、口ごもっても指導の大学院生が代わりに答えていて、大した問題はなさそうだった。それに……である。肝心の山本教授から何も指摘がないことから、先生たちからの重要な問題提起はないものと考えてよさそうだった。

と、その時。

最後の発表者である四年生の荒木のがかが締めくくろうとしていた。

ひとりが手を挙げた。博士院生のオーヴィル・ライトマンだった。

「イクスキューズ・ミー。ミス・アラキ。クッド・ユー・イクスプレイン・イクエーション・3・2？」

発表原稿にあった数式（3・2）に関する説明を求めた。

オーヴィル・ライトマンは日本語を喋ることが出来て、普段は日本語でやり取りしていた。英語を使うのはこんな時だけだった。そして、ホワイトボードの前の荒木のののは固まった。よくあるやばいパターンと言うやつだった。何の気なしに記載した方程式に質問を寄せられる。意外と答えられないものだ。芽衣は荒木の指導をしている渋谷宗佑を見た。ちなみに彼は研究室のみんなから「しぶやそうすけ」と呼ばれているが、実は違うことは、研究室の学生名簿を作った芽衣だけが知っていた。

本名は「しぶたにむねよし」。

しかし、彼はずっと「しぶや」と呼ばれていて、それに慣れていていちいち反論も訂正もしていない。ここでも、皆から「しぶやさん」と呼ばれていた。

彼は、そろそろ口を出さなければヤバそうな荒木に助け舟を出さなかった。そして、荒木は炎上した。

こんな時は何かそれらしいことを口にして、さりげなく質問をかわすのが鉄則だ。

——通説ではこの式が主流だと思う。あるいは前の式を変形したらこうなった、詳しい計算は後で説明しますとか。

しかし、荒木は完全に止まってしまった。こうなると、他の式にも質問が及んでしまう。こうなると、もう駄目である。鋭い指摘が次から次へと飛んで来るのだ。卒業研究は理論を学ぶ貴重な機会でもあるが、こうした理論への攻撃をかわす訓練でもある。

「ああ、うう」

荒木は口をばくばくさせ、そう呟くだけだった。

渋谷は完全に見放しているのか、手元の資料に目を通すことに集中していて、会議室の前方にいる荒木の方をチラリとも見なかった。こんな時のための指導院生や教官である。「それについては、私から……」とか何とか助け舟を出すのが常識だった。

そして、荒木は俯き、涙をこぼし始めた。

オーヴィルもいじめる気など毛頭なかったに違いない。少し当惑した表情をしていた。単なる数式の計算間違いか、書き間違いだと思っていたのだろう。普通なら簡単なことだったと思う。

「ポテンシャル場の積分値を表すもの……だよな？」

と、心配したのか、オーヴィルも普段の日本語になった。

——そう。単なる計算ミスだ。

芽衣はそう思ったが、相変わらず渋谷は手元の資料に集中しているままであり、誰も口を開かなかった。どうなるのだろう。芽衣は少し不安になってきた。山本教授がこっちに注意を向け、あれこれ指摘し始めたら、もう最後だ。

そして、事態は最悪の場面を迎えた。

山本教授が荒木を向いた。

「君い！　こんな計算の根拠も把握していないのか！　一体、この半年、何をしていたんだ！　もう九月だぞ。本来なら研究結果をまとめるべく、論文の下書きに入ってもいい時期だ。こんなので来年、卒業出来ると思っているのか。ええ？」

教授は手元の電卓を大事そうに脇によけた。大事な計算結果だったのだろう。芽衣は「誰かが助けなきゃ大変だ」と思った。もう、ただではすみそうない。

その後の約三十分間。結局誰もフォローしなかった。

荒木はずっと下を向き、ショックのあまり口も利けない様子だった。

芽衣は何とかしてあげたいと思うが、やっぱり、他の院生や教官の管轄でもあり、口を挟めなかった。そして、山本教授は無能な相手を極端に嫌っていた。他人の部下ならどうでもいい感じだが、研究室内の他の教官や大学院生、そして学生にはとりわけ切れる人材を求めているきらいがあった。先を読んで答える。そうでないものは最初から発言しない方が無難だった。

山本教授も、全く返答のない荒木を見て深くため息をつき、そして、口で説明しながら文献や専門書の題名をいくつか挙げて、それを手元のメモに書き取り、荒木に渡すよう隣の学生に指示した。

芽衣が見ただけでも、ざっと十五本くらいの量だった。

多分、それらを読み込み、内容をレポートにして出すよう言うつもりなのだろう。それはそれで本人のためかも知れない。ただし、もう九月の十日だった。論文の執筆作業に入らなければならない時期でもあったし、この中間発表自体が、その最終確認みたいな位置付けだったのだ。提出は来年の二月末となるが、四年生には初めての経験であり、多分、何度も書き直すことが予想され、そのスタートが遅れることは、かなりのリスクだった。

午後四時となり、発表会は散会となった。

ホワイトボードの前で泣きながら立ち尽くす荒木の姿を横目で見ながら、それぞれ部屋を出て行った。

「黒澤。ちょっとすまない」

と、ずっと沈黙を保っていた渋谷宗佑が芽衣を、ドアの外側で呼び止めた。

「何でしょうか？」

——多分、荒木ののこのこれからの処置のことだろうかと思感した。

「ちょっと相談したいことがある。君と……ああ、加村君も同席願いたい」

「え？　ああ、はい。わかりました」

そう言われて芽衣は廊下の先を歩いている加村雄一の名を呼んだ。

どちらかと言うと、芽衣への依頼ではなく加村への依頼なのだろう。彼の指導院生は一応芽衣だったので、その断りを入れるつもりなのかも知れなかった。

「ここだと少し話しづらい。喫煙室でもいいだろうか？」

「ええと。.....研究に関する話ではないということですか？」

「ああ。個人的な.....いや、俺個人ではなくて、やっぱり、研究室に関わることなのだが、その線引きは少しセンシティブなんだ」

「わかりました。加村君。来て」

喫煙室は、かつて学生がヘビースモーカーだった頃の名残の場所だった。

十年ほど前までは実際に学生や教官がタバコを吸う場所だった。しかし、このご時世である。段々とタバコへの風当たりが強くなり、本来の喫煙室は単なる休憩場所と化し、実際にタバコを吸っているのは、各棟の一階の端にある小さなスペースだけになっていた。

そして、渋谷は脇に抱えていたファイルの中からA4の用紙を取り出した。

(2)

「何ですか。これ？」

芽衣はキョトンとした表情のまま渋谷に問うた。さっと目を通して横の加村へ渡した。彼も無言のまま渋谷の次の言葉を待っていた。

「見ての通り、パワハラ・セクハラ委員会からの呼び出し状だ」

「ええーっ！ マジですか？」

芽衣は叫んだ。

この委員会は存在自体は知られていたものの、その活動を目にしたのはこれが初めてだった。場所は教務課の中に置かれていたが、制度上は大学からは独立した組織となっている。ただ、大学の性質上、ハラスメントは指導教官によるものが多く、大学院生だけが名指しで批判されるのは意外なことでもあった。

そして、被害者は書類上では「荒木ののか」となっていた。

「それで渋谷さんは、これを発表会の間中見ていたのですか？」

「俺もショックだった」

それはそうである。「ハラスメント上等！」の常習犯的な教授ならこんなこともありそうだが、それ以外の人物からのものであれば、端的に言うならば上司である教授やその他の教官に言えば解決しやすい事柄でもあるのだ。それをすっ飛ばして、ハラスメント委員会に被害届を出すなど、もうよっぽどのことだった。そして、訴えた本人にも被害が及ぶ。

これから卒業論文の執筆をするのに指導院生のアドバイスが欠かせないし、もし、このために指導院生や教官が交代することになれば、その進行がかなり遅れることも覚悟しなければならないし、ましてや卒業を来年三月に控えた身としては、最悪の事態としては卒業論文を期日までに提出出来ない恐れすらあったのだ。

——こいつ何を考えているのだろう？

芽衣にはそれも疑問だった。

時期的には、こんなものを出して特なことなど一つもないし、そんな事実があったとしても、もっと早く出すべきだった。多分、五月か六月であれば、まだ指導院生や教官の交代もあり得たはずだ。

「それで聞きたいことがあるんだ。加村君に」

やはり、芽衣にではなく、荒木の同期である加村への質問だった。
「荒木さんの素性に関してでしょうか？」
彼は荒木に「さん」をつけた。
これで芽衣にはピンと来た。
加村は少し考え込んだ。かなり前のことまで思い出そうと記憶を辿っているみたいな
感じを漂わせた。

「あいつ。まともなのか？ セクハラやパワハラの実実に思い当たらないんだ。威圧的
な言動もしていないし、体に触れたこともない。このご時世だ。その辺りは極めて気を
つけていたんだ」
「そうですねえ。……こんなこと言っているのか。かなりプライベートな内容になりま
すが」
「それでいい」

「あの人……聞いた話なのですが、三浪していて、さらに二留しているそうなのです。
なので、僕たちより五つ上になるかと思います」
「そもそも入学年次が違うのね？」

芽衣は状況を考えた。
留年制度は、単に必須単位が揃わずに、卒業研究を履修出来ない場合や、そもそも進
級できない場合などいくつかのパターンがあった。ただし、就職などで極めて不利なた
め、大学によっては、年数制限を課している所もあった。実際、ここでも三回までが限
度であり、要するに七年生までしか存在しないようになっていた。

しかし、浪人までは大学側が関知する所ではなく、それは受験生それぞれの事情にの
み委ねられる。

ただ……。やはり、卒業時の年齢があまりに高いと、後々支障があるのは同じこと
でもある。

そして……。浪人生がそんなに珍しくない大学では、新入生同士でも相手の年齢をそ
こまで気にすることは少なく、大体が普通に友達関係となる。いわゆる同級生だ。

そんな中、留年生だけは少し事情が異なっていた。

やはり、多少は先輩扱いだ。

しかし、受けるべき科目が重なる同級生とは異なり、彼ら・彼女らの必要科目でしか
顔を合わせることがないため、知らない人が混じっていても、そんなに気にすることも
少なく、多分、四年生になった時の卒業研究で同じ研究室になって「ああ」と言うくら
いかも知れなかった。

実際、芽衣も、荒木のののかのことは自分の研究室に入ってくるまで存在そのものを
知らなかった。

「加村君。では、荒木のことはそんなに知らないのかい？」

渋谷はがっかりした表情で尋ねた。

「それがそうでもないんです。学生同士の関係と言うよりサークル関係と言った方がいいかも知れません。実はあの、過去にもハラスメント系の騒ぎを起こした経歴があるんです」

「ええ？」

「これはテニス部の先輩から聞いた話です。というか、部内ではかなり有名な話なんです。あの人が一年生の時に、副部長だった沢田さんと言う四年生がいたんです。テニス初心者だったあの人に熱心に指導していたと言うことらしいんですが……」

「その熱心さが仇になったと言うことかい？」

「どうもその様なんです。実際、本当の所は本人にしかわからないことでもあるのです。でも、沢田さんの普段の態度からしても、そんなことはあり得ないと言うのが部内の意見でした」

「そんなことって。いわゆる男女関係のことかい？」

「それが……レイプされそうになったと」

「それは本当なの？」

芽衣も口を挟んだ。

誰もいない部室の中。年頃の男女が同じ空間にいた。体の線がくっきりと見えるスポーツウェア。したたる汗。段々とそんな雰囲気になり……と、そんなこともあるかも知れない。しかし、「あるかも知れない」と言う状況がその状況を作り出す素地となっていた。

この話というのか、噂話の中に確実な情報はひとつも含まれてはいなかった。

「では、その時も大学のセクハラ委員会へ訴えられたと？」

渋谷は渋面で尋ねた。

しかし、芽衣は疑問だった。

物的証拠などが何にもない状況だ。訴えたところで対処のしようもないだろうと思った。

「それが、この話が有名になったきっかけなんですよ」

「と、言うത്？」

「だってそうではないですか。レイプされそうになったと言うことは、抱きついて体の自由を奪われたり、体をまさぐられたり、服を脱がされたりと言ったことが付きものですよ。だったら、セクハラ委員会ではなく警察事案だと思うんです。これは法学部の先輩も言っていました。あの人の言うことが全て真実であれば『強制わいせつ』に該当するのではないかと」

「その時に何か証拠の様なものはなかったの？ 加村君」

「それなんです。騒ぎが大きかったのに、結局具体的な話が何にもなかったんですよ」

「ふうん」

と、芽衣は相槌を打ち、渋谷は顔に影が差していた。

「と、それだけに終わらなかったのも、この事件が有名になった点なんです」

「ええ？」

芽衣と渋谷は同時に声を出した。

「これも先輩から聞いた話なのですが.....」

「聞くわ」

「その先輩は武蔵市にある家庭教師の派遣会社でアルバイトをしていたそうです。その時の生徒のひとりが、当時浪人生だったあの人だったんです。成績はそれほど悪くはなかったと言うんですが、そんなある日、とんでもないことになりました」

「またレイプ未遂？」

「そうです。あの人の実家の勉強部屋の中での『犯行』でした。ベッドの上に押し倒されて、無理やり犯されてしまったと、家庭教師の派遣会社へ訴えがあったらしいです」

「それって事実なの？」

「それも、やっぱりはっきりしませんでしたし、訴えは本人だけで、後から保護者を交えた話し合いの時にはすでに話が沙汰やみになり、結局、その先輩がアルバイトを首になるだけで、それ以上の追求はなされなかったということなんです」

「もしかして、もっとあるんじゃないだろうな？」

それまで、どんよりとした顔で話を聞いていた渋谷が口を挟んだ。

「はい。.....でも、僕が思うに、あの人の経歴が、問題を複雑化させているんじゃないかと思うんですよ。普通、一浪くらいなら、同じ高校の出身者たちとも割と繋がりがあるではないですか？　でも、その期間が長ければ長いほど、誰とも接することなく、つまり、誰もよく事情を知らない状態になると思うんです」

「それは.....まあ、そうよねえ」

「そうだな」

芽衣と渋谷は同時に相槌を打った。

「他にも『武勇伝』はいくつも存在するんです。浪人中に通っていた予備校への通学途中でアダルトビデオ制作会社のスカウトマンに捕まって、騙されてそのまま、アダルトビデオに出演させられたとか、あるいは現役での受験時に電車の中で痴漢に遭って、犯人を突き出したために、事情聴取なんかで時間を取られて、受験に間に合わなかったとか。他にもあるんです」

「何だよ、それは？　まるで性犯罪のデパートみたいじゃないか」

「実際、そんな感じなので、あの人を知る男子は誰も近寄らなくなった次第です」

「おいおい。じゃあ、俺が新たな『性犯罪者』ということなのか？」

「今となっては。でも、有名人なので渋谷さんもお存知なのかと思っていました。だからちゃんと、あの人とは距離を置いているのだとばかり.....」

「それは今初めて知った。君の先輩たちで理系学部はいないのか？」

「ええと。そうですね。渋谷さんより少し上だった、東海林さんとか西大寺さんとかがご存知かも知れません」

芽衣は、以前のことを思い起こした。

確かにこの研究室の大学院生で、その名前を見た気がした。でも、申し送り事項にも何も記載がなかった。加村の言う通り、荒木のののかの経歴が事態を複雑化してしまった

のだろう。彼らとて、卒業して就職するのに、そんなやばい話に関わった痕跡すら残したくはなかったはずだ。

「おい、黒澤！」

「はっ！」

「本学のパワハラ・セクハラ委員会にはこの情報は残っているんだろうか？」

「ああ。そう言われればそうですね。でも、最初から荒木がやばい奴で、冤罪事件だとわかっているのなら、わざわざこんな時期に渋谷さん宛に『呼び出し状』なんか送るはずがないですよね。どうなのでしょう？」

「ふむ。俺はどうしたらいいんだよ？」

「そうですね。……困りますよね。あたしが思うに、もう、事実関係を詳らかにして、荒木の過去の行状とその記録を明らかにするのが一番いいのではないかと思います」

「ふむ。そううまくは行くかな？ あいつはかなり上手く立ち回っているように思える。多分、過去の事件に関わったひとたちも、関わりたくもないだろうから、証言なんてしないんじゃないか？」

「えっと。そんなものでしょうか？」

「ちなみにこの件は教授たちには伝わっているのだろうか？」

それが今の渋谷にとっての最大の懸案みだった。

そして、この時期に教授に「厄介者」と思われること、それそのものが、今の院生に取り最悪の事態を意味していた。

「論理的に間違っていない。委員会にそう判断させればいいんですよね？ それなら山本先生の機嫌も、そこまで損なわれないかと？」

芽衣はそう提案した。

彼も物理学者の一員だった。

言わんとすることは通じたみたいで、「ふうむ」と呟いてポケットからメモ帳を取り出した。帰納法、演繹法、背理法。色んな議論の詰め方があるだろう。芽衣はそれに期待した。

(3)

午後三時になり、芽衣は兄の健一の研究室のドアを叩いた。
「お兄ちゃん？　今、いいかな？」

部屋の中では兄は不機嫌そうな顔で椅子の背もたれに寄りかかって書類を読んでいた。
「ああん？」
「えっと……。一昨日の出張のことなんだけど？」
「ああ。何だか先方にはめられたらしいな。本当の所はどうなったんだ？」
「それがね。まあ、これを見てよ」

芽衣はウエストポーチからハンカチでくるんだUSBメモリを取り出した。兄はそれを手に取り机の右側にあるパソコンのスロットへ差し込んだ。

「要約するとね」
「流石だな。山本先生の好みをわかっている。常に相手の先を読む。これが出世の鉄則だ」
「茶化さないで。何だか不思議なターゲットみたいなの。旧式の対潜哨戒機で探していたことから、潜水艦か海底の何かだと思うんだけど、探知機には何も表示されていないのよ」
「先方のスコフスキー博士か。それは何者なんだ？　ちゃんとした人物なのか？」
「一応、帰り際に偽の学会の論文集を渡されたんだけど、そこには発表者のひとりとして扱われていて、物理学者の肩書きになっているわ」
「それが偽物ということか。本来の所属は？」

その問いに答える前にサン・ディエゴの空港で出会ったウィルバー・ライトマンの話をした。この研究室に所属するオーヴィル・ライトマンの双子の兄であり、空軍の輸送機を自由に使える身分であることだった。
「ふうむ。情報当局者ということか？　確証はあるのか？　とはいえ、輸送機をタクシー扱いか。ただものではないな。大使館のマッケイ氏は何か言っていたのか？」
「ううん。あっちも彼の正体は知らないみたい」
「秘密機関か。それはいいとして、ターゲットが謎だということか」
「それでね……」

芽衣は潜水艦らしき物の探知作業の前に海上で炎を上げて燃え上がる軍艦の話をした。
「ああん？」
「それでね。ウィルバー・ライトマンさんはスコフスキー博士の正体がDARPAの研究者で潜水艦の専門家だと口にしたのよ」

「謎の潜水艦か。対潜哨戒機でも捕捉不可能なもの？」

「そうなのよ。でも、そんなことってあるのかな？ 磁気センサーにも音響探知機にも反応しない。そして、何もないこと、それそのものが存在の理由だなんて」

「哲学的だな。確かに探知困難な物体は存在する。海中であれば海底火山の近くの平地に潜んでいたり、氷山の真下にいた場合、そんなこともあり得るだろう。しかし……」

兄はパソコンの画面を操作した。「サン・ディエゴから五〇〇キロ離れた太平洋の一点か。近くにそんな場所はない。しかし、そもそも本当にそんな物があったのだろうか。見えない影に怯えている小学生みたいだ」

「待って。もしかしたら本当に見えないものに恐れているだけかも知れないの？」

「本来なら……。これまでのやり方だったら、こんなことはなかったじゃないか」

「ああ。マッケイさんも何も知らずに使われているだけだということね」

「そう。それにうちに何かを頼むときには必ず、内閣安全保障室長の後藤さんを通すことになっていた。マッケイ氏も知らなかったとはいえ、日本の情報当局が完全に蚊帳の外と言うことはあり得ない。もうよっぽど差し迫った脅威があるのか、日米の外交や安全保障担当者にも知られたくないかなのだろう」

「ええ？」

「すでに退役しているはずの対潜哨戒機。しかも、軍用機の塗装すらされていなかった。乗員も民間の作業服姿。全体の指揮を取っていたのも、その実体がよくわからない物理学者。しかも、本当の所属は情報当局ですらなく開発機関であるDARPAだった？」

「ああ！」

「何だ？」

「だからかも。中のコンピュータは最新のものだったの。普通は軍用機って採用時や改造の承認時の仕様って変更出来ないんでしょう？ 軍用機ではないから、そんな所が改造しまくったのかも」

「そうかも知れない」

「お兄ちゃん。パソコン借りるわよ」

芽衣は机の横を通り、兄の横に立ち、そして画面をこちらに向けてキーボードとマウスを奪った。謎の対潜哨戒機から失敬したUSBメモリの中身をざっと表示させる。背後にスコフスキー博士が立ち、その前で怪しまれないように注意して操作したものだ。

「アルテミス計画？」

芽衣は付属している文書を見つけた。

「ああん？」

「全長八〇メートル。横幅一八メートル。基準排水量四五〇〇トン。……これが、あたしの追っていたものだったのかしら？」

「本当に潜水艦なのだろうか？」

「ええと……」

「アメリカ海軍の軍艦は地名か政治家の名前を冠されている。ギリシア神話なんかから採

用するのは多分だが、実験船なのだろう。それに、アルテミスは神話上では太陽神アポロンの双子の妹だ。もしかしたら、もう一隻、アポロンという名前の軍艦もある可能性がある」

「実験船？ だから、開発機関のものだと？」

「その可能性が高いと思う。そうすると……」

「なぜそんなものを大勢の優秀なスタッフが総出で探し回っているのかということね」

「スコフスキー博士は何と言っていた？」

「それが、最初に向こうの空港に着いたときに出迎えてくれていたのよ。普通の学会ではあり得ない待遇よね。でも、やっぱりその後海軍基地へ連れ去られて、よくわからない作業に就かせられたの」

「このアルテミスのことについては、どう表現していたんだ？」

「ううん。全く何も。ただ、『探せ』とのみ」

「つまり知られたくないと言うわけか。しかし、それは協力者に対する態度ではないな。問題は、『なぜ、それを追いかける必要があるのか』の一点に尽きると思う。単純にDARPAの所有物であれば、帰還を待つだけでもいいし、探さなくても実験担当者が位置を把握していて当然だ。そして、お前が見た別の軍艦が海上で炎を上げて燃えていたこと。もしかしたら、何者かに乗っ取られて脱走して、それをDARPAが秘密裏に取り戻そうとしていたという可能性もあると思う」

「でも、どうしてあたしだったんだろう？ 他にも適任者はいそうな気がするけど」

「そこそこ、知られているんじゃないか？ 情報当局者の間では。マッケイ氏のお気に入りスタッフ扱いだからこそ、こんな時にお呼びがかかるんじゃないか。お金だけかけて何の成果も上げられないやつではないと思われているんだろう。それは自慢していると思う」

「自慢してもいいんだ？」

芽衣は横を向いて、にんまりと笑みをこぼした。

滅多に人を褒めることはない兄の言葉はそれなりに重いものがある。

「だとすると、スコフスキー博士はかなり困っていたのだろう。そうすると、お前が会ったというウィルバー・ライトマンは何者なのだろうか？ うちのオーヴィルの双子の兄だと言うのか？」

「そうそう。めちゃ似ていたのよ。空港で会った時にもオーヴィルだとばかり。でも、彼の一族で学者をしているのはオーヴィルだけだと言っていたっけ」

「彼だけ？ そんなことはないだろう。オーヴィルの親も兄弟も数学と物理学の世界では結構、名前の知られた学者揃いだぜ。むしろ、そいつの方が異端児ではないのか」

「そういえば、オーヴィルって兄弟が多いって言っていたけど、何人いるんだろう？」

兄はパソコンの横に積んである書類の山の下の方にある紙ファイルを引っ張り出した。学生や大学院生の名簿だが、教官用のものであり、研究室用の名簿とは異なりかなり細かいことまで書き綴られていたみたいだ。

「ええと。七人？ まじかよ」

「そんなに？」

「まあ、宗教によってはそんな一族もあるみたいだし、そんなに驚くほどでもないのだろう。彼の大学院入学時の情報だが、やっぱり、学者が多いみたいだ。ただ、ウィルバーという兄がいて、国務省の官僚だと記載にあるな。他にも姉のひとりがF D A職員とある。学者というのも役人というのも嘘ではないということだ」

「じゃあ、あたしが騙された訳ではないのね」

「しかし、国務省や大使館職員を装った情報関係者というのも、あながちハズレではないだろう。彼の立ち位置はどんな感じなのだろうか」

「ええと」

芽衣は考えられる限りの事態を想起した。

仮にスコフスキー博士がD A R P Aの研究員で謎の潜水艦の担当者と、なぜかその行方を掴むのに必死になっているとすると、ウィルバー・ライトマンは、博士の立場を知っていて、それでいて、どこかで一線を引き、事態の収集を図るために日本へと移動していたことになる。しかも、民間の航空機が欠航となるや否や、空軍の輸送機を簡単にチャーターして太平洋を一つ飛びしたのだ。もう、余程急いでいたと思われる。

普通のひとで、普通の出張であれば、芽衣自身もそうだったように、欠航は遅刻の言い訳には十分である。

「アルテミス……」

「普通は実験以外の用途には用いられないと思う。もう、何かよっぽど切羽詰まった事情があったのだろう。アルテミスの運用も、その後の追跡にも」

「じゃあ、炎上していた軍艦も、アルテミスを捉えようとして返り討ちになったと？」

「かも知れない」

芽衣は画面を切り替えた。

あの時、会場で炎を吹き上げていた軍艦だ。

対潜哨戒機P 3 Cの識別装置では駆逐艦J. J. トムソンだった。

「おいおい。駆逐艦と言っても最新のイージスシステム搭載だろう？ どうしてこんなに簡単にやられてしまったんだよ？ 空の守りも海からの攻撃に対しても完璧なはずだ。これにも何かカラクリがあるのだろうか」

兄は興味深げにパソコンの画面を見た。

「そう言われれば、そうかも。あたしもあの時は炎上していることに気を取られて、そこまで考えなかったわ。でも、そんなに完璧なの？」

「ううん。油断があったんだろうか。潜水艦攻撃と言っても、自国の艦船なんだよな。まさか、攻撃されるとは思っていなかったのだろうか」

「普通は？」

「魚雷発射の準備をするだけで、その音を拾って検知できるはずだ。みすみす、やられて

しまうことは考えにくい。それに、アルテミスが脱走したものであれば、なおさら、警戒の度合いは高かっただろうしな」

「存在がないことが、その存在を示す。これって、探知出来なかったのでは？」

「そんなことがあるのか？」

兄は渋い顔になった。

三分ほど画面を眺めていたタイミングで、机の上の電話が鳴った。

ワンベルで受話器を取った。

山本教授からみたいだった。芽衣は、自分の出番も考えて、心の中で準備を始めた。

3. 永田町

(1)

午後五時。

芽衣は永田町にある合同庁舎三号館に来ていた。

山本教授はえらくご立腹だった。

親友である後藤室長や、本人の頭越しに事態が進んでいて、この時まで完全に蚊帳の外に置かれていたことがその一因だった。ただし、「完全に」と言うのとは少し違っている。少なくとも事前に芽衣を渡米させるための算段は組まれていたし、それを決裁したのも教授自身だった。その真の目的を知らされていなかった。その一点に問題があった。

エレベータに乗り、七階へと上がる。

エレベータホールには後藤室長の秘書官が待っていた。そして、教授を先頭に兄と芽衣はついて歩いた。

会議室には先客がいた。

大使館付武官であるジョン・マッケイ大佐と、高官であるアレックス・アンダーソン氏、そして、ウィルバー・ライトマンが座っていた。その対面には自衛隊の制服を着た男性が腰掛けていた。

これまでにマッケイ大佐を交えた会談はあったが、この顔ぶれで集まるのは初めてのことだった。もっとも、現実社会では単なる物理学専攻の大学院生の芽衣が顔を合わせることは絶対にない組み合わせとも言える。

しばらくしてドアが開き、後藤室長とそのスタッフが額に汗を滴らせて入って来た。一抱えほどの書類の束とノートパソコンを手にはしていた。

「今回、お集まりいただいたのは、アメリカ大使館からの要請に基づくものです。かなりイレギュラーな事態が発生している。そうですね？ マッケイ大佐。ミスター・アンダーソン」

後藤室長は席に着く間もなく、そう発言した。

こちら山本教授と同じく、何かよくわからない事態が、自分たちの知らない所で動いていて、重大な結果になる直前に話を預けられたことへの不満感がありありの口調だった。

それに……である。

世界政治をほぼ牛耳っているアメリカの高官が出揃っているのだ。

彼らだけでも、単独で大抵の事態には対応出来ると言っても過言ではない。わざわざ、日本側の安全保障政策の担当役職へ話を持って来たこと自体が、そもそもイレギュラーそのものでもあった。

後藤室長が席につくと同時にマッケイ大佐が沈痛な面持ちで手を挙げた。

「実は……。今回の深刻さに関しては誰も理解していませんでした」

彼ははっきりとした発音で、単純な単語を並べた。

しかし、わかりにくい言葉ではあった。

「それは、アルテ……、いや潜水艦のことですか？」

芽衣も言葉を選んで発言した。

「担当者がいないことが明らかとなったのです。こんなことは、長らくこの仕事をしていますが、本当に初めての……。初めての事態でした」

「担当者がいない？　どういうことです？」

横から山本教授が発言した。

「この事件の全貌は、現時点では明らかになっていません。しかし、これまでですと、どんなに機密レベルが高くても、どこかの情報機関が把握していて、完全に外部にも知らされないことはなかったのです。実の所、この話がライトマン主任から聞かされるまで、全く知らされなかったのです。いや、この件に関しては、この場にいる誰もが詳細を知らない状態でもあります。現在進行形の危機なのです」

「わかりやすくご説明いただけますかね？」

後藤室長が質問の最後を締め括った。

「それについては私から」

マッケイ大佐の横からウィルバー・ライトマンが手を挙げて発言した。「こちらでも把握していない新兵器と思われるものがDARPAの一部職員の手で開発され、あろうことか、完成してもいないのに、それが太平洋に解き放たれたのです。しかも、その職員たちも自分たちが何をさせられているのかを、いまいち把握していないままに作業を進めていたことが明らかとなりました。……日本語の例え話では、三人の目の不自由な人がゾウを触り、『壁のようだった。紐のようだった。柱のようだった』と言ったものがあるかと思います。それぞれの職員は、それが『ゾウ』だと言う認識がなく、自分の担当分の作業しかせず、そんな感じで成果物だけ作り上げたという訳……と、推定されるというレベルなのですが」

「そんなやり方で新兵器の開発なんかが出来るのですか？　普通だと、かなり高度なプロジェクト管理が必要なのでしょう？　それでも失敗に終わることが多いと聞きます」

と、兄が発言した。

「もう、偶然の悲劇が重なっていて、それらの連鎖反応が起こったとしか言いようがないのです」

「マッケイ大佐。この話の内容だと、米軍とDARPAの間だけの問題としか思えないのだが、どうして、今日、我々がここに集まることになったのかね？」

後藤室長が不満ありありの口調で問い詰めた。

「この潜水艦に関しては、何もかもが不明なのですが、それでも、いくつかのヒントを残しました。偶然、近くを通過した軍用機のレーダーに潜望鏡らしきものが写ったこと、そして、現場で無線通信がなされたこと、さらに、そこに向かった駆逐艦が攻撃されて大破させられたこと。そして、今回、黒澤芽衣さんに対潜哨戒機に乗っていただいたことから、現在位置が曖昧ながらも推定されています」

マッケイ大佐の周りくどい話し方に、後藤室長と山本教授が段々と苛立ちを隠せない顔を見せていた。

「その潜水艦は北西へ向かっています。速度からの推定では、九月二十九日から三〇日まで東京で開催されるG7サミットの期間中に到達する可能性が出て来ています。サミットでは日程の初日に、我が国の最新鋭原子力空母であるベンジャミン・フランクリンの甲板上でセレモニーが予定されています。各国の同盟関係の確認と、それを世界中に発信するためのものでした。わたしは駐在武官のひとりとして、その裏方を勤めていたのです。もしも……ですが、そこでテロを起こされた場合、結果は極めて重大になります。各国首脳たちの安全が保障されないばかりか、『同盟が無力』だという誤ったメッセージを世界中にばら撒くものとなってしまいかねないのです」

「ええーっ！」

会議室中に驚きの声が響いた。

単なる行方不明物の探索が、そうではなかったことに初めて気づいた瞬間だった。

芽衣の頭の中で全てが繋がった。

偽の学会。旧式の対潜哨戒機。謎の科学者であるディック・スコフスキー博士。海上で燃え上がっていた駆逐艦。そして、探知機に映らない物体。

誰もその正体を知らないままに、開発部署から解き放たれて太平洋上のどこかを航行しているのだ。行き先は、東京湾あたり。サミットでのイベントに合わせてのテロ攻撃の可能性。

「あの？」

芽衣は恐る恐る挙手した。

「何かね？」

後藤室長は不機嫌かつ不安に満ちた口調で尋ねた。

「仮に最新鋭の潜水艦だとしてですが」

「はい」

マッケイ大佐は頷いた。

「どうして探知機で捉えられなかったのか。どうしてイージスシステム搭載の駆逐艦が簡単にやられてしまったのか。その辺りはどうなのですか？」

「それについてはこちらでも捜査中なので、今は何とも言えないのですが、ライトマン主任が聞き取りを行ったDARPA職員の話では、極めて静粛性が高く探知されにくいシステムの開発がテーマとしてあったということなのです」

「それが実現したと？」

「そうです」

「それが脱走してテロリストの手に渡り、最悪の場合、サミットでセレモニーを行うために各国首脳が乗った原子力空母を撃沈してしまう可能性があると？」

「撃沈の可能性については、認めたくない気持ちですが、いや、もう、あらゆる可能性を考慮しておかなければならないでしょう。それに空母の撃沈だけだとは決めつけられない事情もあります。浦賀水道や東京湾内からミサイルを発射され、日本の総理官邸やアメリカ大使館に当たれば、それはそれで空母撃沈に等しい政治的影響があります」

マッケイ大佐の発言により会議室の中は沈み切った雰囲気となった。

G7サミット。ある意味、オリンピックや万博より華やかなことさえあった。開催地は準備で大わらわとなり、参加する首脳や閣僚、そして、裏方を務める官僚たちの大きな「祭典」とも言えるものだ。それだけに議長国の責任は重大であり、面子を気にする政治家であればなおのこと、一点の過ちすら認められないだろう。

そんな気配は十分に、わかり過ぎるほどわかっていたと思われる。教授の対面に位置していたアレックス・アンダーソン氏が口を開いた。

「万が一。そうです。万が一に備えて開催場所を東京から他へ移すことも考慮の余地はあるでしょうか？」

「ええ？」

後藤室長はあからさまに嫌悪感に満ちた表情となった。

「すでに原子力空母を中心とする艦隊司令部には了承を得ています。東北や北海道、あるいは西日本や沖縄などです。艦隊や会場となる大規模ホテルとの輸送にも問題はないかと思うのです」

「君い！」

後藤室長は語気を荒げた。

芽衣は横目でチラリと見た。さっきから顔色が赤くなったり青くなったりと大変な形相のままだった。無理もない。そう思った。

確かに、過去には地方都市で開催された事例はあった。

「よそでやるとしても、それなりの理由が必要なのだよ。ミスター・アンダーソン！」

後藤室長の額には血管が浮かんでいた。

「それは重々承知しているつもりです。それに……」

「仮に！ 仮にだよ！ 君たちの言うとおりに、テロが行われるとしても、それは確実なのかね？ ええ？」

「いや。それが……」

アンダーソン氏も口ごもり、隣のマッケイ大佐とウィルバー・ライトマン氏とこちら

に聞こえない程度の小さな早口な会話をしてのけた。

「後藤室長。これは小さな可能性ではあるものの、的中した時の被害が極めて大きいのです。確率としては三〇パーセントもないかもしれません。しかし、もし各国首脳が乗った原子力空母に何らかの攻撃がなされるとしたら？　もう、二十一世紀最大の惨事になります。一步間違えば、歴史の教科書に載ってしまうほどの事件かと思いますよ」

と、マッケイ大佐は述べた。

「三〇パーセント？　この期に及んでは大きいんだか、小さいんだかの判断は下せないがね。これを、これから、官邸に報告する私の身になってくれたまえ。テロが確実なら、確かに変更が第一選択だろう。しかし、七〇パーセントは外れるということだろう？

それに、移動したら移動したで、そちらが狙われる可能性もあるのではないのかね？」

「それは……」

マッケイ大佐はウィルバー・ライトマンの方をチラリと見た。

これは返事のしようがないなど、芽衣も思った。

そもそも東京が狙われていると言うのも、これまでに検知出来た潜水艦の位置と速度から単に「可能性がある」という程度のものであり、そんな仮定の上に仮定を重ねても、確率が単に低くなるという以外、何の保証もなかったのだ。

(2)

午後七時三〇分。

芽衣はマッケイ大佐の誘いで赤坂にあるフランス料理店「ラ・コース・コントレ・ラ・モントレ」に来ていた。二人っきりの会談だ。

「マッケイさん。他のひとと一緒になくてよかったのですか？」

芽衣が尋ねると、マッケイ大佐はギャルソンの持って来たメニューをじいっと見つめていた。彼の身分は大使館駐在武官であり、本来の目的は米軍とその駐在国の外交・軍事担当の官僚との橋渡し役である。

しかし、彼に限って言えば仮の姿であり、本業は情報機関の人間だとは芽衣もこれまでのやり取りから察していた。どこの所属か、正確な所は知らないが、しかし、そこそこ高い身分のひとだとは周りのひとたちの態度から明らかだった。

マッケイ大佐はメニューの中から、いくつかの候補を選び、芽衣に提示した。

コースではなくアラカルトだ。こちらに尋ねたのは、あくまでも芽衣の立場を尊重したものである。芽衣は貧乏学生であり、フランス料理との接点はまるでない。彼の言った言葉の中から二番目に出たものを選んだ。

「ふむ。ワインはどうなさいます？」

メニューをギャルソンに伝え、そのままワインを選ぼうとした。ソムリエを呼ばないのは最初から芽衣がお酒を嗜まないことを熟知していたからに相違ない。アルコールはまるで駄目だった。一口飲んだだけで、顔が真っ赤になり、そして気分が悪くなる。

マッケイ大佐は自分の分だけワインを頼み、芽衣には料理に合ったソフトドリンクを選んだ。

「マッケイ大佐。さっきの質問の答えなのですが？」

「ああ。実の所、わたしは実務家でしてね。政治家のような無駄な作業は省きたいのですよ。それに、この料理と飲み物はアメリカ合衆国民の税金から支出されるのです。一セントたりとも無駄には出来ません。そして、質問の答えです」

「はい」

「正直な所、わたしが能力を評価しているのは、あなただけなのです。後藤氏や他の先生方は、あなたの立場を考えて、あえて声掛けしているに過ぎません」

「あたた。そんなことはよそでは絶対に言わないで下さいよ」

「もちろんです。わたしもあなたを失いたくはありません。ただ、今回の一連の作業ですが.....。実の所、ものすごく.....本当にものすごく大変だったのですよ。単に空母をよその海域へ派遣するのであれば、それはそれで費用が発生はしますが、大したことではありません。戦時であれば日常茶飯事でしょう」

「今回は違ったと？」

「そうです。各国首脳が集まるセレモニーだったのです。ヘリコプターで艦上に降り立ち、ちょうどいいタイミングで海軍艦艇と海上自衛隊の艦隊とすれ違う形での観閲式をかねていました。そして、セレモニーでの専用のスタッフの手配と料理その他の準備と」

「それは.....大変そうですね」

「実の所、司令長官に話を持って行き、開催場所の変更を承諾させ、その上での変更案でした。しかし、後藤氏はそんな苦労も知らず、予定は棚上げ状態となっています」

「それは.....。やっぱり、テロ計画が確実でなければ後藤室長も官邸に話を持っていけなかったのではないのでしょうか」

そこへ前菜が運ばれてきて、マッケイ大佐は一旦言葉を切った。

芽衣は手元に並べられたナイフとフォークをどの順番に取るのか迷った。

「芽衣さん。今回の事件.....事件かどうかともわからないのですが、何か腑に落ちない気分なのですよ」

と、言いフォークだけを使って野菜と何かが混ざったものを器用にすくって口に運んだ。芽衣は真似をしようと思い、フォークを手を取ったが、同じことは出来なかった。そして、右側にあるナイフに手を伸ばしながら発言した。

「この本質は、実体のないことに振り回され続けたことにあるのではないのでしょうか」

と、芽衣は思う所を述べた。

「本質？」

「はい。皆が皆『あるとしたら？』とか『可能性が三〇パーセント程度』だとかを前提にしてしまっていて、誰もその裏を取っていないことにあると思うんです」

「ふうむ。それは確かにその通りですが、一〇〇パーセント確実にするまで対処しないというのは極めて危険側の推定ですよ」

「あたしに取り事件の始まりはスコフスキー博士から与えられた任務でした。でも、見えないものを見るという極めて抽象的なものだったんです。モニターにも画面にも何も映らない。そして、存在しないことが、その存在を示す指標だったと。でも、裏を返せば、そんなものは最初から最後まで存在しないとも言えると思います」

「哲学的ですな。しかし、スコフスキー博士は目的物があることを確信していたのでしょう。そのためにわざわざ東京からあなたを呼び寄せたのです。.....まあ、あなたを選んで送り込んだのはわたしですがね」

マッケイ大佐はそう言って、鼻から息をふっと吐いた。

すでに皿は空だったが、次の料理はすぐには出てこなかった。芽衣が食べ終わるのを待ってのことかも知れなかった。

「あの？」

「何ですか？」

「少し情報を整理したいのですが？ アレックス・アンダーソン氏とウィルバー・ライトマン氏、それと、スコフスキー博士と、もっと言えばマッケイ大佐も。一体どういう関係なのですか？ バラバラに見えますが、それでいて誰かが統率しているようにも思えます」

「そのことでしたら、お答えは出来ません。ただ、アメリカ合衆国には大小合わせて二十五の情報機関があります。それぞれ独立して、その組織に適した活動をしています」

「えっと。大体の所は予想はつくのですが……。C I Aと国防総省情報部と先端技術開発局ですよね。ライトマン氏はよくわからないのですが、あの人は別の組織なのでしょうか」

「いい勘をお持ちです。大体は合っていますよ。ふふ。しかし、情報機関はその正体がわからないうちが花と言う事情もあるのです。ライトマンに関してはわたしも知らない情報機関のようです。かなり、高度な権限を持っているみたいですがね」

「謎の情報機関？ そんなことってあるのですか？」

「かつて第二次世界大戦の時までは情報機関はありませんでした。その後、必要に迫られるたびに新しい組織が立ち上げられ、必要がなくなれば廃止され、予算がなくなれば統合されたりと紆余曲折を繰り返して現在に至ります。しかし、他国には活動はおろか、存在すら知られたくないのは事実なのですが、民主主義国家なので議会が予算を認めない限り何も出来ないという一面もあります。そして、『必要に迫られ』という一例が、今回さらに加わったと言うのが事実なのでしょう」

「ええ？」

「ストラテジック・インテリジェンス・サービス。戦略情報局という組織があるとは聞いたことがあります。略称は多分S I Sと言うのでしょうか。ただ、議会への報告にもない組織ですし、何をしているのかも不明です。しかし、もし、ライトマンがそのメンバーであるのなら、こうした事案を担当するためのものかも知れないですね」

「ああ……」

「芽衣さん。あなたは今回の『何か』についてどう思っていますか？ 三〇パーセント以下の確率の話だとしてもいいので聞かせて下さい」

「えっと……」

「不確定な話でもいいのです」

「あらゆる計測には誤差と雑音……。エラーとノイズが入ってきます。真に求める数字にプラスされて検出されるもので、実験を精密にやればやるほど小さくはなるのですが、ゼロにはならないという性質でもあります」

「聞かせて下さい」

「エラーには補正を行い、ノイズにはフィルターを通します。つまり、計測器や画面上に現れる数字やグラフはすでに何らかの加工が施されていると言っても過言ではありません。つまり、磁気探知機であれば、そのノイズは除去されます。例えば、地球の磁場の影響は計測されたとしても、潜水艦の探知の画面には映されないのです」

「それで、スコフスキー博士に対して、対潜哨戒機の飛行ルートを変えて、もう一度計測するようリクエストしたと？」

「はい。フィルターで除去されたとしたら、やはり、同じ結果になるはずでした。しかし、二度目の計測では全く同じノイズが乗ったのです。同じであれば、その段階でノイズはノイズではなくなる……」

「わかりやすく言ってください」

「ノイズが、何らかの信号と見なせることになるのです。ここからは完全にあたしの仮定です。潜水艦だとして、その表面に小さな電磁石を大量に貼って、表面の磁力をコントロールしたら、それが可能になると思うんです」

「磁器探知機に、地球の磁場と思わせると言うことですか？」

「そうです。そこに存在する地球の磁場であればフィルターを通った時にはノイズとして除去されてしまいます。なので、本来なら海底にある磁性を帯びた岩石の姿を描くことになるのですが、それが別の何かの磁場で偽装されたデータを表示されることになります。あえて飛行ルートを変えたことで、地球の磁場なのか、他の何かが作り出した磁場なのかを探ろうとしたのです。……データは二回とも同じものでした。すなわち何かが作り出したものだと」

「ふむ。音響探知機は？」

「それも、この電磁石がヒントです」

「説明してください」

「電磁石に電流を流すと、その周波数と同じ振動を発生させます。探信音波と同じ周波数で、位相だけ逆にする。……ノイズキャンセリング機能のヘッドホンやイヤホンと同じ原理ですが、それを使うと、探信音波は打ち消されてしまい、探知機のマイクには何も返ってこないと言う現象が起こります。本来なら、潜水艦の背後にある物に反射して返るはずのものが何も返って来なかった。それが何もないことが、何かがいることの証明になると、多分、スコフスキー博士は判断したのではないのでしょうか」

ギャルソンが二品目の料理を持って来ようとし、マッケイ大佐は手を挙げてそれを断った。彼は料理の乗った皿を持ち、そのままバックヤードへと引き返した。

「仮に……。仮にですが、スコフスキー博士がDARPAの研究者だとして、一体何をしていたのでしょうかね？」

マッケイ大佐は眉間に皺を寄せて言った。

「潜水艦の正体を知っているなら、現在の位置と進む方角を探ることで、彼の任務を果たしたと考えたのかもです。もう、潜水艦……アルテミスが、DARPAの指揮から外れて、勝手に太平洋を横断して東京に向かった。一つ気になったのは……」

「行先不明の潜水艦が叛逆して、逃亡を図り、その上、東京でのテロに加わったと言う事実を早い時期に把握していたこと？」

「ええ。あたしもそう思ったんです。本当に正体不明で、行先も不明であるなら、事故で暴走しているのかも知れないですし、それなら、駆逐艦で後を追わせたり、対潜哨戒機で探し回ったりと言うのもおかしい気がします」

芽衣が思ったことを述べて、冷めてしまった料理に手をつけてナイフとフォークを並べて置いた。マッケイ大佐は深刻な面持ちになり、腕を組んで考え込んだ。

(3)

午後九時をやや過ぎた頃、芽衣はメインディッシュを期待していたが、結局ありつけなかった。マッケイ大佐は途中で席を立ったのだ。

「場所を変えましょうか」

「え？ は、はい」

マッケイ大佐はギャルソンに席を立つと伝えて、持って来た伝票にサインしてそのまま店を出た。芽衣はどうしていいかわからず、後に続いた。

彼がたどり着いたのは大使館近くのビルにある軽食店だった。

店員はいたが、マッケイ大佐は自らカウンターへ行き、ホットドッグを二人分と飲み物を手にして芽衣が座った席まで持って来てくれた。

「え？」

芽衣は少し戸惑った。

——まだお腹が空いていたのだろうか？

フランス料理店のメインディッシュを食べずに出たのだ。食べる気があるのなら、そこで最後まで食べればよかったはずだ。最後にはデザートとコーヒーか何かが出たと思う。

マッケイ大佐はにっこりと笑みをこぼしながらホットドッグを一つ手に取りかぶりついた。

「実は、フランス料理を食べたのは海軍で偉くなってからのことなのです。元々はそんなに裕福な家庭の子供ではなくてね。どちらかというと、こっちの方がご馳走感が強いんですよ」

そう言って、さらにケチャップとマスタードを追加で塗った。

芽衣もこっちの方が気負わずに食べられる気がした。

しかし、である。

フランス料理の代金は税金から支出されると言っていたのだ。目的もなしに場所を変えるのは理にかなっていないと思う。

「あの店は……実の所、関係者行きつけの場所です。だから打ち合わせではよく使っていたのですが、ここから先はあまり同業者に知られたくなかったのですよ」

「そうだったんですね」

芽衣もホットドッグを食べながら相槌を打った。

「あなたが言う通り、この事件と言ったらいいのか、実体のない影に怯えている子供みたいなことを各部署の人間がやっている面が否めない気がします。いや、もしかしたら、その実体すら、本当は存在しないのかも知れないし、出来ればその方が平和だと思います」「そう思います」

「そもそも、アルテミスなんてものがなぜ生み出されたのか、そして、なぜ開発途上のものを太平洋に出してしまったのか。そのあたりが一番の謎でしかないのですよ。それに、これがわかれば、問題の八割は解決しそうな気もしています」

「何かが、DARPAとSISを動かして、こんなものを生み出し、極秘裏に実践投入に踏み切ったと？」

「そう。そして、DARPAはいいとしても、SISは公式の機関ではないはずなのです。何を目論んでいたのか、それがわからないまま動くのも水面下に岩があるのに気付かずに飛び込むようなもの。知らない顔でいた方がいいのか、全力で防ぐのが正解なのか。そこがわからないと、こちらもアンダーソンも動きようがないのですよ」

芽衣は宙を睨んだ。

全てのヒントは対潜哨戒機の中で盗み見たデータをUSBに落とし込んだものしかない。残されたファイルの情報からスコフスキー博士にハッキングを仕掛けるか、あるいは、他の情報源を探るか、その両方かだった。

マッケイ大佐に協力するには、そのくらいはしなければならないだろう。しかし、フランス料理、しかも、途中までしかなかったものと、このホットドッグが代償とするならば、あまりに安すぎる取引とも言える。と、そこまで考えたが、やはり、スコフスキー博士の一矢報いたい気持ちがあるのも否めなかった。

忙しい時期にわざわざ偽の学会の名目でサンディエゴまで出張して、尚且つ、怪しげな作業にいいように使われてしまったのだ。山本教授なら何と言うだろうか、と少しだけ考えて、やはり考えるまでもないと思い直した。——無能な部下が一番嫌いなひとでもある。いかにアメリカの研究者とはいえ、いいように使われてしまって、なおかつそのまんまというのが一番評価が下がる項目とも言える。

従って、ここから先の作業はマッケイ大佐に恩を売ると同時に、失われかけた山本教授からの信頼を取り戻すことでもあった。

「ひとつだけ気になるデータが……いや、今となっては単なる数字の羅列に過ぎないのかも知れませんが。極秘扱いの情報があるのですよ。ちょっと見てもらえませんか？」

マッケイ大佐は床に置いてあったアタッシュケースを取り上げた。

普通のビジネス用の物より頑丈そうな鍵がついていた。

彼は内ポケットから取り出した二本のキーを差し込んで回し、さらにその状態でダイヤルを回した。

「何だか、物騒な代物みたいですね」

芽衣はごくりと唾を飲み込んだ。

「鍵だけではありません。第三者が開こうとすると内部の小型タンクから硝酸が流れ出して中身を完全に焼いてしまう仕組みになっています」

「ええ！」

「ふふふ。わたしが開ける分には問題はありません」

と、ニコリと笑みをこぼしながら、中から小さなケースを取り出した。

「これは？」

「国家安全保障局NSAが、普段から通信や電波を傍受しています。その中にあった物なのですが、彼らにも解読出来ないでいるそうなのです」

と言い、ケースの中から小さなメモリーカードを取り出した。

「見ても？」

「ええ。そのつもりで持って来たのです」

芽衣はマッケイ大佐からメモリーカードを受け取り、床に置いていたトートバッグの中からノートパソコンを取り出した。開くと瞬時に起動して画面が光った。自分の物ではなかった。研究室の所有物であるかなり高価な機種だった。

受け取ったメモリーカードの中にはいくつかのファイルがあった。

開くと、数字の羅列が広がった。

「むむ？」

「何かわかりますか？」

「これってどこで受信したものなのですか？」

「それは秘密ですし、実際にアルテミスに関係するものかどうか不明です。ただ、時間的に駆逐艦J. J. トムソンが被弾する数時間前に、その海域に飛んでいた電波と推定されるそうなのです。なので、意味のあるデータなのか、単にそこで飛んでいた関係のない電波なのかも不明なのです」

「ふむ」

「どうでしょうか？ 意味がありそうですか？ それとも単なるノイズだったのでしょうか？」

マッケイ大佐はテーブルの上から前のめりになり、まくし立てた。

芽衣は小ぶりのパソコンの画面にデータを展開させた。

「ああ……」

「わかりますか？」

マッケイ大佐は期待感に目を輝かせた。

「横軸に数字、縦軸に頻度としてグラフにします。そうすると、ノイズであれば全体に広がるだけとなります。でも、これには……大まかに見るとですが、山が一つあります。もしかしたら量子信号かも？」

「量子？ 名前は聞きますが、どんなものなのですか？」

「ええと。話せば長くなるのですが、簡単に言うと……思いっきり小さな粒子を考えてみましょう。原子を東京ドームに例えると、原子核はマウンド上のボールくらいです。さらに原子核を東京ドームとするとマウンド上の砂つぶみたいなものが、それです。この

くらいになりますと、もう粒子ではなくなります」

「ふむ。小さな粒ですか？」

「それがですね。不思議なことに粒子でありエネルギーでもありという、つかみどころのないものなのです。そして、肝心なのは、粒子とエネルギーの両方が重なり合う性質があるのです。どちらではなく、両方の性質を同時に示すという」

「何ですか？ わたしも以前に情報当局者から説明を受けたことがあるのですが、よくわからないままになっています。でも、粒子なのでしょう？」

「いや、何と言いますか、でも、粒子っぽいと思っていただいて結構です。これを通信に用いると、かなり秘匿性が強いとは言われているんです。つまり、正規の受け取り手がいて、途中で誰かが盗み見ると、情報が変わってしまう性質があるのです」

「盗み見？」

芽衣は画面に浮かんだグラフに目をやった。

「これも盗聴したものなのですね？ おそらくは量子通信を衛星との間で行い、潜水艦はそれを受けるために海上に受信機っぽいものを出した。その時に、そちらの軍艦がその受信機をレーダーで捉えた。そして、残念ながらこの信号は盗聴に成功したのではなく、衛星とどこかの基地との通信を捉えたにとどまった？」

「ふむ。……大体は合っています」

「てへ」

「そうすると、このデータを解読すれば、あの潜水艦が何をしようとしたのかが、わかるのですね？」

「残念ながら……。量子信号は途中で捉えられることで、信号の値が変わってしまいます。元のデータのコピーは基本的には取れないのです。そして、元々の信号の受け手はデータが崩れてしまうことで盗聴されたことを検知できますので、即座に再送信のリクエスト信号を出しています。……あっ！」

「ふむ」

「データは一定時間置きに繰り返されています。内容はランダムですが、受信して盗聴を検知して、それから信号の再送信をリクエストするまでの間隔から、もしかしたら何らかのヒントを得られるかも知れません」

「できそうですか？」

「ふむ」

と、マッケイ大佐のように相槌を打った。

そして、隠し持っていたUSBメモリの情報を探った。

マッケイ大佐の所属機関が何らかの盗聴を試みたとしたら、芽衣を利用しようとしたスコフスキー博士も無関係ではないはずだ。彼もこの量子通信を利用した可能性がある。それならば……。

「マッケイ大佐！ スコフスキー博士の端末からなのですが、どこかの機関からハッキングがなされていた可能性があります。これは量子信号とは関係のない通信です。もしかしたら内容がわかるかもです！」

芽衣はカタカタとキーボードを叩き、スコフスキー博士のコンピュータ端末へのアクセス記録を確かめた。これ自体が違法なアクセスなのだが、マッケイ大佐がいいと言うのならOKなのだろう。そして、こっちのアナログなハッキング手法には芽衣の頭の隅に記憶があった。東アジアで活動している国際テロ組織のパスワードのクラッキングソフトの痕跡があった。

「どういうことです？」

マッケイ大佐は深刻な顔で尋ねた。

「おそらくですが.....」

「おそらくの情報でも構いません」

「元々は潜水艦アルテミスには量子暗号を使用した通信システムが搭載されていた。DARPAのスコフスキー博士はアルテミスと基地との通信をしていた。ところが今回はこのテロ組織に量子通信衛星の制御コードを盗まれてしまった。そして、偽の命令か何かをアルテミスへと送り込まれた」

「それに気づいて焦ったスコフスキー博士が、アルテミスを追いかけるために、わたしとあなたを利用したと？」

「そんな所だと思います」

芽衣はパソコンの操作をしながら返事した。

もう少しで、スコフスキー博士のコンピュータ端末へ不正アクセスした犯人のIPアドレスが割り出せそうだった。そして、そのまま相手へのハッキングへと移行する。割と他人のコンピュータへの不正アクセスをしていると自身のセキュリティが緩くなりがちだった。よその家の裏口から忍び込んでもものを盗む行為と似ている。盗んで帰って来るのに、自分の家だけ鍵をかけているわけにはいかない事情があった。

「これかもです」

芽衣はマッケイ大佐にパソコンの画面に向けた。ファイルを開くと短い英文が表示された。

「大統領命令ですって？ 『西経135度20分、北緯24度50分を航行中の駆逐艦J. J. トムソンがテロ犯に乗っ取られた。同艦には核弾頭搭載の巡航ミサイル・トマホークが積まれている。発射予想時刻はアメリカ西海岸時間の0時30分。直ちに撃沈せよ。繰り返す。直ちに撃沈せよ』？ オー・マイ・ガッ！」

マッケイ大佐は拳を握り、それをブルブルと震わせた。

この偽の命令が、あの駆逐艦にミサイルが打ち込まれた直接のきっかけだったのだ。

おそらくは、スコフスキー博士もアルテミスの位置を大体は知っていたはずだった。それゆえに極秘裏にアルテミスを追跡し、あわよくば自分たちだけで取り戻して、何もなかったことにしようとしていたのだ。

そして.....。スコフスキー博士たちがアルテミスを捕捉するために出動させた駆逐艦J. J. トムソンが待ち構えていることを知っていて、このテロ組織があえて偽の指

令を送り、返り討ちにしたのだ。

4. 上野キャンパス

(1)

九月十二日の土曜日。

午前一〇時の公園。

芽衣は研究ノートとは別にしているノートを手に人待ちをしていた。

とはいえ、待った時間はほぼない。と言うか、彼がすでに待っていたのに気づかなかっただけだ。

「黒澤先輩？」

「ああ、来てたの？」

先日、ラブレターらしきものを手渡した男子高校生が頬を赤らめて近づいてきた。

名前は荒木希望。希望と書いて「ノゾム」と読むそうだった。色が白くて目鼻立ちがくっきりしていて、アイドルの男の子っぽい雰囲気を漂わせていた。

芽衣はノートをパタンと閉じて持っていたトートバッグに直した。

「何かお勉強中だったのですか？」

「いや、そんなのじゃないわよ。そう言えば、ノゾム君は高一って言ってたっけ？ 担任は誰なの？」

「浅川先生です」

「あら？ 偶然ね。あたしも三年生の時に受け持ってもらったわ。あの関西弁は今も健在かな？」

「はい。時々ついていけない時もありますが、面白くていい先生です」

「あはは。地元民しかわからないことも多いよね」

「そうなんですよ。あはは。何言うてんねん……みたいな？」

「そうそう。よく言っていたわね」

「それに、一番カルチャーショックばいものは、『関西人はな。バカと言われると怒るけど、アホと言われたら喜ぶんや』と言うことでした。本当なのでしょうか」

「あっはっは。それは当たっているかも。うちの研究室にもそんな人がいたわ」

芽衣の喜ぶ顔に少年は頬を赤らめた。

「ねえ、ノゾム君」

「はい？」

「君の洋服と靴と小物。それって結構お高いのじゃなくて？」

「そんなことないですよ。でも、ほとんどは祖母からプレゼントされたもので、いいものだと思うんですが、実際の値段は知らないです」

「ふうん。趣味のいいお祖母様がいらっしゃるのね。もしかして、あなたのお家ってお金持ちなの？」

「そんなことないですよ。普通です。でも、他の人からも言われたことがあります」

芽衣は彼が結構、裕福な家庭の子供だと感じた。

「ねえ。君ってハーフなの？」

「え？」

「ちょっと普通の子とは違うなと思って。違っていたらごめんなさい」

「実は……祖母の父親がロシア人だったと聞いたことがあるんです。僕は会ったこともなくて、曾祖母もすでに亡くなっていて、祖母からの又聞きなんです」

「それ本当？」

「又聞きなので、本当の所は謎なんです。でも、家の納戸にその人の遺品があって、ロシア語で書かれたノートなんかが残ってはいるんです」

「それって……。いつ頃のことなの？」

「詳しくはわからないのですが、祖母から聞いた話では……」

荒木希望はあまり話したくはなさそうな雰囲気を醸し出しながら、訥々と言葉を選んだ。たぶん、好きな人に告白して初日のこと。回答を拒否して嫌われたくないという意識がそうさせたのかも知れない。

曾祖父は、ソビエト連邦社会主義共和国の科学者で日本へは旅行だったのか、別の任務があったのか不明であったが、その当時に東京にいて、希望の曾祖母と出会って恋に落ち、そして結婚したのだそうだった。

元々は短期間の訪日の予定だった。

しかし、日本に滞在している最中にソ連崩壊と言う歴史的な出来事が起こった。

元の組織も解体され、曾祖父は帰るべき理由を失った。

「科学者？ 専攻は？」

芽衣はそこに興味を抱いた。

「電磁波工学だそうです。祖母の話では」

「ふうん。日本へはどんな目的があったのかしら？」

「よくはわかりません。でも、港で写真を撮りまくっていたらしくて、カメラやフィルムがそのまま残されています」

「港？」

「軍艦が多く写っていたので、米軍基地や自衛隊基地だと思うのですが、何のためにそんなことをしていたのかは、わかりません」

芽衣は何となく嫌な予感がした。

その人物が本当に科学者で、何らかの目的で来日して趣味で写真を撮っていた。

もう一つは、本当は情報当局者、スパイで、科学者を装って来日して米軍や自衛隊の動きを探っていたかだ。しかし、海軍基地を探るのだったらもっとまともな肩書きの方がいいだろうとは思った。

電磁波工学。

「ねえ。ノゾム君。それ見せて欲しいな」

「それはいいですが.....」

その時、公園に誰かが通りかかった。

「あ！ お母さん！」

と、ノゾムは言った。芽衣はその視線の先を目で追った。

研究室の荒木ののかだった。

「え？ お母さん？」

荒木ののかは芽衣の姿に気づき、荷物を抱えたまま会釈した。

「荒木さんてば、子供がいたの？」

と、芽衣は素っ頓狂な声を上げた。

「いけませんか？」

彼女は全く動じなかった。

芽衣は頭の中で計算機を叩こうとしたが、気が動転して叩けなかった。

荒木希望がののかの息子であるならば？ 彼女が中学生の時の子供になる。そんな事実があったのだろうか？ もしかしたら、荒木の年齢が違うのかも知れない。入学年度から勝手に二十八歳とあっていただけで実際には、もっと歳を食っていた可能性もあった。

そして.....。その学校によっては、妊娠がバレたら退学になる可能性もある。

留年や浪人は大学だけではない。高校なんかでもあり得たのだ。

結局、芽衣は荒木ののかに誘われる形で、彼らの自宅へと招かれた。

応接間でお茶を出される間に、ノゾムが大量のノートが詰め込まれた段ボール箱を持って来てくれた。

「ふうん。.....あ、お構いなく！」

お盆の上にお茶とお菓子をのせて、ののかが入ってきた。

手早く、段ボール箱の中に目を通した。

ノートはロシア語らしき文字で埋め尽くされていた。内容はわからなかったが、図やグラフは読み取れた。回路図のようなものが多数あり、無線機の一部だと推察された。電磁波工学というのも嘘ではなさそうだ。そして、写真の詰め込まれた封筒に手をつける。確かにアメリカ海軍の艦船と自衛隊の護衛艦が写っていた。

「これって何をしていたのかな？」

芽衣は誰にともなく呟いた。

「あの？」

荒木ののかは乱暴にお茶を置くと、他に話のありそうなそぶりを見せた。

「えっと」

「黒澤さん。どうしてうちの子に話なんかしていたんですか？　もしかしたらセクハラ裁判のことですか？　わたしを探りに来たんですか？」

「えっと」

「わたしに出産歴なんかがあると、不利になる。そうなんですネ？」

「いや、そんなつもりはちっとも」

芽衣はそう答えたが、何だか、来たタイミングは最悪のようだった。

荒木ののかは鬼のような形相だった。

芽衣はお茶だけ飲んで、そのまま帰ろうと考えた。

と、その時、一枚の写真に目が行った。

駆逐艦のアンテナ部分にペンで線が記入されていた。そして、そんなものが他にも数枚あるのに気づいた。

——電磁波工学というのは嘘ではなかった。彼は軍艦を写してはいたが、船ではなくアンテナを観察していたのだ。そう考えると辻褄があった。ノゾムの曾祖父がソ連の科学者であるとするならばではあるが。では、何のために？　芽衣は先ほどのノートを読み出した。

「荒木さん。失礼だけど、おじいさんのお名前は何というの？」

「そんなこと、セクハラ裁判に関係があるんですか？　差別です！」

「いや、あたしが来たのは、別に裁判のことじゃないんです。たまたまノゾム君と知り合いになっただけで……」

「まあ、いいわ。……ミハイル・スコフスキー」

「え？」

「ミハイル！　スコフスキー！」

「え、ああ。ありがとう」

芽衣は手にしていたノートと写真を落としてしまった。

スコフスキーと彼女は言った。まさか、DARPAのディック・スコフスキー博士と関係があるのだろうか。いや、これも荒木ののかの妄想が勝手に作り出した与太話のひとつかも知れない。

事実としてあるのは、ノゾムの言った通りに存在した段ボール箱一杯の資料と写真の山だった。

「ごめんなさい」

芽衣は床に落としてしまったノートを丁寧な手つきで拾い上げた。と、その時開いたページに高周波回路と特殊なトランスと大型真空管が繋がれた図面があるのに気がついた。——何かある、と、芽衣は思った。

午前十一時になる少し前。

芽衣は、荒木ののかの怒りが爆発しないうちに、そそくさと退散した。

そして、元いた公園のベンチで、先ほど目立たないようにスマホで撮影したノートと写真の一部を見返した。緻密な線で描かれた、何かの回路図。それに細かいロシア語でぎっしり書き込まれたメモ。その上に海軍基地で撮られた写真と。

これにもアンテナの部分にペンでたくさんの書き込みがあった。

もし、91年のソ連崩壊がなければ？

ノゾムの曾祖父は日本に腰を落ち着けていたはずがなく、祖国へ情報を持ち帰って何かの機器を作る作業に従事していたかも知れなかった。一体何を作ろうとしたのだろうか？　そして、実際には何も作られなかったというオチになっていた。

「いや、待てよ」

芽衣はひとりで呟いた。

何も作られることはなかった。

それは歴史的事実かも知れない。しかし、科学者であるミハイル・スコフスキーがソ連が崩壊した後に帰国することなく、ノゾムの曾祖母と出会って結婚して、余生を平和に過ごしていたことを誰も知らなかったとすれば？　と、思っていた。

芽衣はトートバッグを肩にかけ、駅へ向かって走り出した。

(2)

正午過ぎの、世間では昼休みの時間帯。

芽衣は五反田駅近くにある、ショート電機へたどり着いた。いわゆる家電量販店である。昔はビルの一階から二階にかけて売り場があった無線機の担当者に会うためだった。今では一番上の階の四分の一ほどのスペースになっている。ここで大勢の客が集っていた時代のことは芽衣もよく知らない。

そもそも、携帯電話の普及で無線機自体があまり用いられなくなっている。

あるのは、工事用などで使用されるものがメインだった。

本物と言うのか、いわゆる昔のアマチュア無線などに使用されるものは、取り扱いに当たって免許が必要だったと聞いている。無線機を扱うための免許と、無線機を運用する局としての免許の二つが必要で、趣味でやる分にはいいと思うが、汎用には少しばかり面倒だった面が否めない。

それゆえなのか、免許のいらぬワット数の小さなものが工事用などとして取り扱われていた。

「園田さん！」

芽衣は売り場の担当者のひとりを捕まえた。

「いらっしやいませ。……って、君か？　ひとりかよ？」

「すみません。勤務時間中にお邪魔して」

「お邪魔とは思っていないけど、何か買う風を装ってくれないか。無駄話と商談では上司の扱いが違うんだ」

「ああ……なるほど。で、ちょっとこれを見てもらえませんか？」

園田健一郎は芽衣からスマホを受け取り、しげしげと画面を眺めた。

「これって……」

「何かわかりますか？」

「バージニ・セクレットとスタンプが押してある。重要機密という意味だよ」

「ええっ？」

「まあ、昔のものっぽいけどね。ソ連の崩壊の後、東側諸国からいろんなものが入り込んでいたからなあ。自動車から武器から」

「やっぱり、無線機なんかもあるんですか？」

「あったけど……でも、日本の規制には合わなくて、そのまんまでは駄目だったけどね」

「何の回路かわかりますか？」

「発振器と……ああ、マグネトロン管ばいね。アンテナの図面はあるかい？」

園田健一郎は工学部の出身だった。芽衣よりかなり年上だ。

そして、電子工作マニアでもあった。芽衣はコンピュータには自信があったが、ハードウェアはほとんど専門外だった。

芽衣は彼が手に持ったままのスマホの画面をフリックした。

「ふうん。なるほどなあ」

「何ですか？」

「電源回路がないから何ボルトで動作するのはわからないけど、アンテナなんだろうね、これ。普通はアルミのポールだけど、これは熱対策していると思われる。かなり頑丈そうだけど、何に使うんだろう。周波数は2ギガから6ギガヘルツくらいだろう。もしかしたら無線機ではなく、何かを焼き切るための熱源にするんじゃないかなあ」

「無線機をぶっ壊すみたいなの？」

「それは……どうだろう。でも、そんなことしたら相手側から文句を言われるだけだよ。工具として使うんじゃないか？」

「なるほど」

芽衣は頭の中に今日、荒木ノゾムの見せてくれた資料を展開した。

回路図は、無線機らしきものであることはわかった。どちらかと言うと、通信用ではなく工具としての使い方が考えられる。しかし、だとすると、アメリカや日本の軍艦のアンテナを観察している理由がわからない。レーダーや無線機の回路を焼き切って、ぶっ壊す目的でもあったのだろうか。

そして、肝心のミハイル・スコフスキーと言う人は、その成果物を祖国へは持ち帰らずに日本人女性と結婚して余生を過ごしていたと思われる。

芽衣は、園田から無線機のカatalogをもらい、そのまま帰途に着いた。

彼の商売に見せかけるだけの証拠に過ぎなかったが。

大学へと向かう電車の中。

無線機のカatalogのページをめくり、中身を眺めていて、ふと気づいた。

新しいスマホにも搭載されていて、登山用の機器にもなっている衛星通信システムだった。これまでも衛星通信機器はあった。しかし、アタッシュケースほどのサイズがあり、馬鹿でかい衛星用アンテナを展開しないと使えない代物だった。でも、どんなに馬鹿でかくても船に積むならそんなに邪魔にはならないだろう。

そして、現在ではスマホに搭載されるほど小型化されてもいた。

もしかしたら？ と、芽衣は思った。

軍艦のアンテナに向ける武器ではなく、アンテナの向け先にある何かを目標にしていたのではないかと。通信衛星やGPS衛星が世界中のあらゆる上空を飛んでいる。軍艦

は自分の位置を探るのに、太陽や星との角度に頼る時代ではなくなっていた。

この回路を履き切るほどの強力な電磁波を衛星に向けたらどうなるのだろう？

マッケイ大佐に確かめなくても、太平洋を行き来する軍艦の動きが止められしまうほどのインパクトがあるのではないかと、そんな気がした。

園田は図面に「重要機密のスタンプ」があると指摘してくれた。

これが、当時の電磁波兵器であるなら、まさに「重要機密」だったに違いない。

ミハイル・スコフスキーという科学者が、その後に何をしていたのか。

これを荒木たち以外には誰も知らない所に問題の根源がありそうな気がした。

午後一時。

芽衣は大学の研究室に戻った。土曜日とはいえ、この時期は、これから当面の間に続けられる「卒業論文」の制作時期の始まりでもあった。遊んでいる余裕は微塵もない。特に学部四年生にとってはだ。

「ねえ、加村くん？」

「はい」

加村雄一は机に向かって作業していたが、その手を止めてこちらに向き直った。

「オーヴィルを知らない？」

「ああ、多分、喫煙室だと思いますよ。さっき、あくびをしながら出て行かれました」

「そう」

と、芽衣は自分の席に持っていたトートバッグを置き、後を追うか、帰りを待つか考えた。そして、オーヴィルの机の上にマグカップが置きっぱなしであることに気づいた。彼はタバコは吸わないし、喫煙室はコーヒーを飲む程度の場所になっている。マグカップを忘れたのでは用は果たせない。

「あのさ？ 加村くん」

「はい？」

「あたしが留守にしていた時って、オーヴィルってここにいたの？」

「ええと。おられたと思いますよ」

「それは、確実なこと？」

「ううん。この時期です。重要な用事もないので休むはずがないかと」

「本当に彼を見た？」

「ええと。そう言われればそうですね。どうだったでしょう。でも、何か用事を言いつかったり、指示を受けた覚えがあるような？」

「それは口頭で？」

「どうでしょうか。そこまでは記憶には……。ちょうど研究室の中間発表の前じゃないですか。みんな他人の行動なんか気にかけていませんでしたし、それゆえ、オーヴィルさんが席に着いていたかどうかまでは確認していませんよ」

「ふうん。そうなんだ」

芽衣は机の引き出しから先日を使用したパスポートをハンカチでつまんで取り出した。そして、同様にオーヴィルのマグカップを手にとった。

「芽衣さん。何しているんです？」

「接着剤はあるかな？ 瞬間接着剤」

「ああ、冷蔵庫横の棚にいくつかあるかと思います。でも、何をするんです？ マグカップが割れた訳でもないですし」

芽衣は彼の言った引き出しの中から新品の接着剤を取り出した。

そして容器になるものを探した。写真のフィルムを現像するための黒いプラスチックのものが棚の奥に眠っていた。多分、研究室内で写真の現像なんかをやっていた時代のものなのだろう。それをひとつ手に取り、机へと戻った。

パスポートの入国スタンプの押されたページをめくり、オーヴィルのマグカップと一緒に入れた。蓋をしようとしたが、マグカップが大きすぎる。半分閉めた状態で隙間から瞬間接着剤を数滴落とした。

接着剤の液は容器の底に落ち、数秒もかからず固まって白い模様を描き出した。

しばらくして、マグカップとパスポートの表面にうっすらと模様が浮かび出た。指紋である。

それを持ち、同じ建物にある生物学科へと移動した。

こちらの知り合いの大学院生に挨拶して、紫外線ランプと実体顕微鏡を使わせてもらう。

「黒澤さんって、いつも変なことばかりしているね」

と、ここの院生である横溝武史が言った。

「変に見えます？」

「とっても」

芽衣は彼に背を向けながら顕微鏡を覗き込んだ。

「これの写真って撮っていいですか？」

「いいけど」

芽衣は角度を変えて何枚か、紫外線を浴びて浮かび上がった指紋らしき画像を撮影した。それを顕微鏡の画像出力につながっているパソコンへ転送してメモ리카ードに焼いた。

「指紋の照合かい？」

「ええ」

「何をしようとしているんだい？ 何か事件でもあったのか？」

「まあ……」

「犯人の目星は？」

「まあ……」

「指紋は形状が一致する場合には、特徴点を照合する」

「ああ」

芽衣が曖昧な返事をする中、横溝はディスプレイに表示された指紋の画像に目を凝らした。

「何だよ。まるっきり一緒だな」

「双子の場合はどうなります？」

「指紋は遺伝的要素にプラスして、成長過程での変化が加わる。一致する箇所は増えるが、違うものになる」

「ふうん。では、この指紋は？」

芽衣が尋ねると横溝は腕を組んだ。

「同一人物だろう。丸切り一緒だよ」

「やっぱり！」

「でも、これだけでは犯罪捜査には使えないぜ。法律的な問題でだが」

「それはいいんです。同一人物だと分かれば」

「何をしたんだ？ このひと」

「うふふ。内緒です！」

芽衣は生物学研究室を後にして、ひとりで一階のロビーにあるジュースの自販機の前に立った。ウエストポーチから小銭入れを取り出して硬貨を入れ、紙パックのコーヒー牛乳のボタンを押した。がちゃんと音を立てて、取り出し口に落ちた。

糖分をとりながら、オーヴィル・ライトマンとウィルバー・ライトマンのことを考えた。

——スパイのフリをした学生と学生のフリをしたスパイ。

そんな所だったのだろう。

双子のフリをされたのは意外だったが。

東京で大学院生の顔をしてスパイ活動をしていたのだ。大学院生の肩書は結構便利だと思う。長期滞在しても当然のことと思われるし、たまに海外へ出かけるのにも違和感を抱かれない。そして、割と色んな場所へ潜り込むことも可能だった。双子の兄を装ったのは、本当に「急用」だったのだろう。芽衣と同じ場所へ行ってしまったが故に演技が必要になったのだ。そして、大学の間発表に出席しなければ、それはそれで怪しまれる。ずっと東京に滞在してアメリカへは帰国していないことになっているからだ。それゆえ、空軍の輸送機を臨時に使ってまで、サン・ディエゴから東京への強引な移動を行ったのだ。

それで、彼の行動に納得出来た。

後は、オーヴィルの秘密に気が付かないフリをして、彼らの行動を追っていく。

一連の工作の全貌が明らかになった時がチェックメイトだ。

芽衣はストローをくわえて、ずっと音を立てながら残りのコーヒー牛乳を飲み込んだ。

(3)

午後一時半。

芽衣は高輪駅から少し距離があるキジキス共和国大使館に来ていた。

中央アジアに位置する、旧ソ連圏に属する国だった。

都立緑ヶ丘高校にいたときに、そこから来た留学生がいた。彼女は気さくな友人であり、なおかつキジキスではスーパー・エリートでもあった。日本の女子大を卒業した後、あちらの外務省に入り、在日本キジキス大使館の書記官になっている。

「ドミザゴルゴン二等書記官をお願いします」

と、ロビーの受付の女性に依頼した。彼女はすぐさま内線電話を取り、執務室へつないでくれた。

「こちらへどうぞ」

と、そこまで案内してくれた。ノックして室内へ入る。

彼女は机でパソコンに向かって仕事中だった。

「あら？ 芽衣？」

「ゴルちゃん。お久しぶり！」

芽衣は彼女とハグの挨拶をした。

「ちょっとお願いしたいことがあるのよ」

と、芽衣は単刀直入に話を始めた。

「いいわよ。待って、今、飲み物を頼むわ」

ゴルベンバエル・キキリシア・ドミザゴルゴンは内線電話を取って、紅茶とお茶菓子をリクエストして芽衣に向き直った。「紅茶でよかったかしら？」

「うん。ありがとう。それでね……」

「懐かしいな。高校を出てから五年ぶりかしら？」

「まあ、積もる話は今度ゆっくりしようよ。今日はお願いがあって来たの」

「わたしでお役に立てるなら」

「実は……。旧ソビエト連邦時代の資料って、多分、公文書館にあると思うの。で、キジキスでもある程度の資料は残っているんでしょう？ ちょっと、調べてもらいたいのよ」

「ふうん。キジキス共和国にとっては黒歴史かもだけど。こちらの歴史の教科書からはその時代のことは消されているわ」

「そうなんだ？」

「でも、あなたの言うとおり、データベースには残されているわよ」

芽衣は何と説明しようか言葉を探した。

「あのさ。曖昧で悪いんだけど、電波兵器という言葉でも検索出来るの？」

「大雑把なのね。陸上用か船舶用かの区別くらいはしてほしいわ」

「多分、船舶用だと思う。軍艦のアンテナに関係ありそうなの」

「OK」

ゴルベンバエルは仕事で使っていたパソコンでそのまま操作を続けた。多分、軍や情報部との接続が可能なのだろう。

「でも、こんなことしてゴルちゃんは大丈夫なの？」

「まずいわよ。でも、あなたには恩義があるから」

「恩義？」

「高校で日本語も分からなくて授業から落ちこぼれていたときに、あなたと中原さんだけは、放課後に面倒見てくれたこと。本当に感謝しているのよ」

「ああ」

芽衣は、そんなに真剣に手助けした訳でもなかった。でも、今の状況を考えると、あのときに留学生いじめに加わらなかったことを幸運に思った。

「これかしら？」

「あったの？」

「1983年にアメリカのレーガン大統領が打ち出した戦略防衛構想……通称『スターウォーズ計画』。ソ連のICBMを宇宙空間で迎撃するというトンデモ計画があったの。その計画に対抗するために当時のアンドロポフ書記長が打ち出したのが『スプラヴェドリヴォスト』建造計画。正義の力と言う意味だけど、これがその電波兵器っぽいわね」

「それって？」

「原子力潜水艦の開発計画みたいね。強力な電磁波の照射装置を装備して、西側諸国の近海に潜んで、有事の際に上空を飛ぶ偵察衛星や攻撃衛星の電子回路を焼き切って無力化するものらしいわ」

「らしいわって？」

「計画は遅れに遅れ、アンドロポフ書記長の後任のチェルネンコやゴルバチョフの時代まで持ち越され、結局、実用化には至らなかった」

「ええーっ！」

「西側諸国はこの計画を突き止めて『ブラボー級潜水艦』の名称をつけてマークしていたみたいで、結構、ソ連の国内外で情報戦が行われていた節があるわ」

「じゃあ、実際にはないものだったの？」

「要素研究は各パーツごとには行われていたみたいだけど、91年のソ連崩壊で研究自体が頓挫したみたいよ。その研究者も何人かは行方不明になっていて、本来なら秘密警察が後を追うはずなのだけれど、それも行われないうちに幕引きとなっているわ」

「ふうん。そんなことがあったのね」

しばらくしてドアをノックする音がして、事務員が紅茶を乗せたお盆を持って来てくれた。ゴルベンバエルはそれをデスクの上に置くよう指示した。

事務員が出ていくと、ゴルベンバエルは話を続けた。

「電磁波照射装置そのものは完成していたわよ。ただ、ターゲットとなる人工衛星の位置をつかむ所で難航しているわ。回路を焼き切るのは可能だったけど、相手の位置が分からないのでは、どうしようもないよね」

「ああ……」

それでミハイル・スコフスキーはアメリカ海軍基地の軍艦の衛星アンテナに注目していたのだ。その向かう方向を探せば、自ずと通信中の衛星が見つかるはずだった。多分、もう一步の所で苦しんでいたのだろう。芽衣は思った。

結果が出ないで論文作成に苦しんでいる大学院生や研究者とそっくりそのままなのだ。

「でも、芽衣。スターウォーズ計画も計画倒れだったし、スプラヴェドリヴォスト計画も頓挫。みんな、存在しない幽霊に怯える子供みたいよね」

「そうなのよね」

と、うっかりDARPAのアルテミス計画のことを喋りそうになり、自重した。

まるっきり、彼ら先人の計画と同じ次元で動いていることになる。

いもしない幽霊。

冷戦の本質も意外とそんなものだったのかも知れない。

「そうそう。芽衣には関係ないかもだけど、今度の九月二十九日から行われるG7サミットにキジキスの大統領もオブザーバー枠で参加することになっているのよ。大使館はその準備でおおわらわなんだけど。あはは」

「え？ あの原子力空母の上でセレモニーとかいうやつのこと？」

「よく知っているのね。そうよ」

「こちらの大統領府も大使館も気合が入りまくっているわ。もうG7の仲間入りを果たしたかのよう。大したことないのにね」

「ゴルちゃんてば、冷めているのね」

「やっぱり、高校のときに日本に留学したじゃない？ キジキスにいた時は、首都のキジクシティーが大都市だと思っていたけど、東京だったら八王子くらいかしら。まさに、日本に来る前のわたしって井の中の蛙だったと思う」

「そうなんだ」

芽衣がしみじみ返事すると、ゴルベンバエルは思い出したかの様に机の上に置かれたお盆に向かった。紅茶が冷めてしまったかも知れない。

「レモンにする？ それともミルク？ このミルクはキジキス直送のものなのよ。一度試してみてよ」

「ええっ！ そんなことまでしてるの？」

「ゴルゴン高原で飼育しているヤギのミルクなの。日本のとは少し違うけど、こくがあって好きな人には刺さるみたい。って、大使館としては販路拡大も仕事なんだけど。あ

はは」

芽衣はヤギのミルクと聞いて少し身構えた。

あまり美味しそうなイメージが湧かない。でも、一口飲んでみると割と美味しかった。

そして……。乗っ取られたアルテミスの行き先が、サミットのセレモニーが行われる東京と横須賀の沖合の原子力空母だと言う情報が入っていた。キジキス大統領がテロ事件に巻き込まれたら？ 準備や裏方をしている大使館員もタダではすまないだろう。芽衣はゴルベンバエルの行く末が少し気になった。

「そうそう。芽衣。今度のG7が終わって一段落したら、浅川先生なんかも誘って一緒に飲みに行こうよ。美味しそうなご飯屋さんを探しておくからさ」

「いいよ。ぜひ！ ああ、お酒は苦手なんだけど。あはは。……ああ、そうそう、もう一個調べて欲しいんだけど？」

「いいわよ」

「ミハイル・スコフスキーって名前は出て来ないかな？」

「ああ」

ゴルベンバエルは紅茶のカップを横に置いてパソコンのキーボードをカタカタと操作した。「そうね。電磁波の研究者みたい。でも、ソ連崩壊後に行方不明になった科学者のリストに入っているわね。どこに消えたんだろうね」

「結構、大変な時代だったんだね」

芽衣はしみじみと言った。「そのひとに兄弟とか息子さんとかいなかったの？」

「ええと」

ゴルベンバエルはカタカタとキーボードを叩いた。「ミハイルの兄でヨシフと言うひとがいて、ソ連崩壊後、エリツィン大統領の時代にアメリカに移住しているみたい。科学者だけど、すんなり移住が認められたなんて、もしかしたら何か情報を持ち込んだのかも知れないわね」

「世知辛いよね」

「そうよ。難民で命の危険があるのなら別だけど、経済的困窮だけじゃどこの国でも門前払い、捕まって国外退去にされちゃうわ」

「ヨシフってロシア語名よね。英語名は？」

「ジョセフかジョーかな」

年齢的にはディック・スコフスキーの親の世代かも知れない。

「ディックって名前は出ていないかな？」

「ううん。ここにはないわ。……情報部にはあるかも知れないけど、これは他人には言えないの」

「ソ連の話はいいのに？」

「別の国だし、なくなっているし、守秘義務もないし。それに公文書館で公開されているしね。これは単なるデータベースよ」

「そんなもののね」

芽衣はしみじみと言いカップの中身を飲み干した。

——ヨシフ・スコフスキーがアメリカ政府に持ち込んだ情報というのが、多分、ゴルベンバエルの言った「スプラヴェドリヴォスト」、正義の力計画のことかも知れなかった。こんなものが完成したらアメリカや西側諸国は大変なことになりますよ。わたしを採用してくれたら、それに対抗する手段を考えて差し上げます。どうです？ 永住権をもらえませんか？ そうすればアメリカ合衆国に忠誠を誓います。

そんなことを売り込んだ可能性があった。

経済的困窮が移住の理由だったにせよ、それだけでは彼女の言う通りにアメリカも永住権など認めなかったに違いない。ヨシフの専門が何だったのかはデータにはなかったが、その息子が甥っ子のディックが潜水艦計画に関わっていることから、何らかの情報の引き継ぎがなされていた可能性が高いと思った。

仮に関係がなくても、いない幽霊に怯えている子供たちにとって、アルテミス計画はその最後を締めくくる、壮大で愚かなものだったのだ。

5. 赤坂

(1)

九月十三日の夕方。

芽衣は大学の研究室にやって来た。

日曜でもあり、先日の中間発表の後でもあり、普段は誰かいるはずの部屋の中には誰もいなかった。流し台で湯を沸かして、棚に置いてある自分のマグカップを手に取り、インスタントコーヒーを淹れて湯を注いだ。ふわっと立ち上がる湯気。一口すすって、そのまま自分の席へと移動した。

普段は流し台のエリアでしか飲んでではないことになっていた。

こぼすと大変だからだ。しかし、今日は誰もいないことをいいことに、少しだけルール違反をした。

奥まったエリアには博士院生の席があった。

左端には渦中の渋谷宗佑。そして右端には留学生であるオーヴィル・ライトマンの席があった。芽衣はオーヴィルの席に着いてパソコンを起動させた。研究室の中でも博士院生の立場は結構強いものがある。高性能のパソコンが与えられ、そして、大型計算機の使用にも計算速度の早い I D が付与されていた。

例に漏れずオーヴィルのパソコンには音も立てずに数秒で画面が表示された。

芽衣はキーボードをカタカタと音を立てて打ち込んだ。

ストレージの中は研究で使用する資料やデータや各種アプリケーションで埋め尽くされている。何か変なものが入っていないか。……探してはみたものの、目につくところにはないみたいだった。

その中で「新しいフォルダ」と何も手の加えられていないものが目についた。

「ふうん」

芽衣は独り言を呟き、フォルダを開いた。

大抵は雑多なファイルなど、本当に一時的なメモや、あるいは他のものが揃ってからフォルダに名前をつけて保存しようかと言うものが多い。中身を丹念に確かめた。その中に一つだけ数字だけが記載されたテキストファイルがあった。

「I P アドレス？」

芽衣は直感した。

インターネットのブラウザソフトを立ち上げて、検索バーに「https:」を足してからその数字を記入した。リターンキーをバシッと打ち込む。その直後、真っ黒な画面に切り替わった。

ふと考え込み、キーボードの上に指を置いた。

「ログインコマンドかな？」

半角英数字にして「LOGIN」と打ち込んだ。

と即座にIDとパスワードを求めるメッセージが白い文字で現れた。

ここからが本番だった。

少し考え込み、何通りかのオーヴィル・ライトマンのニックネームと誕生日や学生番号を組み合わせて入力した。数秒後、ログインが成功したみたいだった。画像も何もない簡素な画面。SISという秘密組織の通信用のアプリケーションなのだろう。文字だけなのだろうか。何通りかのグラフィックや図表を表す単語の命令文っぽいものを想像して打ち込んでみると、割と色んなファイルにアクセス出来ることがわかった。

彼……オーヴィルとウィルバーとどちらが本物なのだろうかと考えた。

学生のふりをしたスパイとスパイのふりをした学生。

このファイルの山の中に芽衣の考えていた情報は少なかった。

——もしかしたら、サンディエゴでウィルバー・ライトマンと名乗ったSISエージェントの男は潜水艦が専門と言う訳でもなかったのかも知れないと思った。

何をしているのか？

芽衣は全体像を掴むために、現時点で得られている語句で検索を繰り返した。

「この数字？」

画面の右下に小さな数字が表示されていて、時間と共に変化していた。

段々と減って来る。まるでタイマーの様だった。

「あ！ やっぱり！」

やはりタイマーだった。多分、一度にアクセス出来る時間が限られているのだろう。つけっぱなしでも五分ほどで切れてしまう仕様になっていた。

芽衣は焦りを覚えつつ作業を続けた。

あんまり考えこむ暇はなさそうだ。

「オーヴィルの追っていた情報？」

潜水艦の情報はアルテミス計画の基本仕様を示した数字だけのファイル一個だけであり、他には何もなかった。その代わりに、情報部が追っている各国のテロ組織の動向を示すものがたくさんあった。

以前にも日本を含む東アジアで猛威を振るったサイバーテロ組織である「リトル・エンペラー」。爆弾とハッキングを得意とする「レッド・スコーピオン」。そして、初めて目にする「スプラヴェドリヴォスト」と言う組織だった。

「これって？」

昨日、キジキス大使館でゴルベンバエル・キキリシア・ドミザゴルゴンに聞いたばかりの旧ソ連の極秘計画の名称だった。彼女は「正義の力」と呼んでいた。オーヴィル・ライトマンもこれを監視していたのか、あるいは、別のテロ組織としてマークしていたのかはわからない。

「あ、やっぱり！」

元の情報を補完するファイルを開くと、やはり、新手のテロ組織の様だった。

通信障害を発生させたり、通信設備のハッキングを行い、大規模な都市のブラックアウトを起こすことを得意とする組織。しかし、主な事件では「仮想通貨、暗号資産の形での金銭の収奪」を目的とした犯行が多そうだった。

お金を主目的とするのであれば、「純粹」なテロ組織とは呼べなさそうな気もした。

しかし、彼の所属しているS I Sでの扱いは少し大きい様である。

正義の力に関する情報は分量も多く、なおかつ深かった。

芽衣は検索を繰り返した。

「G7、東京、原子力空母……」

と、ぶつぶつ呟きながら思いついた語句を入れていく。

それに対して膨大な数のファイル名称が表示されてはスクロールして消えていく。芽衣の勘ではそれらが本命ではないと言う気がしていた。どれも大変なターゲットではある。しかし、「お金」が主目的なら、あんまり現実味がない気がした。何億ドルもの身代金。確かに金額は大きい、そんな大それたテロとの引き換えとしてはあまりに安すぎる気がしていた。

「オブザーバー参加」

これを打ち込んで終わりにしようと諦めた。

と、直後に一通だけの検索結果が現れた。

「ふむ……。キジキス共和国大統領？」

昨日、彼女が言っていたキジキス大統領のG7への参加のことだった。

「何だろう？」

しかし、他には何もなかった。

この情報もS I S内部ではかなり軽い扱いだった。

——もしも？　もしも、キジキス共和国大統領がターゲットになったら？

芽衣はあまりピンと来ないまま考え込んだ。

と、同時にオーヴィルのパソコンの接続が切れてしまった。タイマーの五分間が過ぎてしまったのだ。

——キジキス共和国？

どう考えても、そんなに影響はなさそうに思える。

それよりもG7でのセレモニーそのものをぶち壊す方がテロ組織としても……格が上がるといえば語弊があるが、それなりにインパクトがありそうな気がした。そして、現にアメリカ大使館やS I Sが追っているアルテミスそのものが目の前にある脅威だった。

あれからどこに移動したのだろう。芽衣も嫌な予感しかない。

——しかし。

サンディエゴ沖の駆逐艦への攻撃は「偽」の命令によりなされたのだ。今も乗組員たちは何も知らずに太平洋の深海を移動している。どこかで新たな偽の命令がなされる可能性も考えられる。

オーヴィルのパソコンから知ることの出来た、何らかのテロ組織が絡んでいると思われる。そして、S I Sも、そのテロ組織がどこであるかを絞り切れていないものと想像された。

——あの駆逐艦はどうして簡単にやられてしまったのだろうか？

その疑問はいまだに解けていない。

離れた場所からの魚雷も検知して、飛んで来るミサイルも撃ち落としてしまうはずだという。自国の潜水艦だと聞いていて、完全に油断していたのだろうか？ スコフスキー博士が手配した船だとは推測出来た。だとしたらアルテミスが何者かに乗っ取られたことが前提で出動していたはずだと思う。

やはり、何かカラクリがあるはずだった。

——このどれかが本物に違いない。

と、思わせておいて、最後にどんでん返しがある。

よくあるパターンというやつだ。

芽衣はウエストポーチのサブポケットに手をやった。サン・ディエゴで対潜哨戒機P3Cに乗せられた時にデータを拝借したものだった。データそのものには、あれ以上の情報は入っていなかった。そして、ファイル作成日時と作成者、アクセス権限を丹念に調べた、もちろん、国防総省開発局DARPAのスタッフか、その上司にしか開示されないはずのデータがほとんどだった。しかし、組織が巨大であればあるほど、分業制が多くなる。ちっぽけなデータの処理やプログラミングに、地位の高いひとを使うことはないからだ。誰か、下処理や、プログラムの下書きをしたひとがいそうだ。

五分ほどデータをこねくり回し、あることに気づいた。

他のパソコンからは見えないのに、オーヴィルのパソコンには表示されるファイルがあったのだ。

——これかな？

芽衣はファイルを展開した。

多分、オーヴィルと彼が装った双子の兄のウィルバーも気がついていないかも知れない。と言おうか、情報機関の偉いひとに興味を惹かれない些細な情報が書き込まれていた。

「アルテミス計画・基本計画書・アクセス権限に関する取り決め」

と、題された小さな文書ファイルだった。

関係者であれば誰も読まないに違いない。自明の書類だ。

言われなくても、必要なひとはアクセスするものだし、関係がなければ「読め」と言われても読まないだろう。

芽衣は、アクセス権限がありつつも、アクセス歴のない人物のIPアドレスを探し、そこから内部へのハッキングを開始した。

雑多なファイルの山。

情報はそんな山の中に埋められた金の粒を探し出すことで得られる。

採掘と精製。その後に出てくるのが価値ある情報となる。

——戦略防衛構想・補完計画。

それがアルテミス計画の正式名称のようだった。

レーガン大統領が掲げた「スターウォーズ計画」を補完するもの。旧ソ連がスターウォーズ計画に対抗するために打ち出したスプラヴェドリヴォスト・正義の力計画に、さらに対抗する計画を打ち出していたのだ。その計画のどれもが、いわゆる計画倒れてあることを考えると、もう、冗談だとは思えない。

しかし、今回はその成果物であるアルテミスが、テロを起こすための道具として利用されかかっていた。

ウエストポーチの中のスマートホンに突如、着信を知らせるチャイムが鳴った。

音からすると友人からのものだった。開くと、ゴルベンバエルのショートメッセージと共に、気づかないうちに山本教授からのものも入っていた。これは無視することは出来ない。どちらに先に返信しようかと少し迷い、やはり、教授を優先させた。

——ちょっと来てくれないか。

と、そんな文言が入っていた。

日曜日なのに、出勤しているのだろうか？ 芽衣は疑問に思いながら教授の部屋へと移動した。扉をノックすると中から「入りなさい」と返事があった。

(2)

芽衣は山本教授の立派な木製の執務デスクの前に立った。

壁の時計は午後四時半を示している。ショートメッセージが届いた時間からはかなりズレていた。しかし、日曜日でもあるし、メッセージを見逃したのではなく、どこかに出かけているのを、わざわざ呼び出したのだと思われているみたいだった。

「君い」

「はっ！」

「渋谷くんの件を知っていたのかね？」

「渋谷さんと言いますと？」

「大学のセクハラ委員会から呼び出し状を受けたらしいじゃないか。わたしの所にも問い合わせの電話とメールがあった。何か深刻な事態かと思う。現在、渋谷くんとは連絡が取れていない。君が何か知っているのではないかと思ってな」

「ああ。当研究室の卒研究生である荒木ののかさんに対して、セクハラ行為があったと訴えられたそうなのです。本人は、その事実は否定しておいでで、委員会の聞き取りに対しても否定しているみたいです」

「何？ セクハラ行為？ なぜ早く言わなかったんだ！」

「いや。渋谷さんは委員会で事実無根であることを主張すると言っておいででした」

「馬鹿野郎！ そんなことが出来ると思っているのか？ 元々セクハラや痴漢は証拠の要らない犯罪だ。証拠もなしに訴えているのに、言い訳など通るはずもなかろう。その後はどうなっているんだ？」

「ええと」

「肝心の渋谷とは連絡が取れない。荒木というのは誰だ？」

「荒木ののかは先日の中間発表で、先生からお叱りを受けた学生です。泣き出した挙句に山本先生からものすごい量の課題を出されたアレです」

「何だと！ わたしが悪いというのか？」

「滅相ありません。あれは彼女に問題があると思います」

「ふうむ」

山本教授が手のひらを机の上に置き、そして、突っ伏した。呻き声をあげながら。

「あの？」

「何だ」

「あのような場合はどうすればよかったのでしょうか？ 渋谷さんの的には」
 「どうもこうもあるものか。もう訴えを取り下げさせるしかないじゃないか。もっといいのは訴えを出す前に握り潰すことだった。今となっては時期遅れでしかないが」
 「ええと。例えば、卒業論文の決裁を条件に、訴えを取り下げさせるとかはダメですか？」
 「馬鹿野郎！ それこそ、そのまんまパワハラじゃないか！」
 「ああ」

芽衣も答えに窮した。
 「それに、訴えの詳細に関してはこちらには知らされていない。そんな圧力を封じるためだそう。判決が出た時に認定された行為のみ、本人と関係者に連絡があるそう。君、女性同士じゃないか。少しでいいから、何か聞き出せないか？ 内容によっては、交渉の余地があるかも知れん」
 「そんなに厳しいものなのですね」
 「学生を守るための最後の砦でもある。指導者と指導される学生の関係は、昔は絶対的なものだった。そんな時代の名残なんだ。君も心して当たってくれ」
 「はっ！」

芽衣はため息をついて、廊下をトボトボと歩いた。せっかくの休日。それが、こんな下らないことのために費やされようとしてたのだ。それに、先日来、取り組んでいた「アルテミス計画」のことも頭の中にずっとある。どっちが優先なのだろう？ 何度も、自問自答した。

もし、渋谷宗佑が「有罪」になったら？ それはそれで大変だった。教室の主任である山本教授にも火の粉がかかる。荒木ののかは何らかの理由をつけて追い出されるに違いない。勝っても負けても、敗北の道しか残されていなかった。

「あ！」

と、芽衣は気がついた。

荒木は何故、渋谷を訴えたのだろうか、その事情に想いを馳せた。

どう考えても、実利の点では全くメリットがない戦いなのだ。本当に性的な嫌がらせあって、退学してでも報復したいほどの屈辱を受けたか、それに近い心情があるか、その場合にしか訴えの利益は存在しない。渋谷は「全く心当たりはない」と言っていた。それはそうだろう。よっぽど魅力的な女性で、捕まってもいいから「エッチなことをしたい」と考えた場合を除き、彼にとってもいいことは少しもなかったのだ。それに、荒木はかなりの年齢だった。若い女子はいくらでもいた。

そして、である。渋谷は来年の三月末付での「博士号授与」という大きなイベントがあった。長い学生生活。学部で四年間、そして大学院での五年間の集大成だったのだ。こんな下らないことで退学になると、それが無に帰してしまう。

荒木ののかにそれだけの魅力があるとは、同性であっても思えなかった。

芽衣は研究室に戻った。

——少し念入りに調べよう。何か深い事情がありそうだった。

渋谷宗佑の席につき、彼のパソコンを立ち上げた。オーヴィルのものと同じく、やはり、かなりの高スペックのマシンだった。瞬間的に起動して、IDの入力画面に切り替わった。素早く打ち込みパスワードを入力する。

見つかる限りのファイルに目を通した。

確かに大学のセクハラ部署からの通知が、違う名前のフォルダに隠すように保存されていた。そして、荒木へのメールの数々。しかし、普通だった。研究内容に関わる指示と、その回答と。疑わしいものはなかった。消去されたのだろうかと思い、他のファイルにも目を通した。

完璧にセクハラに関する痕跡がなかった。

「待てよ？」

芽衣は突如、頭に浮かんだことがあった。

そして、大学のサーバーへと接続を切り替えた。こちらは、違法行為ギリギリのハッキングだ。セクハラ・パワハラ委員会は、大学内では独立した組織をとっているが、実際には教務課の中の組織だった。メンバーは専任ではなく、ここの職員と兼任している。管理IDはそこのものと同じだった。芽衣は通し番号になっている番号で使われていないものを使用して接続した。

「あ！」

と、気づいた。

セクハラの訴えは渋谷宗佑に当てられたものと、荒木ののかに当てられたものの二つがあったのだ。渋谷は荒木に訴えられ、荒木は渋谷に訴えられたいた。書類上の話ではあるのだが。多分、この二件の訴えは、別の職員が別の事件として調査をしていると思われる。芽衣は荒木に対する被害届を呼び出した。主要な文面はこうあった。

「被害者（渋谷宗佑）は、端末室で二人きりになった。加害者（荒木ののか）は被害者に体を寄せつけた。『冗談はよしてくれ』と被害者は言ったが、加害者は『ねえ、あたしとしたいんでしょう？』とどすの利いた声で言った。そして、さらに被害者の体に腕を回し、唇で体をなぞらせた。そして、被害者のズボンのファスナーを下ろして、その間から指を入れ、男性器を触った。『よせ、やめるんだ！』と被害者は警告するも、加害者は意に介さず男性器を触り続けた。『女に恥をかかせるの？』と加害者はさらに威圧的な言動をした。そして、触り続けた。被害者は耐えられずに声をあげ、再度やめるよう警告を発し続けた。被害者に性交の意図がないことを告げると、加害者は逆上し、『この〇〇野郎！』と発言し、部屋を出ていった。（注記：〇部分は不適切な言葉であるため伏字とする。具体的には男性器を侮辱する言葉）右記の通りの性的被害を受けたものである」

「ええーっ！」

芽衣は一人で声をあげた。

まるで昼間に男子学生が見ているエロ動画のようだった。

「おいおい」

芽衣は独り言を漏らした。

先日、荒木ノゾムについて行き、荒木の自宅に行ったとき、荒木のかは「裁判のことで調べに来たんですか！」と、過剰反応を示していたことに思いを馳せた。あれは、自分が訴えた分ではなく、そのことを知らないまま、自分が訴えられた裁判のことを指していたのだ。今、気づいた。

「待てよ……」

芽衣は渋谷と荒木の双方の普段の態度を思い浮かべた。

渋谷がそんなことをするはずがないし、荒木がそんなことをするとも思えなかった。この大切な時期である。今までの努力がフイになってしまう可能性がありありの行為だった。実際に、体が触れるくらいはあるかも知れないが、あからさまな猥褻行為など、どう考えても、双方にメリットはないと思う。よほど性欲が溜まっていたとするならば別であるが。それに荒木には、子供がいた。誰かステディな関係の男性がいるはずだったし、渋谷はそうはいかないかも知れないが、学内で性犯罪に手を染めるのはあまりにリスクだった。

芽衣は最初の訴えのメールを調べた。

主にヘッダー部分である。

「このIPアドレスって？」

これはこの間、マッケイ大佐のもたらした情報……アメリカ駆逐艦がミサイル攻撃を受けたのときに調べた分にあったものと、続き番号になっていた。多分、同じ組織のものだろう。

「これって？」

芽衣は、渋谷のパソコンと荒木のパソコンを調べた。何度も繰り返し、外部のアドレスからの繰り返しのアクセス履歴が残っていた。こんなものは大学のファイア・ウォールで弾かれるのが普通だが、この一連のアクセスは何回か成功しているみたいだった。

芽衣の頭の中で物語がつながった。

スプラヴェドリヴォストの計画に関わっていた科学者の後を追う作業が継続されたいと判断せざるを得なくなった。ゴルベンバエル・キキリシア・ドミザゴルゴンの情報ではソ連の崩壊で追跡は中断されていることになっていた。しかし、中断は崩壊後の混乱期だけで、その後は再開されていたのだ。

狙いは荒木だと断定してもいいだろう。

彼女の曾祖父であるミハイル・スコフスキーの後を追っていたのだ。

ならば、渋谷は……多分、その隣のパソコンを使用しているオーヴィル・ライトマンを監視していた可能性があった。オーヴィルが、S I S・戦略情報局の工作員だと知っていたことだろう。その両方が狙われたのだ。片方を突いて本体をあぶり出す。川中島の合戦の山本勘助のキツツキの戦法というのだろうか。

——そして。問題なのは、真実を誰も知らない所にあった。

その代わりにこの裁判が長期化した場合に、両者の学位やその先にある就職の問題が事実としてあった。荒木については、そのうちどうにかなりそうな気がする。家もそん

なに貧しい訳でもなさそうだし、大学中退としても、何とかなるかも知れない。ただし、芽衣の想像の範囲内ではだが。渋谷に関してはそうも言えない。博士号がそのまま、タクシーやバスのドライバーにとっての「第二種運転免許」に相当するものだからだ。ないと研究職としては食っていけないし、これを取る上でかなりの投資をしていたとも言えるのだ。一番大きな投資は「時間」だろう。学部を卒業した後に大学院で五年の歳月を要している。逆にいうと、年を取りすぎているがために、すでに大学教員という道以外の未来はないのだ。

三十歳手前。すでに新卒正社員としては成り立たない。

そして、芽衣は「訴状」の名前を見てびっくりした。

——荒木ののかの生年月日があり、それから計算すると彼女は三十四歳だった。

「まじですか？」

芽衣はつぶやいた。

本当だとしたら……でも、教務課がそう書いてあるのなら本当なのだろう。現役組の四年生とは干支が一回り上になる。そう考えると、渋谷より厳しい未来が待っていそうだった。

芽衣は脚を伸ばして背伸びをした。椅子のローラーが周り少しだけ後ろへとスライドした。その時、ウエストポーチの中でスマートホンの着信音が鳴った。ゴルベンバエルからだった。

「もしもーし。ゴルちゃん？　ごめん。メールをもらっていたわよね。さっき気づいてこっちから電話をかけようと思っていた所なの」

「それはいいのよ。この間の情報なんだけど、やっぱり、少し古いみたい。ちょっとだけ訂正させて」

「ああ。そんなこと気にしないで。もうどっちでもいいんでしょう？」

「それが……。あの後、空軍が偵察機を飛ばしているんだけど、情報を照合してみたの。あの潜水艦計画の」

「ええ？」

芽衣は嫌な予感がした。

この期に及んで、皆が皆、目に見えない敵に対してのカウンターパンチを繰り出してきているのだ。まさかとは思ったが、まだ、恐怖の連鎖が続いているのだろうか。

ゴルベンバエルは話を続けた。

少し、電話の音が遠くて、雑音が多い。

「ゴルちゃんてば、どこから掛けているの？　ちょっと声が遠いんだけど」

「内容がアレなのよ。盗聴を防ぐための専用回線を使っているの。情報がどうのというより、わたしの保身のためなんだけどね。それで、あの潜水艦のことなんだけど、ソ連の崩壊で計画が頓挫したことになっていたのだけれど、実は違うみたいなの」

「ええ？　まさか実在していたとか言うんじゃないでしょうね」

「その中間かしら。一旦、開発中止になっていたはずが、いつの間にか復活みたいなの」

「はい？」

「定期的に飛ばしている偵察機の写真解析では、黒海沿いのある場所で、建造途中の構造物が確認されている。実際には船台の上に組まれた足場と、キールのようなもの」

「キール？」

「竜骨とも言うんだけど、船の一番底にある鉄骨のこと。ただ、写真が不鮮明でどのくらい進んでいるのかは、よくわからないらしいの。もっとも、キジキスは内陸国で潜水艦の脅威を受ける訳じゃないんで、重要度は低いんだけど」

「それ本当なの？」

「潜水艦そのものかはわからないんだけど、写真にあるのは確かなのよ。こんな時は普通、危険側に推定する人と、安全側に推定する人がいるわよね」

「ううむ」

「ごめんね。曖昧で。それからさ、飲み会なんだけどさ」

「ああ、また電話するわ」

と、芽衣は通話ボタンをタップした。向こう側から何か話しているみたいだったが、それは無視した。あまりに聞こえにくい会話でもあった。

(3)

気がつくとパソコンに向かい始めて数時間が経過していた。

研究室の壁の時計を見ると、午後十時をさしていた。

「ううん」

と、声を出して椅子の背もたれに体重を掛けて背伸びする。今日、一〇回目の背伸びだった。ちょっと働きすぎかもと思った。しかし、実際には一円にもならない仕事だ。でも、それが正解かもしれない。時給を考え始めたら、情報活動など割に合わないことこの上ないことでもある。

ふと、「正義の力」の組織を監視していると、新たなファイルが用意されているのに気づいた。

「セクハラ委員会？」

昼間に見た、渋谷と荒木の「泥試合」の続報みたいなものなのだろうかと、芽衣はマウスを動かしてファイルの中身を確認めた。

「ええ？ 加村くん？」

加村雄一を被害者とする「不同意性交」に関する訴えだった。加害者の記入欄には黒澤芽衣とあった。

「何考えているのよ、こいつら！」

少し頭にきた。

これを削除してしまおうか？ あるいはこのデータサーバーごとクラッシュさせてしまおうか？ もっと……。色んなことが頭に浮かんた。しかし、この後に何らかの、いや、アメリカの実験潜水艦であるアルテミスの暴走が比較的に可能性の高い事案としてあったのだ。大事の前の小事である。無視しておこうかと迷った。でも、放置するとどうなるだろうか。実際に渋谷と荒木は「機能不全」の状態に陥っていた。多分、裁判が終わるまで何も出来ないに違いない。

しかし、せっかくのゴルベバエルの知らせだった。

芽衣はスマートホンをフリックした。こんな相談が出来そうなのは大使館のマッケイ大佐くらいだった。もしかしたらオーヴィルでもよかったかも知れない。

「マッケイさんですか？」

芽衣は恐る恐る繋いだ。しかし、こんな夜間にも関わらずすぐに出てくれた。

「実は、G7サミットの準備で立て込んでいますね。本国との連絡が多くて、今のところスタッフは二十四時間対応なのです。主に時差のせいなのですが」

「そうなんです」

そして、芽衣は手短に自分の所にある情報を伝えた。

マッケイ大佐は少し意外そうな声を上げた。

「旧ソ連の技術？」

「はい。アルテミス計画の発端となった『正義の力』計画です。でも、それもアメリカの『スターウォーズ』計画に対するものでした。まだ、そんな冷戦時代の名残があるんですか？」

「ああ。違う意味でしてね」

「違う意味？」

「もう、スターウォーズ自体が普通なのです。現代の宇宙空間は常在戦場です。偵察衛星やGPS衛星、敵の衛星を破壊するキラー衛星に、さらに敵のキラー衛星を破壊するためのハンターキラー衛星、さらに……」

マッケイ大佐の説明を聞くにつれ、芽衣は自分の認識の甘さを痛感した。

もう、何でもありなことになっているみたいだった。

「正義の力。確かにあの当時は脅威になっていました。しかし、ソ連崩壊で中断されたと認識しています」

「それが……」

「あなたの情報では違うということでした。その計画だけが残っていて、その組織が動いていると？」

「この間、アメリカ駆逐艦のJ. J. トムソンの攻撃の裏側を探ったではないですか」

「ええ」

「あの時の相手のIPアドレスと続き番号だったんです。同一組織だと思われます」

「それが、今回のアルテミス乗っ取りの犯人だと？」

「多分」

芽衣の情報はかなり曖昧なものだった。しかし、マッケイ大佐はかなり真剣な口調だった。信じてもらえる。言ってよかったと思った。

「芽衣さん。その組織はどこにあるかわかりますか？」

「場所までは特定できていませんが、多分、極東地域にあり、東南アジアの関係のないサーバーを経由させていると思います。しかし、通信衛星を乗っ取るか偽の信号を流せることから考えると、そんなに遠くではないと思います」

「目的は何だと思われますか？」

マッケイ大佐は本題に入った。

「現時点では二つ考えられると思うんです」

「聞かせてください」

「正義の力計画を頓挫させられたことへの報復がひとつ。そして、G7への出席者への攻

撃そのものかも知れないと思うんです」

「その根拠は？」

「実は……正義の力計画に携わった科学者が何人も行方不明になっています。ソ連崩壊の混乱時です。今回、その科学者を追っている可能性があるんです。それが一つと、もう一つはG7の出席者なんですが……オブザーバー参加でキジキスの大統領が入っています」

「ああ、あの件ですか」

マッケイ大佐は電話口の向こうでため息をついた。

元々、あまり、キジキスの参加に前向きではなかったみたいな言い方だった。

「あまり細かいことは電話では話せないんですがね。中央アジアの混乱を今回のG7で話し合う予定になっているんですよ。そのキーマンとなるのが、ゴリアス・ガロイラス・ガガリエル大統領なのです」

マッケイ大佐の説明は簡単だった。

中央アジアにある旧ソ連圏の国家であるキジキス共和国。

その隣国のマラライア共和国連邦では現政権による人権弾圧が行われていた。主に三〇年の長期に渡る現政権に対する反対運動が起こっていて、その運動を武力で弾圧していた。これに対して、西側諸国は一致して経済制裁を課し、マラライア共和国連邦からの入国も認めない措置を取っている。

その一方で、マラライア共和国連邦には豊富な地下資源があった。

主にレアメタルとレアアースだった。

これの輸出を禁止してしまったがために、中国とロシアからの出荷分に多くを依存する事態となっている。最近の自動車や半導体の出荷が遅くなっている要因でもあった。本音のところでは、人口五百万人の小さな国家であり、とっとと問題を終結させてしまいたいというのが各国の経済担当閣僚の意見だという。

「キジキスのガガリエル大統領が、西側諸国の首脳とマラライア共和国連邦の大統領とをつなげられる唯一の人物なのです。それゆえ、今回のG7サミットで西側陣営に引き込み、マラライア共和国連邦との中を取り持ってもらおうという思惑があるのですよ」

「ええ？ 人権弾圧は放置してもいいのですか？」

「いいえ。その代わり、G7ではキジキスを介してマラライア共和国連邦での早期の民主主義的選挙を実行させる約束をさせる。それを条件として、経済制裁の一部解除を実施する。そんな予定があったのです。しかし、大規模テロ事件でキジキスの大統領を暗殺されてしまうと、その話が根本から崩れる可能性があるのです。元々、独裁者と独裁者との話し合いです。彼に倒れられると、この落とし所がなくなるのです。そんな事情があります。今回のG7サミットではです」

「経済制裁が解除できない？」

「その恐れがあります」

「そうすると、レアメタルやレアアースが増産されて困るのが中国とロシアだと？」

「そこまでは言えませんが、その可能性は十分にあると思いますね」

「正義の力作戦での報復の線は薄いのでしょうか？」

「いや、どちらもあり得るでしょう。経済的メリットだけであれば、試作品とはいえアメリカ合衆国の潜水艦を乗っ取り、さらに原子力空母を狙おうというのは、あまりに大胆すぎます」

「そうですね」

「G7までに、そのサイバー攻撃を食い止められますか？」

マッケイ大佐の口調では、運よく行けばそれで構わない感じだった。

「自信はないですが」

「期待していますよ。ふふ」

「あの、もう一件確かめたいことがあるんです」

「何です？ アルテミスの性能ですか？」

「ええ。一体何者なんですか？」

「どう思いますか？」

「ええと。極めて静粛性に優れ、遠方のイージスシステム搭載の駆逐艦を一撃で仕留める能力を有する？」

「今回、S I Sのウィルバー・ライトマンからアルテミスに関する情報がありました。どうやら、C I AとD A R P Aが別々に動いていて、それが、全体統括がなされていない原因だということでした。あなたが言う正義の力計画で就役予定のロシアのブラボー級潜水艦への対抗策として開発されたようです。海軍へ納入されていれば、こちらでも把握していたと思うのですが、今回は国防総省にも何の知らせもなかったようです」

「そんなことがあるのですか？」

「秘密兵器にはたまにあるですよ」

「はあ」

「そうだ。これからこちらへ来られますか？」

「ええと」

「この時間です。無理にとは言いません」

「いや、大丈夫です」

「そう言うと思いました。セキュリティのためにこちらから迎えを出しましょう。秘書官のロナルド・アオキという者を行かせます。大使館ナンバーのアメリカ車が目印です。いいですね？」

「ラジャーです！」

三十分後、芽衣はアメリカ大使館の会議室にいた。

普段のマッケイ大佐の執務室ではなく、地下にある殺風景な部屋だった。壁にはたくさんの液晶画面が取り付けられていて、世界各地のニュースや天気予報を流し続け、机

の上に並べられたパソコンにも大量のデータが流れていた。

「G7サミット。何が起これると思いますか？」

大勢のスタッフがギリギリマイで働いている中、パーティションで区切られた一角、
その中でマッケイ大佐は深刻そうな顔で芽衣に尋ねた。

「アルミテミスはまだ取り戻せていないのですよね？」

「ええ」

「最初にスコフスキー博士やマッケイさんの心配されていた通りだと思いますよ。最悪の
事態は常に頭の隅に……」

「それはわかっています」

「でも、わかっているけど、対処できないのですか？」

「かなり困難な状況です。元々、ソ連の正義の力計画に対抗するための潜水艦でした。極
めて静粛性が高く、強力な武器を搭載している。正確な位置が未だ不明なのです。G7
サミットでの原子力空母への攻撃が確かなものならばという前提で、そのルートを警戒
しているのですが、情報は今の所ありません」

「ずっと気になっていたんですが？」

「なんです？」

「J. J. トムソンのことなんです。最新のイーグスシステムが搭載されていたと聞いて
います。どうして簡単にやられてしまったのかと」

「ああ」

マッケイ大佐は立ち上がり、会議机の上に並べられているパソコンのうちの一台の前
へと移動した。そして、芽衣に手招きをした。

「これがウィルバー・ライトマンから提供されたデータです。アルテミスの設計仕様書で
す。見てください」

潜水艦の細かな仕様については芽衣にもよくわからない。

しかし、最初に芽衣が言った通りに、本体の周りに電磁石を使用した磁気の中和装置
と、位相操作による消音装置が取り付けられていた。音や磁気センサーで探知できないの
は本当だった。サイズは少し大きめの四五〇〇トン。

「通常動力型です。しかし、大型のタンクをもち、過酸化水素とメタノールを燃料として
います。空気を必要とせず、四週間程度であれば浮上せずに航行が可能です。エンジ
ンを停止してしまえば、完全にセンサーからは見えない存在となります」

「武器は？」

「通常型魚雷と、もう一つは、開発中だったと思われるMk. 72 ハルバード・ミサイル
を搭載していると見られます。これは、樹脂のカプセルに入っていて、魚雷発射管から
打ち出すものです。発射からすぐは魚雷として進み、途中で浮上してミサイルとして目
標へと飛んでいく。射程距離は魚雷として一マイル、ミサイルとしては五〇マイルとか
なり長いのです」

「では、J. J. トムソンは魚雷だと思い込んでいたと？」

「通常では魚雷発射管の作動音を探知して、相手の位置を特定し、その後、対魚雷戦闘となります。しかし、魚雷の射程の遥か外の場合、自分への攻撃とはみなさないでしょう。その盲点の上に、あなたのいう魚雷との思い込みがあったのだらうと推測していました。そして、救助された乗組員からの証言もそれを裏付けるものでした」

と、マッケイ大佐は深刻そうな面持ちで俯いた。

6. 浦賀水道

(1)

午後十一時の会議室。

大勢でゴった返している中、芽衣はたくさんあったパソコンの一台を借りた。マッケイ大佐が横から覗き込む形だった。カタカタと大きな音を立ててキーボードを操作した。

「これが、九月九日時点での J. J. トムソンのいた場所です。確かにあたしも飛行機から煙を見ました」

と、芽衣は画面に展開させた太平洋全体を俯瞰した地図の一部を指さした。

「マッケイさん。この時に真上にいた通信衛星はわかりますか？」

「ふむ。……おい、軍曹！」

と、大きな声でスタッフの一人を呼びつけた。

「サー？」

彼はそう言った。

「すまないが、この時間の衛星の位置を割り出してくれ」

「イエス・サー！」

彼はすぐに自分の持ち場へ帰り、小さな箱を手にして戻ってきた。箱を開けて小さな USB メモリを取り出し、芽衣が使っているパソコンに挿した。そのまま操作して画面を切り替え、ログインしてから画面を操作した。

「これが、この時間の衛星の配置です。サー」

マッケイ大佐はじいっと画面を見つめた。

確かに宇宙空間は、もう何でもありと言ったのが嘘ではないと思われるくらいに多数の衛星が飛び交っていた。

「QX08号機とWT05機、KL038号機が、ほぼこの位置にあります。サー」

軍曹はそう言った。

「芽衣さん。どう思います？」

マッケイ大佐は腕を組み、芽衣に尋ねた。

「もしも……ですが」

「もしも？」

「犯行グループが『正義の力』だとすると、おそらく極東地域からアクセス。『リトル・エンペラー』だとすると、東南アジア、特にシンガポール付近にいると思うんです。衛星

へのアクセスはどちらかでも可能と思うのですが、マラライア共和国連邦の地下資源を巡る……いわゆるビジネスだとすると、こっちでしょうか？」

芽衣はQX08号機を指さした。

「完全なビジネスと割り切る？ 報復の線はどうでしょうか？ 能力的にも」

「『正義の力』は、実体のないフリをして相手を巧みに操作しています。もしかしたら『正義の力』も実体のない組織かもしれませんし、報復と見せかけたビジネス。逆にビジネスと見せかけて報復、そして、その両方と、どれもが疑わしいというのが実情だと思います」

「なるほど。今、ウィルバー・ライトマンがスコフスキー博士やDARPA関係者の身辺調査をしています。かつて葬り去られた『正義の力』計画の報復、彼らには姿を消した科学者たちの行方を追い、計画自体を復活させる目的があるのかも知れませんね」

芽衣は一呼吸して間を置いた。

「J. J. トムソンが大破する前に、アルテミスと量子通信衛星の間に『極秘の命令』がなされていたことがあったではないですか？」

「ええ」

「今回も同じ命令が出るのではないのでしょうか。例えば、原子力空母ベンジャミン・フランクリンの弾薬庫で核爆弾が奪われ、起動させられてしまう可能性がある。撃沈せよ。繰り返す。撃沈せよ。と」

「それはあり得る話だと思います。ただ、原子力空母の乗っ取りは物理的に困難だと思います。流石にアルテミスの艦長も不審に思い、どこかへ問い合わせをするのではないのでしょうか」

「J. J. トムソンの時です。外部から何度もアクセスを受けていて、何度もファイア・ウォールで弾かれていた形跡が一個だけあります。QX08号機です。もし、あれからアルテミスが浦賀水道へ進路を向けていたら、どの位置にありそうですか？ もしかしたら、今回もQX08号機が使われるのでは？」

「ふむ」

マッケイ大佐も腕を組んだまま下を向いた。

軍曹も箱を抱えたまま、心配そうな顔で横に立っていた。

芽衣も心配だった。ベンジャミン・フランクリンがアルテミスからのミサイルを喰らった場合、飛行甲板の上でセレモニーをしているG7各国の首脳とオブザーバー参加のキジキスの大統領が被害に遭う。キジキスの東京メンバーとも言える大使館員にも責任が及ぶのは明白だった。

「あの時には量子通信衛星の乗っ取りということでしたね？」

マッケイ大佐は俯いたまま尋ねた。

「量子通信衛星とアルテミスとの間の信号は原理上、盗聴は出来ません。しかし、地上の無線局と衛星との間は、通常通信ですと盗聴や侵入は可能です。こちらも量子通信の場合はダメですが。しかし、多分、地上と衛星との間は通常通信なのでしょう？」

マッケイ大佐は軍曹の方を見た。

「サー」

と軍曹は答えた。通常通信だということだった。

「この侵入のやり方だと、多分、リトル・エンペラーのハッキングの特徴と似ている気がします。しかし、リトル・エンペラーでは動機の面で少し薄い……もし、正義の力が背後で彼らを動かしていて、リトル・エンペラーをレア・メタル、レア・アース利権で釣って操っていたとしたら、かなり自然ではないかと思うんです。もちろん、リトル・エンペラー自身は操られているとは思っておらず、自分でこの利権を探し出して、この工作を仕掛けて金を得るのだと思い込んでいるのです」

「確かめられますか？」

マッケイ大佐は興味深げに尋ねた。

「リトル・エンペラーが貴金属や希少元素なんかを現物で買っているか、あるいは、先物相場場で買っているか、それがあれば、証拠となるかと思います」

「ふむ。こちらで調べてみましょう」

と言い、部屋の隅にある電話機に向かった。

しばらく話をし、そして、受話器を置いた。こちらに向かって手でグッドサインを作っ
て見せた。

「やっぱりそうでしたか？」

「ええ。こちらの情報部でも把握していました。彼らのダミー会社で大口の取引を数ヶ月前からしているそうです。ざっと五億ドル規模の買い入れだそうです」

「五億！」

これには芽衣もびっくりした。マッケイ大佐は続けた。

「そして、もう一つ残っています。正義の力とリトル・エンペラーの関係です。いくら高額商品でも、G7サミットそのものを攻撃するとか、原子力空母にミサイルを打ち込むとか、これは単なる金銭的利益だけではないでしょう」

「正義の力は、偽の情報でリトル・エンペラーを釣り上げた。通信衛星へのハッキングはかなり難度の高い技術です。しかも、正義の力そのものは、衛星への攻撃手段を確保するための開発プロジェクトだった過去があります。しかし、それが途中で頓挫した。なので、ハッキングそのものは、リトル・エンペラーのハッカーたちを利用することで代用した。そう考えると、通信衛星に送られたメッセージを解析することで、ある程度わか
かると思います」

「どんな風に？」

「まず、文章です。かなり米軍の通信に似せていると思います。それと、通信衛星QX08号との接続です。正義の力であれば、元々が電波兵器からのものなので、かなり米軍内での通信は研究され尽くしていたと考えてもいいかと。しかし、ハッキング自体はやはり、普段からやり慣れているリトル・エンペラーの方が得意なのだと思います」

「ふむ……」

マッケイ大佐は、また先ほど使った電話へと向かった。

少し、テーブルに腰掛けながら話しているのが、芽衣からも見えた。

「芽衣さん。国家安全保障局が、彼らの通信を傍受していました。相手を騙して利用しているのは間違いなさそうです。通信の一部は解読出来ていないそうなのですが、おそらく正義の力とリトル・エンペラーと見て間違いなさそうだという見解です」

「あの。こんなことを言っているのかわからないのですが？」

「会場のことですか？」

「はい。後藤室長はえらくお怒りでしたが、場所を変えることも検討に入れるべきだと思うんです」

「それについては、あれから国防総省と国務省の間でも検討されていました。しかし、テロリストに屈したことを表立って示したくはないという、あちらの事情があるそうです。あえて開催し、彼らの無能さを世間に知らしめたいとすら言っています。なので、変更は今のところかなり難しくなっていますし、もうG7サミットまでの期間がないのです」

「でも、アルテミスはまだ捕まらないのですよね？」

「彼らとて万能ではありません。現在の推定位置はある程度絞り込んでいます」

「一つだけ考えがあるのですが……」

「アルテミスを見つけ出そうと言うのではないでしょうね」

「それなのです。アルテミスは『完璧』な磁気を発生させています。地球のと同じ方向に。だから、対潜哨戒機の磁気センサーでも探知できなかった」

「そうです」

「スコフスキー博士から頼まれてアルテミスを探した時には、完全に見えないものでした。しかし、それはフィルターでもってノイズを除去していたためのものです。あの時の方法で見つかる可能性があります」

「そんなことが？」

「何もないことそのものが、その存在を証明している。それが今回の肝でした」

「ふうむ」

「もう一度、あの時の対潜哨戒機P3Cをお借り出来ないでしょうか。あのコンピュータであれば、あたしのプログラムがそのまま使用できます」

芽衣の提案にマッケイ大佐は考え込んだ。

不確定なことに、人員を割かなければならない。そして、アメリカ国内でも秘密裏に運用していた「旧式」の機体であった。

それはそれで、リスクでもある。

そして、二十秒ほど経過した。

マッケイ大佐はニヤリと笑をこぼした。

「出来ないでしょうか？」

芽衣は尋ねた。

「我々に出来ないのは、『我々には出来ないと言うこと』だけです。そのアイデアに乗りましょう。1パーセントでも望みがあるのなら、賭けてみるのが私の流儀です」

マッケイ大佐はまた電話へと向かった。

「それからもう二つあるんです」

芽衣はついと言わんばかりにアイデアを述べた。

うまく行けば、G7サミットを無事故で乗り切り、山本教授が後藤室長へ恩を売ることと成功するかも知れない。それはそれで、研究室の利益になることだった。後藤室長は総理大臣の右腕とも言われている。後で文部科学省への研究助成を得る話にも、乗ってもらいやすくなるに違いない。

「テロ組織のことですか？」

これにもマッケイ大佐は身を乗り出した。

「偽の商談を持ち掛けます。パラジウムなんかを売り込みます。相手が食い付けば、そこに活路を見出せると思うんです」

「パラジウム？」

「大量の……例えば1トンほどです。出来れば、今回のキジキスがマラライアとの仲立ちをするのを妨害して、値段が上がるのを前提に動いています。リトル・エンペラーがです。もし、手持ちのパラジウムが増えれば、その後の売却で多額の利益が見込めます」
「それは……そうでしょうね。でも、1トンものパラジウムなんて、この時期にどうやって手に入れるんです？」

「それを架空の取引として持ち掛けるんです。契約書を添付ファイルとして、開くとウイルスに感染するようにします。ウイルスはデスクトップのファイルをこちらへ送信するタイプのものです。これは、あたしが作ります」

「すると、リトル・エンペラーのアジトが判明するという訳ですか？」

「多分、シンガポール辺りにいると思うんです。場所がわかれば、そちらが動くか、現地警察が動くか出来ますよね？」

「なるほど」

マッケイ大佐は手元のメモにそれを書き記し、内ポケットへ入れた。

「もう一つというのは？」

「衛星を一つ貸してもらいたいのです。QX08号からアルテミスへの通信をこちらへ切り替えます。その情報は多分、正義の力へリークされると思うんです。ただし、身代わりの通信衛星にはこちらへの信号のコピー送信をしてもらいます」

「すると、正義の力がその身代わりの通信衛星からアルテミスへの偽の通信を行うということですか？」

「そうです。そして、その身代わり衛星を使って、こちらが相手を逆探知します。おそらくウラジオストック辺りだと思うんです」

「摘発はどうするんです？ 相手がロシア政府絡みだとこちらからは手出しが困難ですよ」

「こちらが手を出す必要はありません」

「どうやるんです？」

「逆探知した後に、正義の力の使っているデータサーバーに偽のファイルを仕込みます。『中央政府の転覆』を装ったものです。新たに手に入れた量子通信衛星を武器に中央政府

への電子的攻撃を行い、現在のヨシフ・マレンコフ大統領を失脚させる。そんな計画のシナリオです」

「ほほう？」

「マレンコフ大統領は脅威に感じるでしょう。これまでに、政敵が現れるたびに何らかの事件を偽装して相手を失脚させたり、暗殺したりしていますよね？　それが、自分に返ってくる。独裁っぽい政府ならではのジレンマと思うんです」

「なるほど。わかりました。情報部へ打診してみましょう」

マッケイ大佐はまたメモを書き記した。

(2)

二日後の九月十五日、火曜日。

朝から芽衣は山本教授に呼びつけられた。

「君い。困るよこれは！」

と、えらくご立腹の様子だった。もしかしたら、セクハラ・パワハラ委員会からの問い合わせがあったのかも知れなかった。しかし、芽衣は状況を手短に説明した。自分へのセクハラ委員会への訴えが事実無根であることを。

山本教授はうかない顔つきで宙を見つめた。

「全部、仕組まれたものなのです。先生」

「スプラヴェドリヴォスト計画かい？ 『正義の力』だって？ 本当なら内閣安全保障室へも一報入れておかなくてはならないんじゃないかな」

そう言って、ブスリとした表情になった。

「でも、今動くと、相手にこちらの動きがバレバレになってしまいます。こちらがある程度の情報を掴んでいて、それに対処しようと言う段階であることも」

「内緒にするのかね？」

「ずっとではありません。アルテミスが捕まるまでの一時的なものなのです」

「君はまだ知らないだろうが。この件は後に響くぞ。このご時世だ。失敗すると、君の研究者としての経歴に傷がつくことになるし、下手をすると、研究機関への就職にも影響が出ることもあるんだよ。今でこそセクハラだのパワハラ、アカハラとおしゃれな名前が付されているが、やはり『性犯罪者』ということからは逃れられん」

「はい」

芽衣も俯いた。

「渋谷くんのこともあるだろう？ 訴えられてから行動しても、すでに遅しとなることくらいはわかっているだろう。まあ、その点では相手の荒木だっけ、彼女も同じだと思う。なので、裁判で無罪を勝ち取るか、双方が訴えを取り下げるかしないと、あとあと大変なことになる」

「それはわかります」

「いや、わかってはいない。渋谷くんのことを考えてみたまえ。来春には名古屋工科大学への就職の内定を得ている。学位が取れたとしても、性犯罪者のレッテルが貼られれば採用を取り消される可能性が極めて高いことを忘れてはいかん。研究職であるとともに教育者でもあるのだ。これは致命的なことなんだよ。わかるか？」

「あ、はい」

「この荒木という学生も同じだろう？」

「えっと、彼女の就職先はどこなんですか？」

「ああ。決まっていないな。どうする気だろう？」

「ああ」

芽衣は何となく事情を察した。

いかに寛容な社会とはいえ就職状況はそんなにいいとは言えなかった。やはり、現役生でないとエントリーすら難しい所が多数派だ。問題ないのは、せいぜい一浪までだ。留年やその他は何か余程の理由がないと認められることは、やはり稀だった。

山本教授は椅子をくるりと回して、机の右手にあるキャビネットへ向かった。そして、ファイルを取り出した。ページを繰って、そこで手が止まってしまった。

「おいおい。荒木という学生、三十四歳だって？ 知っていたのか？」

「いや、あたしも今回の件で初めて知った次第です。学生の間の噂でも、浪人や留年でかなり年上だと聞いたことがあったのですが、そこまで年配とは知りませんでした」

「これは……」

流石の山本教授も言葉に詰まった。

いかに顔が広くても、この条件でどこかの企業へ押し込むのはかなり難しいと思われた。どこかの大学の助教や、研究機関の研究員など、年齢相応の場所はある。しかし、それは博士号があればこそその就職先だ。学士の肩書だけではどうしようもあるまいと思う。

たとい、今回の一連のドタバタ裁判をかわして無罪となった場合でも、年齢上の制約からの困難が待ち受けていた。

——しかし、そんなことは彼女も入学時から知っていてもよさそうな話ではある。

途中で留年したのは想定外かも知れないが、そうだとすると、現役プラス一、二年くらいであれば何とかなっていたのだ。そんなことは最初からわかっていたはずだった。

そう考えると、別の目的での入学だった？ そんな可能性すら疑われる。

現に、オーヴィルもウィルバーとしての顔と合わせて、スパイ組織の日本での活動のためにあえて大学院生を装っていたと思われた。

「君い」

山本教授がメガネの位置を指で直しながら口を開いた。

「はっ！」

「荒木という学生の実家は何をしているんだ？」

「それは先生がお持ちのファイルにあるのではないですか？」

「いや、母子家庭のようだが、母親の職業は記載されていない」

「ええ？ ではお祖母様は？」

「そんなものは最初から記載の欄すらない」

——なぜだ？ 芽衣は自問した。

荒木ののこの祖母の配偶者がソ連の科学者だというのは確かだった。芽衣が知っているだけでも、あれだけの物的証拠があったのだ。そして、その兄に当たる人が同じく科学者をしていて、米国へ移住している。

仕事をしていなくても、潤沢な資金を得ていた？

確かに、旧ソ連の科学者で、そこで得た技術や情報を外国の機関に売り込めば、そこそこの収入にはなりそうに思う。現に荒木の祖父の兄に当たるヨシフ・スコフスキーはアメリカへ渡り、そこで仕事にありついていた。情報を小出しにして、研究所の顧問みたいなことをしていれば、長い期間に渡り、悠々自適の生活を送れそうだ。

荒木の祖父であるミハイル・スコフスキーは横須賀で情報収集をしていた時に、ちょうどソ連崩壊という一大事件に遭遇したのだ。しかし、その後は荒木の祖母と結婚したくらいのことしか、前回の訪問では聞かなかった。もしかしたら、家族全員を養えるほどの収入があったのかも知れない。もし、荒木家がお金持ちであれば？ 経歴に花を添えるという目的のためだけに東都大学理学部を卒業するということもあり得た。

芽衣は研究室へ戻った。学生がいっぱいいる中、変なことは出来ない。

夕方になり、学生が一人、二人と研究室を後にした。

しかし、この時期である。すでに論文に着手したのもいるし、まだ、資料集めにのぼんと取り組んでいるものもいる。そして、急ぎの仕事のない学生、修士一年と博士課程の一、二年生だ。しかし、それは人にもよりけりだった。学位論文以外にも、書かなければならないものは数限りなく存在する。学会誌への投稿分だった。

かえってこちらの方が忙しいかも知れない。

芽衣は辺りをはばかりながら、こっそりと作業を開始した。

荒木の実家が何をしているのか。探りを入れるために、また、大学のデータサーバーへと接続した。

——授業料や実習費などの滞納は一切なかった。

そして、ノゾムと会った時のことを思い起こした。

派手ではないが、品のいい持ち物だった。趣味がいいと言うのであろうか。芽衣には縁のない世界かも知れない。でも、インターネット・ショッピングのサイトで検索をかけてみた。そのものではなくても、似たような商品があるはずだった。それで、どのくらいのものを使用しているのか、そこからある程度はわかる……と、思った。

しかし、それそのものはヒットしなかった。

それほどの安物ではないはずだ。

しっかりとした生地や素材。

「待てよ？」

芽衣は独り言を漏らした。慌てて、周りを見るが、斜め後方でパソコンで文書作成をしている学生がいるだけだった。こっこの独り言には目もくれない。

高価なもので、検索にもヒットしない。そのブランドの限定商品などの存在だ。

有名人のブログなどを探してみた。やはり、高価そうな品物には間違いなさそうだった。

「荒木ののかの祖母は何をしていたんだろう？」

芽衣はそこに引っ掛かるものが会った。

荒木が単なる四年生だったら、そこまで勘繰ることはなかっただろう。しかし、切っ捨ててみるにはあまりにも、彼女の経歴がぶっ飛んだものだったのだ。祖母が大金持ちで、自身は何をしていたのかわからないものの、三十四歳の女子大生。いや、すでに女子ではないかも知れない。そうも思った。

芽衣は研究室を出て階段の踊り場へ出た。

何となく嫌な気がして、ゴルベンバエルに電話をした。

「あのさ？」

と、芽衣は恐る恐る声をかけた。

「ああ、わたしも電話しようと思っていたのよ。G7サミットのことよね？」

と、ゴルベンバエルは率直な口調だった。

「ああ、それもあるんだけど、そっちにこの間のソ連の科学者の情報ってあるのかな？」

「それは.....あると思うけど。一応、キジキスもソ連の一部だったから。歴史の教科書からは削除されているけどね」

「この間のミハイル・スコフスキーってお金持ちなの？」

「ええ？ あはは、面白いこと言うのね。お金持ちだったら外国へ経済亡命なんかしないと思うよ」

と、彼女は「経済亡命」と言う言葉を使った。その通りだ。

「でもさ。ルーブルはなくても、他の換金物ってないの？ 土地とか宝石とか？」

「ああ。その線があるわね。でも、あの当時のことだからなあ」

「昔じゃなくて、二十一世紀になってからのことは？」

「ああ。ちょっと待ってね」

電話口の向こうで、カタカタとパソコンのキーボードを打ち込む音がした。そして、ピッという電子音と。そして、彼女の息遣いがした。

「ええとね」

と、ゴルベンバエルは声のトーンを低くした。

「うん」

「ソ連崩壊後に国営だった会社が、次々に民間に払い下げられた時代があったのよ」

「聞いたことある」

「その時にね、不当な安値だったとか色々問題にはなっていて、それが現政権への批判勢力のスローガンにもなっている。でも、当時としては何が何でも現金が必要だったという歴史的な面は否定できないわ。やっぱり、どんなに不利な条件でも現金化はしたいよね」

「うん」

「その時なんだけど。例のミハイルとヨシフ兄弟の母方のおじで、フィヨードル・ペシコ

フと言う人がいたの。国営の鉱山会社を買収して、その後に大手に育て上げているわ。でも、やっぱり、当時は会社を丸ごと買うほどの資金力はなく、友人との共同出資みたいな感じかな。で、その人には子供がいなかったみたいで、亡くなった時に会社の八パーセントの株式を残していて、それが、ヨシフとミハイルの所へ回ったみたい」

「海外にいてもいいの？」

「それは問題よね。でも、代理人を置くことでクリアしているんじゃないかな。詳しくは経済マターなんでわからないんだけど。でも、仮に四パーセントずつ分けても、配当金だけでもすごい金額じゃないかな」

「それって何の鉱山なの？」

「ええと。いわゆるレアメタル系っていうの？　パラジウムとネオジウムとその他いろいろ」

「ええーっ！」

「どうしてそんなに驚くのよ。それくらいはないとお金持ちにはなれないわ」

「そうなんだ。じゃあ、ミハイルの子供や孫にも？」

「遺産だからね。それはそうだと思うよ。でも、どこにいるのかな？」

ゴルベンバエルの言った通り、仮に日本にいても、ロシア国内に代理人弁護士を雇えばクリアできそうに思えた。芽衣はざっと株式の配当金を確かめた。四パーセントとはいえ、年間に五億円くらいはありそうだった。

そして、……現在は荒木の母親がそれを持っていた。

ロシア国内の鉱山利権である。今回、G7サミットの副題であったキジキスの大統領を消すことで、どちらかというと利益を守る側だった。マラライアのレアメタルやレアアースが市場に出ない方がいいのだ。東京でマッケイ大佐の手伝いをしている芽衣や山本教授、そして後藤室長らの妨害をするのは理に叶っていた。事実、この件では多くの労力を割く羽目になっていた。——しかし、あまりに手が込んでいる。もしかしたら、荒木も知らずに巻き込まれているだけかも知れなかった。

「それでさ」

と、ゴルベンバエルは自分の用件に話を振った。

「G7のこと？」

「うん。会議とセレモニーでのスーツとネクタイの色を、今、検討中なのよ。他の首脳とかぶっちゃいけないし、かと言ってあんまり派手なもの、品性を疑われてしまうし」

「ああ」

そんなつまらないことに神経を使っているのかと思わず口に出そうになった。が、その言葉を飲み込んだ。「でも、他の人って言っても七人もいるんでしょう？　かぶらないのもある意味おかしいわよ」

「ああ、それもそうか。でも、キジキスの民族衣装も検討されているし、ネクタイにしても伝統工芸のガロラン織って言うのもあるのよ。大使館としては、その販路拡大も任務なのよ。出来れば、かっこよくしたいわ」

「ふうん。そうなんだ？」

「それでさ」

と、ゴルベンバエルは続けた。

「まだあるの？」

「セレモニーの後の食事会のことも」

「え？ ゴルちゃんも参加するの？」

「もちろん。大統領の来日中は大使館が全面的にバックアップすることになっているの。それでさ。デザートをキジキスが担当するんだけど、この間のヤギのミルクをアイスにしようと思っているのよ。どうかしら？」

「ええと」

芽衣はゴルベンバエルのことが心配になった。下手をすると大統領だけでなく、彼女も空母と一緒に木っ端微塵になる可能性があった。とはいえ、乗るのをやめろとは、今の段階では言えなかった。ヤギのミルクは先日的大使館での紅茶に入れた分のことだろう。あれはあれで悪くないと思った。

「じゃあ。G7の大役が終わったら、絶対に一度会おうね！」

と、明るい声でそう言い、電話を切った。

(3)

芽衣が大使館のマッケイ大佐に情報を伝えてから二週間が経過した九月二十八日の月曜日の午後一〇時。以前に一度来た赤坂の軽食店の前に停められた大使館の公用車の中で、芽衣は後部座席に座らされ、マッケイ大佐の言葉を聞いていた。

「あなたの情報を元に、テロ組織を捜査しました。リトル・エンペラーですが、こちらの情報部と現地警察が動き、主だった工作員二〇名を逮捕出来ました」

「主だった？」

「組織のリーダーは取り逃しています。しかし、側近の二名を逮捕したことで当面は動きが取れないと想定しています」

「やっぱり、東南アジアだったんですか？」

「場所は機密事項なので明かせませんが、この度の協力には感謝します」

「はい。それで正義の力は？」

「スプラヴェドリヴォスト。正義の力も大方、片付きました。そして、意外なことが判明したのですよ」

「主犯格の男の素性ですか？」

「ええ。イワン・ブレジンスキーという男で、実は……」

マッケイ大佐の説明では、元のソ連時代にこの計画を担当した設計局の技術者の息子だという。ソ連崩壊時の技術者だと、もう息子の代になったのかと芽衣は時の流れを感じていた。スコフスキー博士も、ミハイル・スコフスキーの息子なのだ。そんな年代だったのかと思った。

「ロシアの連邦捜査局に協力する形での検挙でした。なので身柄はこちらにはありません。しかし、大方の力を削ぐことには成功しています。ただ、今後、ロシア側でこの計画を推進される恐れは残りますが。しかし、スプラヴェドリヴォスト計画で開発されるはずだった潜水艦に対抗する手段を、すでにこちらが手にしているので、それほどの問題だとは上層部は考えていないようです」

「そんなものなのですね」

「しかし、妙なのはイワン・ブレジンスキーの経歴でした」

「はい？」

マッケイ大佐は外部の音とは遮断された車の中で静かに話を続けた。

運転手は前に芽衣も会ったことのある、彼の秘書官のロナルド・アオキだ。この車内からの情報漏洩はないものと考えてのことだろう。

「設計局のメンバーは五十五名ということでした。そのうち、ソ連崩壊後に情報や技術資料を手土産にして外国へ亡命した者が三十五名います」

「そんなに？」

「ええ。ただ、亡命者のうち、アメリカへ来たのは二〇名で、スコフスキー博士の父親だったヨシフ・スコフスキーもその中の一人です。残りの二〇名はソ連崩壊後も国内に残ったと見られます。うち、責任者クラスの二名については当時の秘密警察に身柄を拘束された記録がありました。そこで監視下に置かれたまま一生を終えています。残った十八名はそのままロシア共和国で暮らしていました」

「するとその技術者の息子さんと言うんですか？ 父親からアメリカを恨むような内容を吹き込まれていたのですか？ だとしたら……」

「いいえ。設計局の情報統制はものすごく厳しいものです。たとい、家族と言えど、職務内容を漏らすことはあり得ない。そう、ロシア側の捜査当局へ確認しています。実は、ソ連崩壊後の経済の混乱期に十八名のうちの三名が、死因不明で亡くなっているそうでした。これについては、確認が取れていません。暗殺、病死、自死など考えられます。実際、当時の生活はかなり苦しかったようです」

「ああ！」

「わかりましたか？」

「そのイワン・ブレジンスキーさんが、父親がアメリカのせいで情報当局に暗殺されたと信じ込んだ？」

「その線が濃厚と思われるのです。取り調べでは、皆そんな妄想を語っていたそうです」

「でも、その人が逮捕なり拘束なりされた時点で、今回の事件は解決なのですよね？」

芽衣はマッケイ大佐の憂いを帯びた目をじっと見つめた。

「対応は手遅れでした。アルテミスへの最後の指令は、イワン・ブレジンスキーからリトル・エンペラーへと伝えられていました。もう、一日早かったら？ そんなことになっています。あなたのいう通りに通信衛星の身代わりを用意していたので、通信がなされたことは、かろうじて把握できたのですがね」

「スコフスキー博士はどうなったのですか？ 彼ならアルテミスを止められるのでは？」

「昨日、FBIがスパイ容疑で彼を逮捕しています。尋問が行われていると思うのですが、アルテミス計画の全体像を知る人物が誰もいないことが判明しただけでした。今回の彼の逮捕で、国防総省やCIAを始めとする情報機関が改めて衝撃を受けている所なのです」

「実体のないソ連の脅威に対抗するために、実体のない計画が実行され、実体のよくわからない成果物だけが残ったと？」

「ええ。しかし、ここで新たな問題が残りました」

「何でしょう？」

そこまでわかっているのなら、誰かがアルテミスを止めればいい。芽衣はそう思った。

「実は……」

マッケイ大佐の表情が強張ったのを感じた。

「誰にも止められないなんてことはないですよね？」

「そのことなのですよ。アルテミス自体が本当に存在するのか？ 国防総省やC I A幹部はそれを疑い始めました」

「ええーっ！」

「確かに駆逐艦のJ. J. トムソンがミサイル攻撃を受けて大破・炎上せさせています。しかし、それがアルテミスの攻撃によるものなのか？ それを疑問視されているのです。艦長を始めとする乗組員たちの証言はあるものの、それを裏付ける物証がないのです。それに、そもそもの議論だった『アルテミス計画』が本当にあったのかも疑問視する声が多数でした。誰にも知られずにそんな計画を推進するのは不可能だとさえ言い出す始末です。そして、わたしもそう思わざるを得なくなってきました」

「思っちゃっていいのですか？」

芽衣の一言に車内の空気が凍りついた。

「常に最悪の事態に備えよ。それがこちらのモットーでした。しかし、それを上層部が否定する以上、何も出来なくなりつつあります」

「あの？ どうしてあたしが今ここにいるんですかね？」

「実は、明日のG7サミットの予定はすでに崩せなくなっています。もし、アルテミスが本当に存在するのであれば？ その場合に備えて原子力空母ベンジャミン・フランクリンの航路を変更したり、時間を変更したりすることが検討されていたのです。しかし、今回の一連のテロ組織の摘発で、そもそも論が湧き出てきて、そのままそれが通ってしまった。そんな事態となっているのです」

「あの？ マッケイさんはどう思っているんですか？」

「実のところ、現場の人間としては最悪の事態に備えたい。その一心なのです」

「では、対応を？」

「ここからは、完全にわたしの判断で動くことになります」

——秘密機関が秘密裏に活動する。

そのまんまだった。

「大体の位置は？」

「浦賀水道の水深は七十五フィートから八十五フィートです。大型の潜水艦は潜航したまま通過は出来ません。また、使用される見込みのハルバードミサイルの射程は五〇マイル。ギリギリで使用するはずがないので、房総半島沖二十五から三〇マイルくらいだと想定していました。そして、四〇マイルの位置に今度こそ本気で、潜水艦狩りが専門の駆逐艦・J. フレンミングを待機させていたのです。しかし……」

「まさか、やられてしまったなんてことはないですよね？」

「実は……」

マッケイ大佐は言葉をにごした。

「ええーっ！」

「三時間前を最後に通信不能となっています。現在は哨戒機を発進させていて、現場付近を捜索中なのです。これも、公式には不慮の事故扱いですが」

「アルテミスを止めるにはどうしたらいいんですか？」

「出来れば、航行不能にして浮上させるのを最優先に考えています。乗組員がざっと八〇名いると想定されています。いずれもアメリカ合衆国の兵士です」

「簡単ではないと思いますが？」

「スチールのワイヤで出来た網を引っ掛けることで航行不能になるのではと、スコフスキー博士は言っていたそうなのです。方向舵や昇降舵に引っ掛けることで航行不能にする。そして、それは海軍で用意しています。しかしです」

「アルテミスの位置がわからない？」

「ええ。実はアルテミスを『本当に見た』人間は、芽衣さん、あなた一人なのです」

芽衣は背筋がゾットした。

確かに、先日、スコフスキー博士に騙されて乗り込んだ対潜哨戒機でアルテミスを発見したっぽいのは事実だった。そして、実際にそれを探し出してスチールのワイヤで出来た網で捕えるのだという。もし、失敗したら？ G7のセレモニーが行われている最中の原子力空母がミサイル攻撃を受けてしまう可能性が高いと言おうか、まさに実際に起ころうとしていた。そして、アルテミスの乗組員が八〇名もいると言うのだ。

「力を貸してもらえないですか？」

マッケイ大佐の表情は真剣だった。

ただの女子大学院生にそんなことを頼むのは、もうよっぽど切羽詰まっているのだろう。そして、芽衣も今回の事態に山本教授の指示も受けていなければ、後藤室長からのリクエストも受けていなかった。

「スチール製のネットを積んだヘリコプターを二機用意しています。あなたにお願いしたいのは対潜哨戒機に乗り込んで、アルテミスを探し出すことです。大体の位置はわかります。しかし、ネットをかけるためには三〇フィート以内の誤差で居場所を特定する必要があります」

「失敗したらどうなるんです？」

「最悪の場合、浦賀水道で原子力空母が大破・炎上することになりかねません」

と、マッケイ大佐はこれまでの情報を総括した。

7. 对潜哨戒機

(1)

二時間後の九月二十九日の〇時。

芽衣は厚木飛行場から飛び立った対潜哨戒機P3Cオライオンにマッケイ大佐と一緒に乗り込んでいた。以前に寄せられた民間機の塗装が施された機体だった。離陸の時間帯には全ての航空機の離着陸が全面的に止められ、最優先での離陸だった。

「ヘリコプターは先行して現地周辺海域へ行っています」

と、マッケイ大佐は芽衣の背後で言った。

芽衣は以前と同じく、大きな画面が並ぶ操作盤の前の特等席に座った。

偵察衛星からの画像などもこの部屋へ一手に集められていた。太平洋上に展開する全ての艦船の位置や、飛行中の航空機、そして、上空を飛ぶ敵と味方の衛星群。この場所で画面を操作するだけで把握できる。まさに「空飛ぶ司令室」だった。

午前一時半。

現場海域へ到着した対潜哨戒機P3Cは徐々に高度を下げた。そして、巡航速度から潜水艦を捜査する飛行モードへと切り替わった。周りは真っ暗で、漆黒の闇だった。それに反して空だけは星が綺麗に瞬いている。

芽衣はキーボードとトラックボールを同時に動かした。

「マッケイさん。この辺りなのでしょうか？ 緯度と経度は合っていますよね？」

「ええ。駆逐艦J. フレミングが消息を絶った場所の北西二〇マイルになります。海上の赤外線画像では付近を航行する船舶はなさそうです」

「あっ！」

「何か？」

「その方向に熱源が……」

赤外線画像にうっすらと温度を示す線が現れたり消えたりしているのに気づいた。

「もしかしたら？ J. フレミングの残骸かも知れません」

マッケイ大佐はため息まじりに言った。

「誰か残っているかも。救助しなくては……」

「今はそれどころではありません。作業を続けてください」

と、先日のスコフスキー博士と同じセリフを吐いた。

この業界の人間は皆そうなのだろうか？　冷たい人ばかりだと芽衣は心の中でつぶやいた。しかし、マッケイ大佐は少し違っていた。無線の送信ボタンを押して、付近を航行中の船を探し、乗員の救助を依頼していた。芽衣は少しだけホッとした。

磁気探知機の画面にわずかなノイズが走った。

あの時と同じだった。

確かめたが、確かに何もない……状態だ。

「これって？」

芽衣は画面の一部を指さした。

「何です？」

マッケイ大佐は画面を見ている芽衣の横に顔を近づけた。頬と頬がくっついた。しかし、そんなことで文句を言っている時間は一秒たりとてなかった。芽衣はキーボードを叩き、元の信号を表示させた。画面に出ている磁気の波は一度、電子的なフィルターを通ったものだ。地球の磁場に似せているのであれば、何らかの痕跡が残る……はずだった。

「どうです？　芽衣さん」

「いや……」

本物かどうかの識別は出来なかった。単なる海底の岩石による磁気の乱れなのか、何かあるのか、その区別はつきかねた。

しかし……である。前にスコフスキー博士とアルテミスを探した時に見た信号とは違う気がする。

「違いますか？」

「多分」

そして、P3Cは飛び続けた。

「芽衣さん。こちらに来てください」

と、マッケイ大佐は操作盤の背後にあるデスクへと手招きした。

芽衣は席を立てて移動する。大きな海図が置かれていた。そこに赤いインクでたくさんの線が書き込まれていた。恐らく、アルテミスの推定進路を探ろうとしていたのだろうことは容易に想像がついた。

「これが、これまでに判明しているアルテミスの出現ポイントです。とはいえ、実際に確認が取れた訳でもないのです」

「わかります。駆逐艦が攻撃されたり、通信衛星とのやりとりがあったと言うだけのものなのですね。ヒントにはなるかもですが」

「手厳しいですね。最初に行方をくらましたもの。通信衛星っぽいもの。J. J. トムソンにミサイルを発射した時のもの。そして、今回、J. フレミングを撃沈した時のもの。ほぼ、全速で航行していると思われます。ただし、こちらの探査活動の時だけエンジン

を停止しているらしく、若干の位置のブレがあります」

「なるほど」

海図上の赤い線は、ほとんど無駄のないアルテミスの進路を示していた。

速度を落とすのは探知されそうな時だけ。それ以外は潜航したまま二十五ノットの速度を維持していた。

「これって……。やっぱり、速いのですか？」

「通常動力艦ではあり得ない速度です。瞬間的には出せますが、これほどの長期間にわたってこの速度を保つのは不可能です。原子力艦では普通なのですがね」

「速度を落とす要因はアレですか？」

「ええ。その通りです。通常動力艦は普段はディーゼルエンジンを動かして発電機を回してバッテリーに充電しています。潜航中は貯めた電力だけを使わなければならないので、速度を上げられないのです。緊急時以外はです」

「やっぱり原子力の方がいいと？」

「そうです。空気がない状態で動力が得られる。それが強みです。しかし、同時に原子炉は止められないという諸刃の剣なのです。緊急時以外はです」

「ああ。なるほど」

つまり、本来の仮想敵だったスプラヴェドリヴォスト計画で製造されるはずの……。NATO軍での名称……「ブラボー級潜水艦」に対抗するに当たり、隠密性を極限にまで高めるために作られたのがアルテミスだったのだ。静かなること林の如しという孫子の言葉を思い出した。

「ブラボー級潜水艦も原子力ではなかったのですか？」

芽衣は素朴な質問を投げかけた。マッケイ大佐は渋い表情になった。

「最初は通常動力艦になるはずでした。隠密性を極限にまで高め、誰にも知られずにアメリカやNATO軍の活動海域へ忍び込み、有事の際にこちらの衛星を電磁波で破壊する。そのために作られたのです。誰にも見つからない。それが大前提の潜水艦でした」

「過去形になっていますが、それもアレですか？」

「ええ。実際には存在しない潜水艦だったのです。そして、アルテミスだけが一人歩きし、暴走した。これが今回の顛末です」

「その超高速と言うのでしょうか。予測ではこの海域に確かにいるはずだと？」

「そう想定していました。それを見越してのJ. フレミングの配置です。潜水艦を狩ることに特化した駆逐艦でこれまでも多数の実績がありました。こちらが最大限の期待をしていた所以です」

「そして、『確かに』J. フレミングは撃沈されたと？」

「皮肉ですか？」

マッケイ大佐の渋面に皺がよった。

「いえ、そんな訳では。確かにここにいることを確かめたかったんです」

「いや、怒ってすみません。協力してもらっているのに。推定位置は大体この海域に絞る

込まれるはずなのです」

マッケイ大佐は赤い線が特に集中している、まさに芽衣たちのいる海域を指さした。

「もう一度、スキャンしてみましょう！」

芽衣は元気を込めた。少しでも、この司令所へ立ち込める陰鬱な空気を和らげたい気持ちがあった。

芽衣の提案に従い、マッケイ大佐は内線電話で操縦士へと繋いだ。

「一度、旋回して同じ場所に戻ってくれ」

「ラジャー！」

スピーカーの向こうでは、命令を待ち侘びたかのような口調だった。

画面は相変わらず、目立った現象は起こらなかった。

地球の磁場と、磁気を帯びた岩石らしきものばかり。

「ああ！」

芽衣は声を上げた。

「見つかりましたか？」

横からマッケイ大佐が期待満面の表情で尋ねた。

「ちょっと思ったのですが、……。あたしたちが搜索していることは、向こうにはわかるんですよね？」

「ええ」

「どうでもいいのですが、どうやってそれを知のでしょうか？」

と、芽衣の率直な問いに、マッケイ大佐は意外そうな顔になった。しかし、すぐにはわからないみたいで、後ろの席に控えていたスタッフの一人に問いかけた。

「向こうも、こちらの磁気を検知しているらしいです。当初のDARPAスタッフの説明ではです。地球の磁場を金属が横切る時に発生するわずかな電流。それを磁気の形で探知できるそうです。本当かどうかはわかりませんが」

「やっぱり！」

こちらがアルテミスを検知しようとしている時に、同時に向こうもこちらを検知しているのだ。難しい技術だとは思ったものの、そうでもしなければ、たちまち対潜哨戒機の探知システムに見つかってしまう。それは、飛行機に対してもそうだし、敵の潜水艦に対してもそうだったのだろう。

そして、もう一つの謎があった。アルテミスが装備しているハルバード・ミサイルがどうやって敵艦まで誘導されているかだった。マッケイ大佐は分厚い資料を手にとってページを繰った。

「魚雷モードではアルテミスのソナーと自律式のソナーを使っています。音を拾って敵艦までついていくものです。そして、ミサイルモードでは海上へ出るまではソナーと、それ以降は衛星からの電波と自律式レーダー探知機の組み合わせとなっていますね。どちらにするかは、発射管制官のプログラムで決めるようです」

「なるほど。よく当たる訳ですね」

「皮肉ですか？」

マッケイ大佐はまたも渋面になった。

(2)

対潜哨戒機P3Cは夜通し太平洋上を飛び続けた。

午前三時を過ぎる頃、東の空が少し白んでくるのが窓の向こうに見えた。

「見惚れている場合ではありませんよ。もうG7サミットの時間までギリギリなのです」

マッケイ大佐は悲痛な面持ちとなっていた。

「一つだけ試してみたい方法があるんです」

「何か？」

マッケイ大佐は、芽衣の提案に一筋の光明を見出したいという希望がありありの表情を見せた。

「こんな時に聞くのもアレなのですが」

「何です？」

「ソノブイって高いんですか？」

「ええ？ 何をする気ですか？」

「もしかしたらと思うんです。アルテミスは磁気を中和して磁気探知機をごまかす能力があります。と、同時にノイズキャンセリング機能を使って、ソノブイの音響探知機も騙してしまいます」

「ええ、そうですよ」

「何個かソノブイを打ち込んで、探信音波を海中にぶちかまします。その時にですが、磁気中和装置の一部がノイズキャンセリング機能へ振り分けられると思うんです。そこに一つの可能性があると思うんですよ」

「同時に作動出来ないということですか？」

「アルテミスの探信装置の妨害機能は完璧とも言えるのですが、それを同じ電磁石でこなしているのではないかと思うんです。しかし、もし、別の電磁石でも、同時に打ち込むことで時間差が生じるはずなのです」

「ああ……。そう言うことですか。ああ、君？」

と、マッケイ大佐は背後にいるスタッフへ声をかけた。

「この機に搭載されているソノブイは特別仕様でして、通常型の約二倍の価格です。一個当たり一万五千ドルです」

と、彼はマッケイ大佐に答えた。

芽衣は頭の中で円に換算した。ざっと二〇〇万円だった。背筋がゾクとした。

「いや、芽衣さん。やってみましょう。元々、積んである装備は一回のミッションで使い切るのが前提になっています。五〇個でも一〇〇個でも構いません」

「ああ」

すごいお金の使い方をするのだなと、ある意味、感動ものだった。こんな予算の一部でも大学の研究費に回してもらえると、とも思った。山本教授が普段からお金に汚いことの要因は、予算の獲得がそれほど大変だということからだった。

「一度、高度を上げてください。それでアルテミスからの探知を振り切ります。その後、ソノブイを打ち込みます。音波をアルテミスに探知させるためのものなので、一斉にドカンとお願いします。その次に高度を下げて磁気探査を行います。いいですね？」

「やりましょう！」

「ラジャー！」

と、皆が返事した。と同時に機体は上昇を始めた。

マッケイ大佐は無線機のマイクを手を取った。

「アルファ・ワン、アルファ・ツー。こちらデルタ・ゼロ。聞こえるか？」

——ガガッという音と音声がスピーカーから聞こえた。

話の内容からすると、付近を飛んでいるはずの二機のヘリコプター宛の通信だった。彼らはアルテミスを捕獲するためのスチール製の網を装備している。次の探査で居場所がわかったら、その場でそれを投入するのだ。ヘリコプターは二機しかない。それが最初で最後のチャンスとなる。

「アルテミスが浮上した後はどうするんですか？」

と、芽衣は尋ねた。

「ヘリコプターにはそれぞれ五名ずつの特殊部隊員が乗り組んでいます。彼らがアルテミスの艦橋のハッチに取りついて、ガスバーナーで焼き切り、内部へ突入することになっています。捕獲に成功して浮上させられればです」

「失敗したら？」

「その時には、この機体から爆雷を投下することになっています。直撃はしなくても、船体に穴が開けられればという予定です。それにも失敗した場合には……」

最後まで聞かなくても、任務遂行に失敗した場合には、もうG7のセレモニー会場が火の海になることは確実だった。

「ええと。地球の磁場を五・〇GE一〇のマイナス五乗テスラ。ソノブイの音波が五〇〇ワット。減衰は対数カーブに沿うとすると……」

芽衣はポケットから取り出した関数電卓を叩いた。

「わかるのですか？」

「五〇メートルおきに投下して下さい」

「ううむ。よし。ソノブイ準備！」

「ラジャー！」

マッケイ大佐は芽衣の横に来た。共に海図を覗き込む。

「確率的にはこの赤いエリアだと思うんですが……」

そこには自信がなかった。追い詰められた潜水艦がどう動くのか？

マッケイ大佐は、顎に手を当てて考え込んだ。

「いいでしょう。そこに賭けてみましょう。駄目なら位置をずらせましょう」

そして、マッケイ大佐はマイクを握った。芽衣の目を見つめる。頷いた。

「投下！」

マッケイ大佐の合図でソノブイを次々と投下させた。機体下部の赤外線カメラで海上の様子が浮かび出された。ソノブイはパラシュートを開いて海面へ落ち、そして、切り離して着水した。すぐに最大音波が発せられる。

芽衣は磁気探知機の画面に食い入った。

相変わらず上から下への波が表示されるだけだ。

しかし、芽衣の目にはピンと来るものがあった。今度は綺麗に海中にあるものを浮かび上がらせた。やはり、磁気中和装置とノイズ・キャンセリングの電磁石は同時には効かなかったようだ。

「ビンゴ！ 座標設定します！」

「OK！」

マッケイ大佐が頷くのを見て、操作盤のトラックボールを回転させ、浮かび上がった位置を入力した。そして、マッケイ大佐の方を見て頷いた。

「アルファ・ワン、アルファ・ツー。こちらデルタ・ゼロ。設定した座標へ向かえ。スチール・ネット投下せよ。繰り返す。投下せよ」

芽衣はその横でマッケイ大佐のマイクを見て、そして赤外線カメラ映像に食い入った。

二機のヘリコプターは正確に設定地点の上空へつき、そこから機体下にぶら下げていたポッドを切り離した。投下途中に爆薬を作動させ、その勢いでネットを展開させた。すうっと海上へ吸い込まれた。

「先端の錘がうまく艦体に回り込めばいいのですが……」

マッケイ大佐は赤外線カメラ映像に食い入った。スチール・ネットは海中へと沈んでいく。そして数秒後。

「大佐！ 海中音に変化がありました。スピーカーへ繋がります！」

「うむ」

——キーンという探信音に被さるように、ギギギという金属と金属が擦れる音が鳴り響いた。まるで海中を進む、鋼鉄の鯨を絡め取ったかのような断末魔の叫びだった。

「かかりましたね」

と、マッケイ大佐は静かに言った。

「ふむ」

と、芽衣は相槌を打った。

「来ます！」

とスタッフが叫んだ。

芽衣とマッケイ大佐は固唾を飲んで赤外線カメラ映像を見つめ続けた。

海面に大量の泡が浮かんできた。

「あれは？」

「メイン・タンク・ブローです。バラスト水を圧縮空気で外に吐き出すんです」

泡と共に白い船体が浮かび出た。ちょうど、東の空が明るくなりそれを輝かせた。

真っ白な船体だった。潜水艦らしくない形状をしていた。艦橋は小さく、船尾のプロペラはついていなかった。ポンプジェット推進だ。特徴的なのは本体横に四枚のフィンがついていたことだった。——これがアルテミス？ おそらく白い塗装に小さなマークは、実験艦であることを示していると思われた。

「ああ！」

芽衣とマッケイ大佐は同時に声をあげた。

追いつけていたものが、まさにこの白鯨だったのだ。

二機のヘリコプターは降下しアルテミスの上に着き、特殊部隊員を運んだ。前部と後部のハッチをバーナーで焼き切る。そして、援護の一人を置いて残りの四名の二チームが艦内へとなだれ込んだ。五分後、無線で司令所の制圧を告げた。

「ふうっ」

マッケイ大佐は胸を撫で下ろした。

「アルファ・ワン。アルファ・ツー。こちら、デルタ・ゼロ。特殊部隊員をそのままアルテミスへ残して現場を離れろ。そろそろ空中給油機が合流する。高度を取れ。どうぞ」

「ラジャー！」

と、元気な声で無線が入った。

「アルテミスはこのまま近くにいる駆逐艦に曳航させ横須賀に入港させます。我々も引き上げます。こちら司令所……」

マッケイ大佐はそう言ってマイクを握り操縦席へと命令を出した。芽衣はふうっと全身の力が抜けた。

(3)

G7サミットは九月二十九日に会合と浦賀水道でのセレモニー、そして翌日に各国の合意事項の共同声明の発表が行われ、午前中に解散となり、無事に終わった。芽衣は研究室のパソコンのネット動画でそれを見ていた。山本教授は後藤室長と一緒に行動していて、大学にはいなかった。しかし、その日の午後、上機嫌で帰って来たみたいだった。マッケイ大佐はじめ大使館スタッフから感謝の言葉を告げられたようだ。おそらく、文科省に申請していた研究費の満額回答もあったのかも知れない。

そして、もう一つの問題が残された。

例のセクハラ裁判だ。

一〇月二日の金曜日、午後三時。

山本教授から呼び出しがあった。

「例の件だが……」

山本教授の言葉には、そんなに重大な雰囲気は感じられなかった。芽衣は不審に思った。これはある意味アルテミスより厄介だったからだ。

「君の分だが、加村のファインプレーがあったみたいだ」

「ファインプレー？ 何ですかそれは？」

「『僕は黒澤芽衣さんを愛しています。なのでセクハラは成立しません』と断言したそうだ。委員会の話では」

「ええーっ？ マジですか？」

「うん。本当のようだ。君たち、まさか付き合っていたのか？」

「いや、それはありません。やっぱり、加村くんのファインプレーです」

「うん。それでいいよ。問題化しなければ、結果オーライだ」

芽衣は右手で頭をかいた。嘘でも好意を向けられると照れてしまう。

「あの先生？」

「渋谷と荒木の件か？」

「はい。あっちはファインプレーの要素が一欠片もないと思うのですが」

「いや、あった」

「はい？」

そんなものがあるのなら、ここまで揉めたりはしなかっただろうと芽衣は素朴な疑問を抱いた。

「あいつらは卒業したら結婚するそうだ。愛し合っているんで、こっちもセクハラは存在しない。今までの被害届は勘違いでしたと言っていたらしい」

「ええー！ マジですか？」

「こっちは本当らしい。まあ、渋谷も荒木とそんなに年は変わらないんだろう？ 三十四歳というのには、わしもびっくりしたが、それはそれでいいと思う。どうせ、渋谷も就職したらすぐに縁談が持ち込まれるだろう。手間が省けたというものだ」

「やっぱり、結果オーライですか？」

「その通り。君に関してはこれから、この教室のスタッフとして働いてもらうことになる。よろしく頼むよ。はは。後藤くんも大使館のマッケイ氏も君を高く評価していたからなあ」

「あ、はあ。頑張ります」

としか言えなかった。いつからスタッフになったのだろう？ 少しはギャラをもらいたい所だと思った。

「それで、もう一つの件だが……。あっちはどうなったんだい？ 具体的な話は聞いていないんだ」

「はい。これをご覧ください」

芽衣は対潜哨戒機P3Cの窓から撮った写真をウエストポーチから取り出した。他のことは「極秘」とされ他言は出来ないが、これを上司に見せることだけが許可されていた。

真っ白で流線型の船体に小さな艦橋。艦尾のプロペラもなく、ただ、フィンが四枚ついていただけだった。

「ふうむ。まるでハーマン・メルヴィルの『白鯨』じゃないか。原題は『モビィ・ディック』だったっけ。差し詰めエイハブ船長はマッケイ氏だったのか。いや、スコフスキー博士だったのかも知れないな」

と、淡々と語った。

(※)

午後五時。

芽衣は品川駅の地下街にある「鯨屋」という高そうな居酒屋の前に来ていた。

少し心配になり、ウエストポーチの中から財布を取り出して中身を確認した。千円札が三枚と百円玉が五枚。先日到一个二百万円もする高額なソノブイを大量に投下したのとは大違いだと思った。——足りるだろうか？ 少し心配をする。

しばらくして、高校三年の時の担任だった浅川教諭と、クラスメイトの中原裕子が到着した。ゴルベンバエルに、放課後、勉強を教えていたのは主に彼女だった。芽衣は横で駄弁っていただけだ。

「おう。黒澤！ 久しぶりやな。元気しとったか？」

と、以前と変わらない関西弁で挨拶をした。芽衣は少しだけホッとした。

「はい。元気です。先生もお元気そうで」

「ああ。今日はお前らと酒が飲めるとは思わなんだ。すっかり年をとったなあ」

と、口にした。よく考えれば、高校を卒業して五年になる。年をとったのはお互い様だった。中原も浅川先生の関西弁に苦笑しながら横に立っていた。

「あ！ ゴルちゃん」

と、中原が声をかけた。幹事役なのに一番後からの到着だった。

「ごめん、ごめん。大きな仕事が終わって後片付けでバタバタしていて」

「ええわ。中に入ろうや」

と、四人は店内に入った。

あらかじめ、ゴルベンバエルが料理を頼んでいたらしく、予約席に通されるとすぐに突き出しが運ばれてきた。

「まずは乾杯と行きたいのだけれど、芽衣はお酒は飲めないんだよね？」

「うん」

「何や、つまらん奴やな。高校の時は知らなかったけど、そんな奴がいるんやなあ」

と、先生は素朴な感想を口にした。

ゴルベンバエルは手短に挨拶した。

「ええと。おかげさまで持ちまして、G7サミットも無事に終わり、我が国の大統領も上機嫌で帰国の途につきました。ええと」

「それは知っているよ。ゴルちゃん」

と、芽衣は答えた。

「実は……大統領から大使館スタッフへボーナスが出たの。今日は全部こっちで持つから、たくさん食べて飲んでください！」

と、嬉しいことを言った。

高そうなお店でもあり、メニューを見ると実際に高かった。素材にもこだわっているのが見た目にもわかった。そして、一番の推しはやっぱり日本酒だった。各地の銘酒を冷やで出してくれる。美味しい料理をおつまみにして、好きな銘柄を飲み比べる。最高だろうなと芽衣も思った。お酒はだめ。最初に飲んだ時にアレルギーが出て気分が悪くなった。それ以来、研究室のコンパでもアルコール類を口にしたことはない。

しかし、食べるだけでも楽しめた。全部が美味しかった。

芽衣は少しだけゴルベンバエルのことを羨ましいと思った。実際、研究室のOBでも社会人になれば会社の経費で飲み食い出来ることは知っていた。学生だと自前である。

(※)

月曜日、芽衣のスマートフォンにマッケイ大佐から連絡があった。

「実は、大使があなたのことを気にしてしましてね。ふふ」

と、意味深長な言葉を口にした。

「何でしょう？」

「山本先生には文科省の研究助成金の形で報酬の代わりとしたのですが、あなたには何もしていないことを気にしているのです。つきましては、ささやかではあるのですが、お礼をしたいということなのですよ」

「ええーっ！ マジですか？」

芽衣は嬉しかった。

「つきましては口座番号を教えてくださいませんか？」

「はい。ああ」

芽衣は残高のない預金通帳を机の引き出しから取り出した。そして、番号を伝えた。しかし、かなり長い間使用履歴なかったためなのか、凍結されていた。芽衣は仕方なく通帳とハンコを持って銀行へと出かけた。

口座を復活させ、スマートホンでマッケイ大佐と話しながらATMへと向かった。振込が成功であるなら入金情報が印刷されるはずだ。——ええと。もしもし。

喋りながらATMを操作して通帳に記帳した。

「マッケイさん？」

「はい。さっき振込完了しました」

「えっと。こんなにいただいてよかったのですか？」

「原子力空母と大統領たちの生命と比べれば大したものではありませんよ。では、また何かありましたら、相談に乗ってください」

「はい。それはもう」

芽衣は心の中で揉み手をした。

その時、ATMの辺りで待機していた銀行員に声をかけられた。

「お客様。現在、振り込め詐欺の対策をしています。そのお電話は大丈夫でございますか？ 知らない相手への送金は危険ですよ」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

と、芽衣は苦笑した。

ある意味、アメリカの情報機関からの入金など、もっとヤバいかも知れない。了

あとかき

あとかき

主人公の黒澤芽衣は東京の女子大学院生です。

元々は、二〇〇六年に発表した「東京大停電」に登場させたのが最初でした。当時は高校生でした。その後、他の作品にも、大学生、大学院生と立場を変えつつ登場させていきます。

著者の他の作品にもレギュラー登場人物がいるのですが、その中では一番古いキャラクターです。当時は「芽衣」という名前は新しめだったのですが、時代ともに段々と古くなってきた感じがあります。

作品的には「黒澤芽衣」のシリーズは国際冒険小説が多くなっています。

本作品では、開発中の潜水艦の通信設備へのハッキングによる暴走劇を題材にしました。当初のプロット段階では、東京湾での交通整理をしている「東京マーチス」へのサイバー攻撃でケミカル・タンカーを衝突させて、東京湾を炎上させるあらすじを考えていました。

しかし、途中で変更しました。

やはり、黒澤芽衣シリーズは起こりそうにないぶっ飛んだ設定の方が似合うと判断した次第です。

変なカテゴリの作品ではありますが、お楽しみいただければ幸いです。

<著者略歴>

大学院工学研究科・機械工学専攻修了、メーカーにて機械設計職として勤務後、フリーランスのライターとして活動中。「野生のライオン」（パピレス POP ノベルズ・2007年）でデビュー。現在に至ります。

深海の白鯨

著 者 黒川 文

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
